
剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

【Nコード】

N1121Y

【作者名】

松下星哉

【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。
バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話

第1話〜序章〜(前書き)

とりあえず、不慣れなので見づらいかもしれませんがご容赦下さい。

第1話／序章

プロローグ

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光ったぞ」

「何もこんな目出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そつとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人物、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ二番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張ってくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式というのは、この村の古くからのしきたりで、15歳になると元服げんぷくを迎えた、つまり一人前の大人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。

まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持てるようになったり村

の外へ出れるようになったり、だとか。ようやく旅に出れるなあ・・・
・
「つまり、そのことを踏まえていれば、いざというときにも・・・
トウヤツ！聞いているか!？」

「モ、モチロン」
聞いてませんでした。

「ふう。お前というやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。どうせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思ってない。」

と親父殿は苦笑しながら、
「明日には旅立つんだろう？しばらく帰ってこんだろうから今日はせっかくの祭りだし楽しんでこい」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行ってきます。」
俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語は始まる・・・話は12年程前に遡る。

（暦243年）

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいつ！やあつ！とっつ！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合いとともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降ってもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180？へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るうのは力任せじゃ駄目なんだ。ちよつと貸してみる。」
と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、諭すような口調で、

「いいか、トウヤ。人には体内に流れるオーラってものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるんだ。」

と、タチオは木剣を受けると同時に全身にオーラを纏いだした。

淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオーラを行き渡らせることで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる」

と、おもむろに目の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ドゴン！

そんな音がし目の前の大岩が真っ二つに割れる。

「このようにオーラを纏った武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」と説明する。

「まあ、いきなりやれといっても無理だろうから徐々に覚えていけばいいさ。まあ今日はここまでにしとこう。汗を拭いとけよ。」

そういつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・?」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からないといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話〜序章〜（後書き）

ご意見、ご感想あればよろしくお願い致します。

第2話〜旅立ち〜（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしれないかもしれません。

また、文章の拙さをご容赦下さい。

第2話 旅立ち

暦255年

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そっいや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかったな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しょうがないか」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤー！元気でやれよー！魔物に気をつけてなー！」

親父も心配性だな

「分かってるってー、父さん！それじゃあ、行ってきまーす！」
俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育った村を出た。この先起こるであろう様々な出来事に胸を躍らせながら。

く村の外く

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だろうか、俺は何と云うか困惑していた。

というのも、

「聞いているの？トウヤ？まずはこっちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ？」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此処に居るかということなんだが・・・ネク」
するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取って村を出てきたって言ってるじゃない！」

と軽くキレながら言ってきた。

たしかにこいつ（ネク・カナワ）の母ちゃん（アオイ・カナワ）の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせず旅の許可をくれそうだが・・・ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとつて所謂幼なじみってやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいかやたらと年上ぶってきやがるのがアレだが・・・はぁ・・・そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのは何で俺が村を出た後にお前が後ろから追ってくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前はもう少し早く村を出ることができた筈だろう？」

と俺が言つと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ？ただ、色々都合が合わなかったっていうか、気がのらなかったっていうか、

・・独りじゃ不安だったっていうか・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるっていうのに何が不満なわけ！？」
と逆ギレしてきた。

不満っていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じゃない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでももしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行ってそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるって話だしな。

「分かった、分かった。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言っつて、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽいが立っていた。

第2話「旅立ち」(後書き)

ご意見、ご感想、等あればよろしくお願い致します。

第3話〜遭遇〜（前書き）

いまいち行の間隔がつかめないので、読みづらいかもしれませんが
ご容赦ください。

第3話〜遭遇〜

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（といっても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165〜170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめつとした皮膚、明らかに人間ではなかった。

ネクが

「は、半魚人？」
と言う。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・
・・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、
『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。
だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えっとそこの奴、俺達に何か用か？」
と、俺が言うとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかっ！？」
何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかってくるわけでもないしな。それよりも今お前が喋ったことに驚いたが・・・」

俺がそう言つと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多いな」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」
俺がそう言つとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持っていることは長の話や人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐらいしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたかっただけか？」

そう言つと魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言つた。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者をかき集めて、当時存在していた集落毎に施していったものである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持ってきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ？確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に？」

と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺の好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番つかいが見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろう？だから交尾が見れると思ってつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃って通ったことはない。それが珍しくてつい近寄ったと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、な、何を言ってるのよあんたっ!? つ、つがいつ!? こ、こ、こ、こごうびっ!? な、なんであたしとこいつが番でこ、こ、交尾しなくちゃいけないわけっ!? 交尾するにしても、こ、こ、こっちだつて、段階とか準備とかそれなりに雰囲気とか必要なだからねっ!?」

「うん、落ち着け。微妙に論点がずれてるぞ。あー、それと魚民?。俺達は別に番でもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女っただけで、別にお前が期待することはなんにもないぞ。」

そう言うと魚民は、

「そ、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋れてよかったよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があったらまた会おうぜ。」

俺はそう言うと手を振って魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そうよね、そんなものよね・・・」

横でネクが小声で何かボソツと言ったようだが、俺にはよく聞こえなかった。

第3話「遭遇」(後書き)

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第4話 魔物 (前書き)

やたらと説明くさい話になりました・・・

第4話〜魔物〜

俺の村は名前をカリユウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持って行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしょうがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリユウ村の有名なモノと言えば二つありその1つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリユウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への士官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴って今は街

で悠悠自適に暮らしているとその人のお母さんは言っていたが。まあ余談だが。

もう1つの有名なこととは現在より何百年も前から、
『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神剣しんけんが刺さっておりそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得るだろう』

という確信めいた、冗談のような、『7神剣物語』（ななしんけんものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大陸初代霸王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神剣を追い求めたという話が残っている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある探索方法が見つかるまでは、神剣探索についてはずいぶんと下火になっていたが、その新しい探索方法により、神剣らしき場所に大体的見当がついたということで、現在街では神剣探索隊が編成されているらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神剣がある場所に近づくほど魔物が活性化するのではないか」

という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれを見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いということが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神剣が刺さっている可能性が高いのではないかとこの説が広まっていき、最南端にあるカリユウ村に何かしら神剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリユウ村が大陸で有名になったのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。
まあ、何故急にそんな事を思ったかといえは・・・

「トウヤ！なにポーっとしてんのよっ！右に回りこまれてるわよ！」
とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囲まれていた。魔狼とは、見た目は狼のような、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざっと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人であろうやく一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囲んでいた・・・10頭ぐらい。
いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しすぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギヤウンツ！！！」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルルッ」

「ウー——」

「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。
今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかられたら不味いな」
俺がそう言つとネクが、

「あんた何言つてんの！？あんたが有無を言わず切り捨てるから手持ちの食糧を蒔いてその隙に逃げようとしたあたしの作戦が台無しじゃない！」
と言つてきた。

「いや、そうは言っけどな？それは一頭二頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思うんだが・・・」
するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」
と焦った様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知ってるだろ？あの程度の数どうつてことないさ。」
俺が言つとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知ってるけど。あたしが言いたいの剣でどうにかなる数？つてこと」
と言ってくる。

そこで俺は漸く合点した。こいつへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかったっけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ・・・下がってる」

俺はそう言つと愛剣の炎斬^{えんざん}へと意識を集中させ始めた。すると・・・
「えっ？なにこれ、剣が光り始めた？」
ネクが言う。

「ああ、これが所謂オーラってやつだ。このオーラを利用することによって、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニルナ姉もオーラを使つてたぞ？知らなかったか？」

そう言つと俺はオーラを纏つた炎斬をネクへ見せる。ちなみにニルナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニルが？確かに昔から強かつたけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもっ！」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバツ！ザシュツ！バキツ！

「グオーツ！」

「ギャン！ギャン！」

「クウーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言つとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラって何かズルい・・・」
と結構心外なことを言っていた。いや、別にズルくはないだろ・・・
俺は軽く嘆息し旅を再開した。

第4話〜魔物〜（後書き）

不快感がなければそれでいいです。ご意見ご感想あればお願いします。

第5話〜温泉街〜（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

第5話〜温泉街〜

魔狼の群れと遭遇後、もう二日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町へとたどり着いた。

その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」

俺がそう感嘆の声を洩らすと、

「大きいね・・・」

と、横のネクが似たようなことを言った。

「いや、カリユウ村にも似たような形の門はあったけど、大きさが違い過ぎるだろ？」

そう、カリユウ村の入口にも門があるが精々3mぐらいの高さしかなかったが、この村の門はどう見ても10mはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違うだけあるね。あそこが守衛所かな？」

そう言っってネクが向かって右にある小さい建物を指す。

「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞ったっけ。」

俺は手持ちの頭陀袋に手をつ込み身分証明書を探す

「あつた。よし行くぞ。」と言って、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かった。

くイグナ町く

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。我儘を言う横のやつのために。

「もーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言ってる？温泉街は町の外れにあるって。そう直ぐには着かねえよ。」
としようがなしに俺は宥める。

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやってくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色んな商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだらう。

また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないか？」

それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。妙に熱気があるな。

「キタキタキターーッ」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味しい、チヒロ屋って宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。

これだけは外せるか。

「ええー。ご飯はどっちでもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが……うん、チヒロ屋を探そう！」

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。

いや、別に腹が減って機嫌が悪いとかじゃないぞ。

本当は温泉はどっちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思っ。さっさと行こうぜ」

上機嫌になった俺はネクを促し、早足で先に行く。

「そ、そうね。早く行きましょう。」
（危ない、危ない。そういえばこいつはご飯の邪魔をすると物凄く
機嫌が悪くなるんだった・・・それにしても匂いって・・・）
ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出して来た。
「助けて！」

そう言いながら私の後ろに隠れた。
年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをして
いた。

続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。3人ほ
ど。

「おいおい姉ちゃんよ、逃げることねえだろ？ちよっとお酌してく
れって言っただけじゃねえか」

真ん中の大柄な男が笑いながらそう言った。左右の二人も何が嬉し
いのか笑っている。

「嘘です！無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触ってきました
！」
その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃないの？」

右側の太った小柄な男が嬉しそうに言う。

左側の痩せてひよろつとした男が、

「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻ってこいよ。呑もうぜ？」と笑いながら言う。

「う、うちはお料理屋でそういったことは一切してません！」と女の子が必死になって言う。

「うるせえっ！こつちは代金払ってんだ！さっさと戻って相手しやがれっ！」

と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いつつ「あのー、この子も困ってるみたいなんです、あんまり無茶なことを言わないほうがいいんじゃないでしょうか？」

と遠慮がちに言ってみる。

すると、男達が顔を見合わせて笑いながらこちらへ、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ？宿屋で一緒に呑もうぜ。」

と真ん中の男が私に言ってきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行って下さい」

というと、何が嬉しいのか、

「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」

と言つて、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、

「おい、ネク！何やってんだ！早く行くぞ？」

結構先まで歩いていたらトウヤがこちらへ走つて戻つてきて怪訝そうにした。

「誰だ？こいつら？」

トウヤが言うので、私は

「酔っぱらい」

簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」

と言つと、

「あーん？なんだてめえは？この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すつこんでる！」

と凄んでいた。だがトウヤは、

「いや、おっさん、聞こえなかつたか？俺は手を離せつて言ったんだが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」
キレ気味に言った。

「こ、このガキイ！おいっ！このガキやつちまえ！」と後ろの二人

に言う。

「おいおい兄ちゃんよお。お前こそ人の楽しみを邪魔するとはどういっつもりだ？ああん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだっ！」

とひよろつとした男がトウヤに殴りかかったが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太ったほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐうう」

「ぼえええっ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女の子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！なにしゃがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあった。

「いや、なにっつて？殴りかかってきたんで、殴って蹴っただけだが？」

トウヤがキレ気味に言う「男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覚えたからな！覚えてろよ！」

と言いながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行った。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！早く行くぞ！もう腹が減って腹が減って・・・」

と、踵を返して歩きだす。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言うと、

「待って下さい！」

そんな声がかかった。

女の子は、

「あ、あの、ありがとうございます！おかげでたすかりました。」
と律儀に礼を言ってきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかったただだから、気にしないで？」
と私が言うと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あの
ー、もし良かったらご飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は
結構です」

女の子が私にそう言うと、それが聞こえたのかトウヤが振り返った。
目を輝かせながら。

これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・・・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し

「わかった、有り難くご馳走になるわ」

と、女の子へ笑いかけながら言った。

第5話〜温泉街〜（後書き）

ご意見感想などあれば、お願いします。

第6話〜仕事〜(前書き)

内容をぶっちゃけると説明の回です。

第6話〜仕事〜

目の前にどんどんお皿が積まれていく。

確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は……

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーっと目の前の状況を見ていた。

目の前には、

「うん！これは美味しいな イグナ地鶏だっけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合ってたやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しは遠慮ってものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、……もう10皿いってんじゃない！」

と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食ったか？美味すぎてついついおかわりしちまったよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このへんにしとくか！ごちそうさん！ありがとう、マーマー！」

と私、給仕の女の子ことマーマー・ナカヤに少年がお礼を言ってきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤサ

ん、よく食べられるんですね？」

ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが・・・

「そうか？何ならちよつと食い足りないぐらいだぞ？まあ、それだけ料理が美味かったってことだろ」
と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」
と、連れの少女ネクさんが言った。
さらに、

「何かごめんなさいね。大したこともしてないのにこんなにご馳走になって・・・」
と謝られた。

私は焦って、

「いえいえ、とんでもない！本当に助かりました。お礼ができて嬉しいです！あと、色々お話ができて楽しかったです！」

そう、お二人の出身地のカリユウ村の話や、女の子同士の話ができて、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合ったし。

すると、厨房のほうから、「そうだぞ、姉ちゃん！

あいつらは、イグナでも有名な質の悪いゴロツキどもだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちよつかい出してやがったんだ！俺が居る時は全然そんなことしねえのによ！」

と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガシユウ・ナカヤは言った。

(店主は見た目がいかついから、それを怖がっていつもはマーミに悪戯ができないんじゃないか)
俺は密かにそう思った。

(まあ、俺達も飯をご馳走になったから、結果的には良かった、と思っことにしよう)

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。

(昨日は結局、温泉宿屋には行かなかった。だって飯をご馳走になったしなあ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそうだったが、めんどくさいので無視した。)

それで、今探している場所というのは口入屋だ。

口入屋というのは、平たく言えば職業斡旋所あっせんで、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。

また、自分で仕事の依頼、人足の紹介にんそくを頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なもので、とりあえず今は関係ないが。えーっと、今の手持ちはと・・・795丸がんか。

もう、何日かは宿屋に泊まれるが、あんまり余裕はないな。

ちなみに、丸はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代霸王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経った朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。

作成場所は、これもまた鑄造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣鑄造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質が一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）

50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（銀製）

10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなっていく。

1丸は親指の先程度の直径だが、10000丸は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。

物価は、この町で料理屋での定食が一食50〜60丸、宿屋に一泊すれば200〜300丸といったところだ。

旅立つときに親父から1000丸ほど饒別にもらったが、このままでは宿屋に泊まれなくなってしまうので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あった。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリユウのより大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると

「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」

俺は言いその建物に入った。

「いらつしやいませっ！」

口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座った20代ぐらいの目もとのパツチリした髪の毛の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。

俺は、愛想よく笑いながら

「元気いいね、お姉さん？あんまりきつくなって稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」

と常連っぽく言ってみた。するとお姉さんは怪訝そうに、

「えっと？お客さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」

と言つので、

「ないですっ！」

とこちらも元気よく言ってみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、

「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願ひします。

それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙へいの下げからの仕事しか受注ができませんのですが・・・」

と本当に申し訳なさそうに言ってきた。するとネクが

「ごめんなさいお姉さん！このバカの言い方が悪くて。確かにこちらにお世話になったことはないんですが、別の村の口入屋で登録して何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言ってきた。
バカっってお前・・・

「あ、あーそうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんです。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うので俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せる。

「ほうほう、お二人はカリユウ村のご出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。

えっ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。

ほうほう、登録証を見る限りお二人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。

まあ、三年ぐらい前に登録して、色んな仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるってものだ。

ちなみに等級とは、下から丙へいの下、丙へいの中、丙へいの上乙おつの下、乙おつの中、乙おつの上、甲こうの下、甲こうの中、甲こうの上、甲こうの特上

と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がってくる。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低3つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだと思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兎（毛皮を採るため）を仕留めそこなったり、変な失敗を何回かしたせいだ。

大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、乙の下とかになつてくると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がってくる。

俺は手っ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのも期間が長いのも大丈夫ですよ？」

と丁寧に言ってみる。

ちまちまやって報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらっしゃるようですし、こちらなんかは如何でしょうか？お二人の希望に沿うことができるかと思われませんが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族きせきの村、探索隊募集！
集え強者つわもの！

未知の種族を調べてみよう！

参加資格：乙の下以上の等級者十名程度

参加期間：最短1ヶ月

報酬：お一人最低3000丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人：アズト・ミタラ』
と書かれていた。

第7話〜異変〜（前書き）

別の人物視点にしてみました。

第7話 異変

「首都カグツチ」

当代の第16代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどういうことだ！何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだっ！」

警備の者は何をやっている！他に被害は！」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしょう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。

年の頃は65ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身という経験に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は険しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。

私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で・・・その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はっ！事に当たった警備部隊長からの報告によりますと1隊と2隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですよっ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。

こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は23、高い背丈に引き締まった体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整った凜々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。

また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持つていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けっ！！街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じゃっ！」

儂が言いたいのは、何故ただか魔狼の群れ15頭程度に2部隊48人のうち怪我人が10人も出たかと言うことじゃっ！ましてやその内の重傷者が2名じゃとっ！

最近の警備兵は烏合の衆かっ！！！」

と、さらに怒鳴りつけていた。

すると、ガロウが若干気まずそうに、

「それに関しては面目次第もございません。

今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致しますっ！」

と答えた。

すると、シバは

「ふんっ！まったくっ！儂の若い頃の警備部は……………」

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。

確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは日頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵1人でも2、3頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ1部隊24人なら魔狼15頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第1部隊のみならず第2部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。

シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思った私は説教がうざいということもあり、声をかけてみる。

「シバツ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？

そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたっていきなり強くなるものでもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしれないがのう、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどうった警備兵にも責任はあるじゃろう？なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。

儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばかりじゃったぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねえ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねえ、ガロウ？」と横のガロウに話を振ってみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は15のうら若き乙女だ。父は現国王の第16代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えればそいつが王になるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言うのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思う。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整っている・・・と思う顔、贅肉のない引き締まった体、あまり大きくない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思う・・・)

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合っつて、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思えますので、訓練は増やそうと思えますっ！」
と言うので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？」

それよりも私が言いたいのは何故精鋭の警備隊が魔狼相手にそこまです傷を負ったってことなただけ。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？」

するとシバは、

「まあ、実は僕も最初そう思った。いくらなんでもそこまで苦戦するとは。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのう。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はっ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思っています……」

と歯切れ悪くなったので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦ってきた魔狼よりも数倍強かったです！」と言っておりました。

日付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をつけたところもあるでしょうが……」

と言った。私は、

「ふーん。数倍強いねえ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言うなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かったんでしょ？」

と言った。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも4日前か・・・直接は関係ないとは思うが、4日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告も入っておるな・・・こちらは何が起こったか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言っていた

「シバ？光ったって何が？どこが光ったの？」

気になったので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじやが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、4日前の夜にある場所・・・これは島じやな、島から大きな光が見られたという報告じや。ふーむ。」

と言うので、その話が気になった私は、

「とある島？どこなの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場所じやな。イグナの町から数10？離れた場所にあつて直接近くで見たわけではないが、その方角にはその島ぐらいしかないのでおそらくその島に間違いないじやろうという報告じや」

と言うが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？結界外なら人は住んでないんでしょ？何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思っ言つと

「ああ、人は住んでおらんじやろう。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかつたというその場所には、ある者達が住んでおるとい話じゃよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのう。」

と言つので、私は

「結界が張れなかつた？

ある者たち？どういうこと？」

と言つとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持った者たちに阻まれて張れなかつたと、文献で見ただけじゃ。

255年前、当時大きな力をもつた妖術師と呼ばれた者たちの力を持ってしても、それは叶わなかつたらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、あじん亜人だつたとい話じゃ」

と言つので私は、

「えっ！？それってもしかしてお伽噺とかに出てくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言つとシバは、

「そうじゃ。まあ、若干種別が違う気もするが・・・ともあれ、魔

物と違いそれら亜人^{あじん}などは滅多にお目にかかれんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておったよ」
とシバが言うので、私は興奮し、目を輝かせながら

「へえーっ！！亜人って実在したんだっ！！
すごいねー！！」

そこにはどんな亜人が住んでるの！？」

と言うと、シバはこう言った。

「その島のことは、こう書かれておったよ」

『鬼族^{まじやく}の住まう島鬼ヶ島^{おにがしま}』
と。

第8話〜島〜（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

第8話〜島〜

「いやー、予定人数には少し足りませんでした。それでもこれだけの方々に参加いただけるとは思いませんでしたよ！」

ワハハハ！つと走行中の蒸気と帆を動力にした船の先頭に座っている男が上機嫌にそう言った。

名前をアズト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言ったときに面白そうな仕事の依頼をしていた男だ。20代後半ぐらいで意外と若い。聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所を取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらった俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらったアズトの依頼を受けることにした（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合ってたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族きぞくっていう言葉にとっても興味が沸いたからだ。

どんな姿してるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色んなものをみたり、強くなったりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？とも思う。募集は10人程度とは書いていたのに俺とネクとアズトを入れても9人しか居ないぞ？予定人数に足りなくていいのか？まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待つてられない何らかの事情があるのか？

と、アズトの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかったとみえる。報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど尻込みするほどのものではないと思っただがなあ？」

と他の参加者を見回しながらいう。

最初の自己紹介のときもおっさんは文句を言っていたな。この程度の依頼内容で人が集まるのが遅いだのなんだの。

たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だったか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいないな傷がいくつもある顔に髭を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体40歳前後ぐらいか。得物はそばに置いてある槍だろう。

と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言った。

「い、いや、そうは言いますけどねレンジさん。僕たちみたいに依頼が始まってすぐに偶々口入屋さんに言った方は少ないんじゃないでしょうか。」

それにレンジさんだって丁度運よく中期の仕事が見つかったって喜んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をしていたことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。

こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも5〜6歳は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き締まった俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見つけている。確か俺と同じ乙の中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀か。

アズトが、

「いや、私も募集期間は長いかとは思ってたんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかつたので。

まあ、今回は募集期間をあまり長くしすぎても機を失なったら元も子もないので、早めに募集を打ち切りましたが……」
と尻すぼみに答える。

すると

「まあ、良かったんじゃないの？ 予定人数はほぼ集まったんでしよう？ この子達は見た目以上に役にたちますよ？」

それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思いますよ」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言った。

このお姉さん名前はリシナ・トゴウと言い、年は20代半ばぐらいで、見た目は肌の白いやたらと整った小さな顔に、色素が薄いのか茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気かとにかく色っぽい。

等級は乙の上で得物はまあ見たまんま弓だろうな、あと手元の分厚い本も何なのか気になるが……

お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほうの少女が

「そうよ！私たちが居るんだから何も心配しなくていいよ、ね！師匠！

おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。

二回言わなくても・・・

ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してみたいたいなんて年を聞いたら俺達の一つ下らしい。見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパツチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出ている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ弓か。

「わたしはまだギリギリ20代なのですが・・・おじさん・・・はあ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言う。

すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が

「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソつと言った。

こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒に等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？それとリシナさんが持つてるような本と似たような本が手元にあるが？あの本は・・・？

「ま、まあとにかくみなさんよろしくお願いしますよ！もうそろそろ島が見えてくると思いますので！」

と、アズトが大きな声で言った。

そのとき一番後ろに離れて座った男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」
その男は低い声でそう言った。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被っており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けている。

名前はミシル・タイナって言ったか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思う。兜を取ってないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。20代半ばから後半ってところか。

等級はこの上で得物は背中に背負った大剣だろう。

それはともかくこいつは今鬼と戦うって言ったか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考えているとネクが

「ねえ、ホントに鬼族って居るのかな？」

と言ってきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしすぎだろ、こいつ。

「多分な。会えるかどうか分からんが。古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ250年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。」

ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行っていないのか。行く価値すら無いと判断したのか？

いや、もしかしたら行った人も居るかもしれないが鬼族に会ったという記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話を聞いていたのかアストが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言う通り過去にも何回か行ったという記録はありますよ。」

ただ、それは海の途中で断念して引き返したりだとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。それで結果としては悉く鬼族に会えなかったということです。

かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、

「じゃあ、アストさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思っただけ聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアストが、暫く何かを考えるようにして、

「そう思われるのはごもつともだと思えます……ここまできたなら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。

そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」

と言つので俺は

「目的が違う？」

じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使つてこの依頼を行つたんだ？」

微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは

「それは島に到着してから話そうと思つていましたが・・・いいでしょう。今からお話しします。隠すことでもないですしね。」

実は今から約1週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見られたので光った場所は鬼ヶ島に間違いありません。それに何か不吉なものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人を募つて調べると私に命じたのです。

首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何かあるか居るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そういった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数以下で打ちきつたのです。」

と教えてくれた。するとネクが、

「えっと、じゃあ鬼族に関しては何もしなくていいということですか？」

と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からないため結局は島全体を調べてもらうことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えています。最低期間の1ヶ月とは島を調べながら回るのにそのぐらいはかかるだろうとのこととで設定しました。」

ネクが、

「わかりました。教えていただきありがとうございます。」

別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかったのですっきりしました。」

と言う。アズトが、

「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願い致します。つと、見えてきました。あのうつすら見えるのが鬼ヶ島です！」

と進行方向を見ながら行った。感覚的にはあと20〜25分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。

それから適当に雑談しながら15分少したった頃、俺達が乗っている舟は鬼ヶ島まで数百mの距離まで近づいた。

アズトが、

「あと5分ぐらいで島に着きます！みなさん！準備はよろしいでしょうか！」

というので、参加者が各々返事をしたり身支度をし始めたりした。

「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもはぐれないように・・・」

と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ドーーーーンッ!!!!

という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

第9話 大砲 (前書き)

少し間が空きました

第9話　大砲

それは唐突に起こった。

転覆こそしなかったものの乗っている舟は大きく傾き水飛沫が波となり舟を覆ったため、最初は何が起こったのかは一瞬分からなかった。

ただ、先程聞いた音と現在の状況を鑑みるに、乗っている舟そのものではなく、すぐ傍の海に何らかの攻撃を受けたのだということは分かった。

俺は舟の周りを見渡して、凡そ数百m後ろのほうに僅かに白煙を上げている舟が一隻見えた。

火の大陸では火の神剣の恩恵によるものか硝石がどの大陸よりも多く採掘される。

硝石はそのまま使わずに加工をすることによって火薬となり使うことができる。暦が始まる前ですらもほぼ全ての集落で加工方法は確立されていたのはこの大陸ならではの特性だとも言える。加工された火薬は様々な面で人々の生活に活用されている。

それは、日常生活において調理や風呂焚き、鍛冶などの火を使う作業の際に燃焼を促進するためというのが最も普遍的な活用方法であるが、一部の者にとっては別の利用方法がある。

例えば首都や街、大きな町などにある技術研究所では、過去の文献資料や遺物を基にした様々な研究、開発を行っているが（場所によって規模や求める内容の違いは勿論あるが）、その研究の中でも最

も急務とされるのが燃料、武器、この2つの確保、開発である。

まず燃料の研究の必要性とは何か？

それは移動の効率化、新たな移動手段の開発にある。

現在でも馬車などの移動手段はあるが、舗装がされていない山道等が各集落を繋いでいるため移動速度は決して早くない。辺鄙な場所にある村へ行く際にはその手前の村に馬車を預けることもあるぐらいいだ。

それゆえ一部の富裕層を除いて馬車の使用方法はあまり好まれていない。

そういつた現在の状況により燃料を優先的に研究するのは必然とも言える。

そして、かつて数千年前にあつたとされる文明においては移動について驚くべき記録が遺されていた。

それはこの広大な大陸を僅か2日程度で縦断していたというものだ。現在でこそ約二十年前に確立された蒸気船の移動速度により海上の移動においてのみ、大陸の端から端まで約10日程度でたどり着くことができるが（海上で運よく魔物に遭遇しないことを前提として）かつては陸路を通じて大陸を縦断するには最低でも半年はかかると思われていた。

なので、各村や町の交流、非常時への迅速な対処などの理由から陸路においての新たな移動手段の確保、移動手段への燃料の開発は最も急いで確立すべき分野だとされている。

（ちなみに実物や絵こそ遺ってないものの文献から推測された移動手段の形は、車輪が2つないし4つある本体に動物を利用せず燃料を利用した数人でいど運べる無機物、車輪を利用せず移動手段用の専用通路が確保された数百人が一気に移動できる燃料を利用した大きな無機物が検討されている。

前者は普遍性はあるものの移動手段である本体の開発における途中過程が行き詰まりまた燃料の確保開発方法に検討もつかない状態で

あり、後者は蒸気船の応用により移動の原理や燃料は解析可能なもののようにも思えるが実は、現在ある道の整備且つ移動用の専用道の確保が先ずは先だという、大きな問題点を抱えている。

武器の開発については、新たな移動手段の発展と同じく大きな規模で研究が進められている。

基本的にこの大陸で武器というのは、魔物との戦闘用のものをことを指す。

倒しても倒しても絶滅することのない魔物、その発生源や発生要因は魔物の分布図を作成する際にも不明だったという話だが、人を襲ってくる以上はそれに対抗する手段を得なければならぬ上に素手の格闘のみでは限界があるので、より効率の良い武器の開発というものは必須となる。

対抗手段の主流としては剣術だが、遠距離からの攻撃ができる弓、石や刃物の投擲（とうてき）も戦法としてよく使われる。（鉄鉱石の採掘、鍛冶屋、警備兵、等は安定して職が得られるためなるうとする者は少ない）

なので、剣や弓等の武器屋は大抵どこの村にもある。だが、戦いの手段を持つもの自体は、人口の多い街ならばともかく人数が少ない村などは少ない、もしくは1人も居ないというところがあるため、例えば大量の魔物に襲われたり不意に襲撃を受けた際の対応等が懸念されている。

そんな状況の中、20年程前に火薬を利用した武器の開発をしてはどうかという声が上がリ、数年前試作品とも言えるものが完成した。それが大砲である。

大砲が現在の形となった経緯は（まあ、実物を見たことはなく村に来た行商人に話を聞いただけだが）首都近くの沿岸に置いてあった奇妙な形の彫像を調べていくうちにその用途が推測され、昔の文献を調べるとその彫像、弾の作成、使用方法が載っていて火薬や鉄を使用し、それを基にして完成にこぎ着けたという話である。

大砲の利点としてはその大きな威力、非力でも使い方が解れば誰でも使えることにあるが、欠点としてはその重量により持ち運び、移動が困難なことにある。

また、技術的、予算的な問題により現在のところ首都にしか製造場所がなく、他の町への移動には時間がかかるため完成した数個は未だに首都にあるはずだが、とそこまで考えて声がした。

「ね、ねえ今のって・・・」

ネクが不安そうに言うので「大砲だろうな。」

俺が簡潔に言うと、

「やっぱり！でも、どうして!？」

このどうしてには2つの意味があると思う。つまり

「どうしてっていうのは、どうして海上に大砲があるのか。どうして俺達を、おそらくこの船を撃ってきたか、だな」

もう1つ疑問はある。

聞いた話じゃ大砲ってものの射程距離は最大で数十m、つまり視認はできるがあれだけ離れた距離から届いたのはどういう理由だ？

技術が進歩した？短時間で大幅に？あり得ないだろ。首都にある最先端の技術で漸く固定式、車輪式の大砲が完成したというのは、結構最近の、ここ数ヶ月程度の話だったはずだ。あり得ないだろ。いや、そんなことよりも、

ドーン！！！！

音がして今度こそ船に直撃したか、と思ったとき、船より約20m程手前で、砲弾らしき塊が空中で爆発した。見えな
い壁でもあるように。

「えっ、何今の？途中で止まった？」
「止まったな。どういうことだ？」

ネクと同様俺も全く意味が分からなかったので、だれか説明してくれないかとあたりを見回してみると、

「出来れば使いたくなかったんだけどね。流石にこの状況がしょうがないか。」

リシナが船の後ろ側、もう一隻の船の方向に両手をかざしながらそう言った。

よっぼど皆怪訝な顔をしていたのだろう（双子の姉妹は妙に嬉しそうだが）

慌てたようにリシナが続けた。

「つまり、大砲に狙われてると思ったので対衝撃用の不可視の壁を作ったんですよ。」

と照れくさそうに言った。と言われても・・・

「結界術の応用ってことよ！師匠は凄いんだから」
双子の姉アリナが胸を張って言う。

「結界術？つまり妖術か？」

俺が疑問に思い聞くと、

「古いなあ、言い方が。」

昔は確かにそういう風に言われてたけど、師匠は退魔師なの。だから厳密には退魔術って言うべきね！」
偉そうに言われた。

「成る程。どういう理屈か分らんが、その退魔術とやらを使って

砲弾を途中で止めたわけか。凄いな。でも退魔術つまり結界術は昔にその技術が失われたんじゃないか？使い手が居なくなってる」と言つと、リシナが

「ええ。確かにそうなんだけど、うちの家系は代々魔物退治を生業としていてね、様々な技法を研究していてその過程でかつて妖術と言われてたものの技術を確立したの。」

と言つが、そんなに簡単なものだろうか？

「まあ、とにかく助かりました。ただこちらへ攻撃した輩はまだあそこに居るので、取り敢えずどうしましようか？逃げられるかどうか・・・」

アズトがそこまで言つたところで、

ブオーーーンッ！！
ドルルルッ！！！！

と言つ音がした。

ネクと俺が、

「なんかあの船、どんどん近づいてない？」

「ああ、凄い早さだな。」

見ると先ほど変な音がしてから、船がこちらへ物凄い早さで接近している。

距離凡そ300m、200m、100m、50m、・・・

乗っているやつ姿が視認できるようになったので見ると見たこともない格好をしていた。派手な色合いの服、身軽そうな格好だ。

それに細長い筒みたいなものを手に持っているが、あれは・・・？
距離30m、20m、・・・

そこまで近づいたとき、

ミシィ！

という何かが軋むような音がして接近が止まった。

乗っているやつらが慌てたようだが、おそらく先ほどリシナが張った対衝撃用の壁にぶつかったのだろう。しかし結構な早さでぶつかって船に傷がないのはよほど頑丈な作りなのか？それにとんでもない早さだった。

あいつら（ざつと20人ぐらいか）が手に持った筒を此方へ向けた瞬間、

パンツパンツ！

という音が鳴り、見えない壁のあたりに小さい塊が一瞬止まり十数個の塊が海へ落ちた。

あの筒はつまり飛び道具か！火薬を利用した小型の大砲みたいなものか？

威力はいまいち分からないが・・・

「ダメね。そろそろ限界みたい・・・」

という声がかした。

見るとリシナが青い顔でつらそうにしていた。

「やっぱり、規模の大きな結界を張ると妖力まじまじをかなり使うみたい。」
と、しゃがみこんでしまった。つまり壁がなくなっただということだ。
あいつらは間違いなく敵だろうな。しょうがない。

「ネク、俺ちよつとあつちに行つてくるわ。」

と言いながら、オーラを全身に纏わせて身体の強化を行う。

そして20m程跳んだ。

第10話〜疑問〜（前書き）

ようやくとりあえずの目標十話を達成しました。

これもひとえにご愛読いただいている皆様のおかげです。

今後とも、よろしければ拙作にお付きあい下さい。

第10話 疑問

~~~~~

私は、私という存在を為すものを殆ど全て失った。

あの日から・・・

~~~~~

あの日・・・ウォルス王国、その王族を護る立場である護衛騎士、その隊長である私ミシエル・オルレアンはいつものように王宮に出向き責務を果たしていた。武官長会議、部隊編成の相談、王家の食事の付き添い、など本当にいつもどおりの1日だった・・・その筈だった。

だが、それは突然起こった。

いや、やって来たというべきか。

夕食も終わり、1日の責務も別の者との交代時間が近づいていた、ということもあり多少私の気が抜けていたということを差し引いても、私の動揺は護衛騎士隊長にあるまじき対応の遅れに表れていた。王宮内、しかも王の寝室の扉の前にそいつは立っていた。私よりも一回りは小さく見えるその全身を覆う黒いローブを身に纏い、その右手には銀色に輝く杖を持っていた。唯一見ることが出来る肌の部分、両手とフードに隠された顔の下半分は驚くべき白さだった。

如何にしてここに？という疑問、あまりにも唐突すぎる出現、ということもあったが、何よりそいつのあまりにも異様な雰囲気には立ち竦んだ。

明らかな害意らしきものを持ってその場所にそいつは立っていた。だがそれも一瞬のことで、

「何者だっ！貴様っ！」

と、私がそいつへ向かって言うとそいつは

「貴方に用はないわ。邪魔をしないで頂戴。」

と丁寧な口調で言った。

若い、まだ少女と呼んで差し支えない女の声で。

「貴様っ！ここがウォルス王の寝室と知ってのことかっ！」

私はそう言いながら背中に背負ったバスタードソードを抜いた。

「勿論。王を消す為にここに来たのだから。面白いことを言うのね
貴方？」

「貴様っ！！！」

言うと同時に私は約5m程度の距離を一気に飛んで詰め、剣をふり
おろした。
だが、

ギインツ！

弾かれた。

何も持っていないあの細い左手で。

「な、なに？」

今起こったことが信じられなかった私は、更に剣を振った。何回も。
何回も。

ギンツッ！
ガギイツッ！
ガインツッ！

しかし、全て左手に弾かれ、防がれる。

何者だ・・・いや、今はそんな場合ではない。

こうなれば、最も強力で速い技を出すしかないと思った私は、一瞬呼吸を整え・・・

「セイヤアツ！！！！」

銅を狙った高速の一呼吸での三連突きを繰り出した。

ギンツッ！ギンツッ！ギンツッ！だが、全て左手に全て弾かれた。

「ハアツ、ハアツ、まさかこんなことが・・・この私がこうも簡単にあしらわれるだ・・・？」

「ふうん。この国の剣技は中々のものね。消すのは少し勿体無いかしら。」

「き、貴様！消すとはどういうことだっ！？それに何故王の命を狙うっ！？」

「フフ、消すっていうのは分かりづらかったかしら？文字通り消滅させるのよ、この国を。何故？決まっているじゃないの、邪魔だからよ。王も国も。まあ、他の齒ごたえのないのよりは貴方は多少ましだったから残してもいいわね。」

と、少女は言いながら

「まあ、貴方とのお遊びに付き合うのは飽きてきたからそろそろ終わらせるようにしましょう。」

そう右言い、手に持った杖を此方へ翳しながら、

「フアング」

そう言った瞬間杖が物凄い勢いで太く長くなり、それが私の銅へ伸び私の身体は杖で壁に押し付けられた。

「ガハアッ！」

私はあまりの衝撃に声をあげながら、口から血を吐いた。

「あら、呆気ないわね。まあ、私の波動に触れながら戦えるだけでも大した腕だけどね」

そう言うと少女は杖を元の大きさに戻し左手を扉に向け、扉を吹き飛ばした。そして無造作に中に入っていった。

途端に中から、

「貴様、何者じゃっ！ミシエールッ！曲者じゃっ！ミシエールッ！」

というウォルス王の声が聞こえてきた。

「ウォルス王っ！」

お逃げくださいっ！！！」

倒れ伏した私は気力を振り絞ってそう叫んだ。だが……

「ぎゃーーーーーっ！」

という断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ウォルス王ーっ！」

それを聞き私はウォルス王の死を覚った。

少しして、

「ふう、お掃除終わり。」

と言いながら少女が部屋から出てきた。

「き、貴様よくも、」

私は倒れた状態で少女を睨み付けながら、そう言った。

「ふふふ。貴方しぶといなだけじゃなく精神力も大したものね。」

何故か嬉しそうに少女が私を見てそう言った。

「殺してやるぞ、貴様あ」

「そうね。そのぐらいの気持ちならいつか辿り着けるかもね。貴方なら・・・」

「何を言っ、グハア！」

よろめきながら立ち上がろうとした私を少女が杖で打ちすえ、私は意識を失った。

「まあ、貴方が生き残るかどうかわからないけど、可能性はあるわ

ね。」

少女は独りごちて、僅かに微笑した。

くくく

目が覚めたとき私は悪い夢を見ているのだと思った。何故なら目の前には、

「すつきりしたでしょう?」

後ろから声がしたが、

「な、なんと……い……う」

私は振り向かなかった。

何故なら、目の前の光景に目を奪われていたからだ。

「ど、どういうことだ……ここは何処だっ!」

私は混乱しながらも、後ろを振り返り少女に怒鳴った

「何処? 貴方の祖国でしょう? いえ、正確には元祖国と言ったほうがいいかしら?」

その声を聞き、私はさらに混乱した。

あたり一面火の手が上がり、建物らしきものすらないここが我が国だと?

バカな!

「まあ、信じられないのも無理はないでしょうね。でも、」

と、少女が言いながら自分の真後ろを指した。
そこには、先ほどまで自分が居た城があった。ウォルス城が。

「ウォルス城だ・・・と？」

驚愕に満ちた目で私は城を見た。何故なら、城の周りにあるべきものが何処にもなかったからだ。

「バカなっ！！これがウォルス城なら他の建物はっ！！町はっ！
城下町はっ！私の家はっ！」

「全部燃やしたわ。人々と一緒に。」

「ふざけるなっ！そんな戯れ言をっ！」

「信じられないのも無理はないけどね。こっやったのよ。」

と少女は言つと、城へ向かって杖を翳しながら

「ヘルブレイズ」

と言った。すると凄まじい規模のそれこそ城ぐらいの蒼白い炎が出現し、瞬く間に城を呑み込んだ。

「あ、あ、あ・・・」

「つまりこっういう風にしてウォルス王国を燃やしたっていうこと。
理解できた？」

私は目の前で起きたあまりに現実感のない出来事にただ呆然とした。

「あらら、分かりやすく説明したつもりだけど、驚かせたかしら？」

「き、き、貴様は、な、何者だ。な、何故こんな残虐非道な真似をするっ！！！」

「何故？先ほども言ったけど、邪魔だからよ。この国が。それに会いたいモノがあるから。私が何者っていうのは知らないほうが良いと思うわ。もし、いつか辿り着いたら自然と分かることだしね。」

「辿り着く？どういう意味だっ！？」

「そうね、可能性がある貴方には辿り着けるヒントぐらいあげましようか？」

「そう言うと少女は少し寂しそうな顔をした。そして、
「まず私は、人間ではないの。そうね、この水の大陸や他の大陸での呼称で言えば亜人とか鬼とかデビルとか呼ばれているわ」

「そう言つとおもむろに被っていたフードを捲った。
そこには、長く伸ばした金髪に青い目をした一目見ただけでは人間の少女と変わらない顔があった。
額から出た角を除いて。」

「まあ、見た目の違いと言っても角ぐらいだけだね。あと、年齢で言えば貴方の数倍は上ね。」

「貴様……何処からやってきた……？」

「言ってもいいけど……今の貴方には決して辿り着けないわよ。
それよりも、」

と、言うと此方へ杖を翳してきた。

「私を殺すつもりか？」

「まさか！折角可能性がある人に会えたもの。ただ今の貴方じゃ駄目ね。もっと強くなってもらわないと」

と、私の周りに光る文字が浮かび上がってきた。

「な、なんだこれは！」

「転送魔方陣よ。今から魔法で貴方を何処かの大陸に飛ばしてあげる。ちなみに貴方を倒したのも、城を燃やしたのも魔法によるものよ。」

「魔法だ・・・と？」

「そう。私は太古に失われた筈の魔法を使えるの。ひよっとしたら貴方も使えるようになるかもね。」

「ま、まで！私を何処へ！」

「さあ？まあ、人が居る大陸だとは思っけど。じゃあ、さよならね。再会を期待しているわ」

そして身体が光ったと思った瞬間、私は意識を失った。

目を覚ましたとき私は山中に居た。

そして人の悲鳴を聞いた。人が居ることと悲鳴の原因が気になりその場所へ行ってみると、1人の男が大きな一頭の熊に襲われていた。幸いなことに言うべきか私の騎士の鎧と愛剣は装備したままだったので、すぐさま熊を倒すことができた。

男に事情を聞いてみると、隣村に行商に行く途中に熊に襲われたしい。

現在自分の置かれた状況を把握するためその男と色々な話をした。どうやら、ここは火の大陸という大陸らしい。1日で様々な信じがたいことが起きすぎて頭が麻痺してしまつたらしい。疑うこともなく私はその話を信じ、他に当てもないので男と共に行動させてもらうことに頼んでみた。

用心棒が欲しかったらしい男は二つ返事でその申し出を了承した。

男の名はアズト・ミタラと言った。

~~~~~

3ヶ月程前に自身に起こつた出来事をミシエール（今は偽名としてミシル・タイナを名乗っている）は思い出していた。思い出す契機となつたのは先ほどの光景にある。

リシナと名乗つた女が見せた技、あれこそあの少女が使つていたような魔法ではないのか？

呼び方は違うみたいだが、共に人智を越えた力という点では似たようなものではないのか？

それに、トウヤと言つたか。あの少年は今、身体が光り普通では考えられない距離を跳んだが、あれも魔法の一種ではないのか。

この大陸には魔法が伝わっているのか？

当初アズトから鬼の巣窟に行く話を聞いたときはあの少女や魔法に

関して何らかの手がかりが得られるかもしれないかと思っただが、思わぬところから手がかりが得られそうな感触があり、ミシエールは密かに唇を歪めた。

くくく

船に飛び降りた途端乗っている奴らが手に持っている筒を俺の方へ向け、何かを飛ばしてきた。火薬の臭いがしたので、おそらく大砲を小さくしたような物だと俺は見当をつけた。その武器らしき物からはかなりの速さで塊が飛んできた。だが、オーラで強化している俺の身体には傷一つつかない。すると、

「何故だっ！何故大砲も銃も効かないっ！！」

と、1人の男が言った。

「と言われてもな。大した威力じゃないしな。全然効かないが。むしろお前らに聞きたいがお前らは何者だ？あと何故俺たちを狙う？」

俺が聞くと、男は

「貴様のような小僧に話すことはないっ！死ねっ！」

と、懲りずに手に持った筒（多分銃というのだろう）を此方に向けて、塊を飛ばしてきた。だが、

「いや、だからその攻撃は効かないって言ってるだろ？そんな無駄

なことをするよりも」

と、塊を弾きながら俺は剣を抜きその男を斬った（手加減は一応した）

男は倒れ、他のやつは驚いた顔をしていた。「俺達を攻撃しているつもりなら俺は降参を薦めるぞ。」

と言いつつさらに近くに居た数人を斬った。

「質問に答えないとどんどんお仲間がやられるぞ。」

そう言うところの中で一番歳上らしき男が答えた。

「俺達は探索者だっ！失われたものを探している。貴様らを襲ったのは先を越されなないため排除しようとしただけだ！」

「探索者だと？失われたものとはなんだ？それにお前らの技術だ。」

この船は何だ？何故大砲がついている？それにこの船はいったい何故あんな速度が出せる？」

俺は気になっていたことをまくし立てた。

「この船はレヴィアス国で最新鋭のモーターと武器を積んでいる。失われたものとは太古の・・・」

男はそこまで言って後ろの男達と何やら話しだした。

「キャプテン・・・どうやって・・・」

「・・・手持ちの武器だけじゃ・・・」

「逃げるにも・・・」

「・・・いつそのこと・・・」

と話してくる声が聞こえる。俺は、何となく納得できず、

「つまりこういうことか。お前らはとあるものを探している探索者で、それを手に入れるため目的の場所つまり鬼ヶ島に行こうとしたところ、先に俺達の船が見えたんで先を越されまいと、この大砲を積んだ船で攻撃してきたというわけか。それにしてもレヴィアス国とは……?」

と言った。

「あ、ああそうだ。だが鬼ヶ島だと?あの島は何らかの加護を受けているはずなのだが?」

「加護?ああ、加護という言い方をするならこの大陸は火の神剣の加護を受けているぞ。」

と俺が言うと、男は

「火の大陸だと!?バカなっ!?そんなはずはっ!?な、なら……我らは……間違っただというのか……」

驚愕に満ちていた。

「ん?火の大陸ならまずいのか?」

不思議に思い聞いてみると

「貴様には関係ない!」

と、焦っていた。その態度に軽くムカついたので、

「そうか。何を間違ったかよく分からんが残念だったな。ただ、別に心配しなくていいんじゃないか？」  
軽く深呼吸し、

「お前らはここで全滅するんだから、なあっ！！！！」力を込めてオーラを放ってみた。

結果、

グオオーっという音とともにオーラの奔流がその船の男たちを襲った。

~~~~~

直接怪我こそしないまでも、その少年から迸るプレッシャーにより我が船の乗組員達は立つこともままならなくなっていく。
これはなんだ？圧倒的な力を感じるが・・・このままでは目的を果たせないまま・・・それだけはっ

決して目の前の少年に勝てないことを覚った私は、

「まで、まってくれ。君達に服従する！だから助けてくれ！」

命乞いをした。

すると、

「へえ、判断が早いな。」
プレッシャーが止んだ。

「まあ別に殺す気はなかったけどな。」

そう言うと少年は無邪気に笑った。

「とにかく、あんたらの存在とか目的とかが分からなさすぎる。服従とかはどうでもいいが、知っていることを全て喋ってもらおうか？」

「あ、ああ。私も知りたいことがあるしな。勿論話そう。」

こうなったら仕方がない。本来他国の人間に言うべきではないが……あの島にはあれは存在しない可能性が高いが、命を失うよりはましだ。まあ、殺されなかったかもしれないが……

「とりあえず、その手に持つてる物は渡してもらおうか？」

「勿論だ。そもそもこんな物では君に傷一つつけられないしな。おいつー！」

私は、乗組員に銃を渡すように促した。それを袋に入れ少年に全て手渡した。

「俺より遥かに色々な知識を持った奴があつちには居るからあつちで話そう。あつちまで船を寄せて乗ってくれ。あんたに危害は加えないから」

「ああ、分かっている。ただその前に一つ聞かせてくれないか？」

「ん、なんだ？」

「先ほどの君の力、あれはいつたい……？」

「ああ、あれはオーラだ。一応説明すると、オーラっていうのは人が体内に秘めたエネルギーのことだ。それを体外に出し自分の力として肉体を強化したり、具現化したり、放出したりするなど色々な使い道がある。」

「そうか、あのプレッシャーはそういうことか・・・それで銃も効かなかったのだな。」

「やっぱりあれは銃っていうのか。それはともかく俺もあなたに聞きたいことがある。」

「なんだ？この期に及んで隠し事はしない。」

「先ほど言っていた（失われたもの）とは一体何だ？気になるんでとりあえずそれだけ教えてくれ？」

なるほど私は頷いて、

「その失われたもの、というのは、つまり太古に存在していたとされるものだ。」

「太古に存在していた？」

「ああ。実物を見たことはないが、私の国レヴィアスでは建国当時よりそれを崇めている」

「崇める？つまり火の大陸で言うところの神剣みたいなものか？」

「神剣？七つの神のことか？」

「そうか・・・火の大陸では剣として伝承されているのか。まあ、どちらが正しいのかは判断のしようもないが。」

船が少年の船に接した。

「いや、一人で頷いてないで説明しろよ。何を崇めていたっていうんだ？」

「神だよ。ただ火の大陸と違い、剣ではなく獣だがね神獣しんじゅうと呼ばれるものだ」

「神獣？」

「そうだ、神獣レヴィアタン、水を司るとされている伝説の獣だ。」
「そこまで話したところで、私は少年と共に少年の船へ移動した。」

第11話〈探索者たち〉（前書き）

大した違いはないですが、サブタイトルが今までより少し長くなったりします。

第11話 探索者たち

~~~~~

『大いなる守護者により、この地は護られている。』

かつて大地は荒れ果て、海は猛り、およそ生物と呼べるものはその存在さえ叶わなかった。

だがある日、この地に神が舞い降りた。巨大な水龍に姿を変えたその神の御力により、川は流れ出し、大地が潤い、生物が生まれ落ちた。この地と肉体を分けた彼の6大陸と共に。

我らは決して忘れてはならない。今こうして我らが在るのは水神の御加護によるものだということを』

レヴィアス国聖書より抜粋

~~~~~

「つまり、その祈禱師きとうしとやらの御告げに因って、貴方達はこの島を目指して来た、というわけですか？・・・しかも私達を略奪者と勘違いして攻撃してきたと？」

アズトは憤慨しながらそう言った。まあ、怒るのも無理はないだろう。こちらからすれば、いきなり大砲をぶっぱなされて殺されかけたのだからな（リシナがいなければ間違いない船に直撃していた）

言われたガルディアは、

（先ほど自分のことをレヴィアス国レヴィアタン探索団団長ガルディア・ソーイと名乗った）

「そのことに関しては申し訳ないとしか言い様がない。だが、我が国が置かれた状況も察していただけると助かる・・・」

若干すまなそうに言い訳がましく言うが。口だけならなんとでも言えるからな。それにしても、

「まあなんだ、その隣国のウォルス王国だっけか？そこが一夜にして壊滅、いや消滅して、早急に対応策を練る必要性があるっていうのは分かるが、他にやりようがなかったのか？」

と、レンジが疑問に思ったことを言った。

「他に、と言ってもな・・・我が国の王や知恵者、科学者などが全員で相談しても一体何が起こったのか見当もつかない様子だった。」

ガルディアは答える。

が、俺は改めて考えた。

そんなことがあり得るのだろうか？

聞いたらウォルス王国というのは、国土こそ火の大陸の5分の1もないが、人口は約10万人程度しかも文明は明らかに火の大陸より進んでいるであろうレヴィアス国と遜色ない程度だったということだ。建物も木造はあまりなく土を練った硬く燃えにくく崩れにくい材質だったらしい。

もし、ガルディアの話が本当だったとしたらどうやってそんな状態になったのか全く見当がつかないというのは理解できる。

「襲われたことはともかくとして、あの島に何かありそうなのは確定だな。」

俺はそう納得した。いや、おそらく俺以外も皆納得している。が、

「いやいや、それは確かにそうかもしれないけどっ！でもこいつらはあたしたちを殺そうとしたのよっ！」

ネクがガルディアのほうを見ながら興奮した様子で文句を言う。

「まあ、そうだけどなあ。でも、こうやってみんな無事だったし。それに正直鬼ヶ島で何があるかは全然分かってない状態だから少しでも戦力はあつたほうがいいと思うぞ？しかもレヴィアス国の技術は大陸に持ち帰ったら丸を稼ぐよりも割がいいんじゃないか？」

「うっ……」

俺の説得（？）によりネクは納得できたのか口をつぐんだ。すると、

「いやあ、それにしてもトウヤさんがあれだけ強いとは思いませんでしたよ。」

アズトが妙ににこにこしながら言った。

アリナが、

「そうね、ちょっと離れててよく見えなかったけど、それでも凄い速さで動いてた。何人も一撃で倒してたし。いきなりあの距離を跳んだときは一瞬何が起こったか分からなかったよ。」

と、言った。

俺はそこまで本気でやったわけでもないし驚かそうと思ってやったわけでもないのだが。とりあえず一件落ち着いたからよかつたんじゃないかな。

横でガルディアが苦虫を噛み潰したような顔をしているのはさておいて、

「まあ、さつさと行って片付けたほうが安全だと思ってやっただけなんで。それよりもリシナさんのほうが凄かっただろ？」

「師匠はねえ。確かに凄いけど、もうその凄さに見慣れたってどうか・・・師匠なら間違いなく何とかしてくれるっていうか・・・特に驚くことでもないんだよね。」

そう誇らしげにリシナのほうを向きながら言った。

「私も大砲ぐらいなら何とかなると思っていましたからね、退魔術で。ただ、防いだあとはどうしようかと考えてなかったので助かりました。」

此方を微笑みながらリシナがそう言った。

「まあ、こいつらの処遇に関しては、降伏したんだしこのまま上陸して一緒に調査をしたあとで考えたらいいんじゃないかねえか？」

レンジがそう言うと、リクオが、

「そうですね。ただ単に割のいい仕事だと思ってたら雰囲気は怪しくなってきたんで、仲間は多いほうがいいですね。」

と言った。話を聞くうちに光の正体がいよいよ得体の知れないものに思えてきたのだろう。神獣って。

俺も神獣をどう調べればいいのかさっぱりだしな。

「ああ。此方は殺されても仕方ないぐらいのことをしたので、殺されないのなら勿論協力させてもらう。正直な話を言えば大幅な戦力増強になるのでとても助かる。」

ただ・・・」

ガルディアが言いにくそうにしたので、

「なんだ？」

レンジが促すと

「島内を調査したあと、もしその光の正体がレヴィアタンだったら、我々を解放してくれないか？国に戻りどうしても報告しなくてはならない。」

勿論相応の見返りは支払う。現在、我が国は大変押し迫った状況にある。平たく言えばいつ得体の知れない輩に襲撃されるか気が気ではないのだ・・・だからどうしても結果を報告する必要がある。」

「うーむ・・・どうするよ坊主？」

レンジが何故か俺に振った。坊主って。俺はそんなに子どもに見えるのか？

確かに、実際に降伏させてこの船に連れてきたのは俺だから分らないか・・・しょうがないな。

「いいぞ、ガルディア。解放してやる」

「ほんとかつ！感謝する！」

「ただし、俺も連れていけ。他の大陸それも文明が進んだ大陸を見てみたい。」

「あ、ああそれは構わないが、あの最新式の船でも片道で約1週間かかるぞ。国でも用事を済ませるのに少なくとも10日ぐらいはかかるからこちらへ連れ帰るのは一ヶ月ぐらいはかかるぞ。いいのか

「？」

「ああ、構わない。」

「あたしも行くっ！相棒のあたしも忘れないでよね！」

急にネクが言い出した。相棒ってお前・・・この仕事が済んだら別行動しようと思ってたが、別に断る理由がないな。

「だそうだ。ガルディア、いいか？」

「大丈夫だ。」

「あのー、私も連れて行ってもらえませんか？それともう一人。」
今度はアズトが言い出した。ガルディアとミシルのほづを交互に見ながら。

「アズト？あんた仕事はいいのか？」

「いや、むしろ稼ぐために行きたいんですよ！そもそも水の大陸まで行くにはカグツチにある最新式の蒸気船でも片道一ヶ月は早くてもかかりますからね。それに伴う費用が尋常じゃないのですよ。ガルディアさん、あの速度と大きさの船なら少々の荷物は大丈夫ですよね？」

「ああ、人があと何十人か乗っても余裕がある。その点については問題ない。」

「じゃあ、よろしく願いますっ！」

旅費やら護衛費がかからずに莫大な費用を使わずにいける、とか言うアズトの声が聞こえてくるが、気にしないことにした。

ガルディアがミシルを見て

「その男もだな．．．全部で4人か。まあ、こちらとしては断われる立場でもないし、特に問題はないのだが．．．それとは違うちよつとした疑問というか謎というか．．．」

言つべきが言わざるべきかという風にガルディアが言い淀んでいたの、

「どうした、ガルディア？どういうことだ？」

聞いてみると、

「いや、な。その男、もしかしたら水の大陸の者ではないかと思つたのだが。」

と、ミシルを見ながら言う。

「何故だ？」

「うむ。先ほど言つた水の大陸の国の1つウォルスの騎士があつた男が持っているような大剣を好んで使つていたからな。ただウォルスはもうないし移動手段やウォルスの国交を考えてもこんなところに居るはずがないと思つてな．．．」

こいつは水の大陸から来たのか？と思つてミシルを見てみたが、

「．．．．．」

ミシルは何も言わなかった。

「ま、まあそれはどちらでもいいじゃないですか？そんなことより

も時間が惜しいので早く島へ行きましょう!」

アズトが僅かに慌てたように言った。確かに早くしないと時間もつたないな。夜になったら調査どころじゃないし。

皆が顔を見合せ頷き、

ガルディアが、

「お前ら島へ行くぞっ!!この船に付いてこいっ!!!!」

自分の船へ叫んだ。

~~~~~

あのガルディアという男、そう言えば何年か前に見たことがあるな。レヴィアスのウォルス担当の行商人のお供か何かだったか。先ほど黙っていたのは別に素性を知られたくないとかじゃなく、単に我が身に起こったことを説明できなかつただけだ。いや、できなかつたというよりむしろ説明しても信じないだろうと思つたからだ。特に不都合はない。

それにしても神獣か・・・あの少女もその類のものだったのかもしれない・・・

ミシエールはそこまで考え他の者と一緒に上陸の為の準備を始めた。

~~~~~

そして、

俺達は漸く鬼ヶ島へ上陸した。総勢20人。

ガルディアの船には19人乗っていた。その内何故か未だに立てないやつが5人その看病で1人もう2人は船の管理、整備のために残

した。つまり上陸したのはガルディアの船からは11人（銃はとくに返している）、俺達は9人だ。
話してみても俺達を殺すよりは（無理だろうが）協力したほうが遥かに効率的だと考えたのだろう。皆協力には納得していた（俺のほうを見て若干怯えていたが）

そして、調査の効率を上げる為に班分けをした。

もし戦いになった際に強さや連携、親しさのバランスも考えた結果、

1班

俺、ネク、アズト、ミシルガルディア（この期に及んでないと思うが万が一の裏切りに備えて俺と一緒にした）

2班

リシナ、アリナ、ユリナ、ガルディアの仲間二人

3班

レンジ、リクオ、ガルディアの仲間三人

4班

ガルディアの仲間五人（1人は副団長とか言っていた）

以上の五人ずつ4つの班に分けて、東西南北へそれぞれ進むことにした。

再会は船があるここで3日後の予定。もしそれまでもどれそうにない場合は合図を送る（火薬を利用した技術で狼煙という物をガルディアからもらった）ことにした。

さあ、行くか！

鬼が出るか神獣が出るか？楽しみでしようがない。

探索者20人は4方向へそれぞれ歩き出した。

第12話 守護者

~~~~~

己の領土内に侵入したモノを感知したソレは、数百年の間何回か繰り返した作業を行うため、侵入したモノの方角へ移動を開始した。金属の身体を持つソレは錆びることなく、壊れることなく、今から己のやることに疑問を持つこともなく、いつものように己に与えられた唯一無二の義務を果たそうとするだけだった。

己の義務、すなわち侵入者の排除を・・・

~~~~~

「さ、殺風景というか何という、か・・・行けども行けども岩しかみ見えませんねえ。はあ、はあ。ほんとにこの島には何か住んでいるので、しょうか、ふう、ふう。歩くのが、け、結構きつく、なつて、きましたよ。ふう、ふう」

アズトが息を切れ切れにさせながら横から言ってきた。出発してから小一時間ぐらいいは経ったとは思うが、まだ大して進んではないぞ。でこぼこした岩山を登ったり降りたりしてるだけでそんなに息切れしなくても。

ただ、歩くだけで暇なんで

「そうだな、ここまで進んで分かったことと言えば、このやたらと続く岩山には生き物が居ないっていうことと、アズトが意外におっさんだったってことぐらいか・・・」

真面目な顔で軽く言ってみると、

「わ、私の体力がないのはべ、別に歳のせいじゃありません！いや、商売で、それなりに色々な僻地へ、行ったりするんでむしろ体力はあるほうです！そ、そもそも私はまだ29です！」

と、やたらと興奮していた。おっさんは禁句なのか。

「まあまあ、落ち着いてアズトさん。どうせこいつのことだから暇潰しにおちよくっただけだと思っわよ。だから、あんまり気にせず
に。」

とネクがとりなすように言った。付き合い長いだけあって俺のことがよく分かってるなこいつ。

「むう。それはそれで何か納得が行きませんが・・・」

アズトが唸りぶつぶつ言っていた。

ちなみにガルディアとミシルは何も喋らず黙々と歩いている。

「ま、あたしはこいつの言動に慣れてるからね。多少何か言われても気にしないけど。」

ネクが何故か自慢げにそう言つとアズトが、

「そうですか。やはり夫婦ともなると性格も何を考えてるかもよく分かるものなのですね。」

うんうんと何か一人で納得していた。ん？聞き間違いか？今、

「べ、べ、別にこ、こいつとあたしはぶ、夫婦なんかじゃないわよ

っ！か、勘違いしないでよねっ！ねっ？トウヤツ？」

そう、やっぱり夫婦って言ったよな。そんなバカな。それにしてもネクもそんなに顔を真っ赤にして怒らなくてもいいんじゃないか。よっぽど夫婦と言われたのが気に入らなかつたんだろうな。よし、

「そうだぞ、アズト。どう見たら俺達が夫婦に見えるんだ。俺達はただの幼馴染みだ。」

フォローしとかないとな。

「・・・そうよ、アズトさん。あたし達はただの幼馴染みよ・・・」

何故か頂垂れながらネクがそう言った。

と、ガルディアが

「一つ気になったんだが、君たちは見た目に反して結構年齢が上なのか？」

聞いてきたので、俺が、

「見た目に反してっていうのは気になるが・・・俺は15歳だ。ネクも。」

言うとガルディアが、驚いたように

「そ、そうか。やはりそのぐらいか。アズト氏が夫婦と勘違いするからってつきり20歳前後ぐらいかと。」

「ん、ということとはレヴィアスではそのあたりの年齢にならないと

結婚できないのか？」

聞いてみると、

「ああ、正確には18歳からだかな。」

「なるほどな。ちなみに火の大陸では15歳からだ。そのへんの決まりごととか、文化の違いも興味深いな。」

そうやって俺達は互いの文化の色々な違いなど様々な話をしながら岩山を進んでいった。

そうこうするうちに漸く岩山の切れ目が見え、岩山を降りた先にはやたらと広い平原に辿り着いた。平原の向こう側に森らしきものが見える。

「やっと岩山がおわりましたね！」

アズトが本当に嬉しそうに言った。

「確かにやたら長かったな。まるで・・・」

ガルディアが何やら考えこんでいる。気になった俺は

「ん？どうしたんだ、ガルディア？何か気になることでも？」

「いやな、岩山がいくらなんでも長すぎたと思ってな。まるで、外部からの侵入を防ぐような・・・要塞みたいな島の構造だと思ってな。」

「ああ、なるほどな。言われてみれば確かに。あの岩山なら馬車は確実に使えないし、外から狙撃っていうのも難しそうだな。」

俺が同意すると、アズトが

「いよいよこの島に何か住んでいる可能性が少なくなってきましたね・・・この島から他の場所に移動するのに手間がかかりすぎますからね。」

若干落ち込んだように言う。

「まあ、まだあの森の奥とかに誰かいるかもしれないから諦めるには早いんじゃないか？光ったと思われる場所も見つかってないしな。」

少し可哀想になって俺は言った。アズトにしたらこのまま何も見つからずに手ぶらで帰ったら大損害だろうからな。まあ、まだ日にちもあるし、とガルディアが

「おそらく大丈夫だとは思うが。祈祷師が指し示した場所の信憑性は高い。確実にこの島に何かはある。生き物もないような場所を指し示すというのは考えられない。」

今まで一切生き物を見ていないというのは確かに気になるが・・・

「まあ、諦めるのは島内を隈無く探して何も無いと分かってからでいいんじゃないか？今はとにかく先にすすむ」

そこまで言ったところで、俺は何かとても嫌な雰囲気を感じた。ので平原の半ばあたりを見てみると、いつの間にか見たこともない、銀色の物体が立っていた。それを見た瞬間ざわっ、と背筋が粟立つような感覚を覚えたので、

「みんなっ！伏せろっ！」
俺は他のやつへ叫んだ。

~~~~~

ソレは森の中から平原を挟んだ向こう側の様子を見ていた。岩山に何者かが入った途端感知可能な己のセンサーが感知したとおり、岩山を越えて侵入者が平原まで辿り着いていた。

数は五体。平原の距離は凡そ700m程度。己の侵入者排除機能の射程距離は500mはある。

常ならば平原を半ばまで進んで待ち構えておき侵入者が岩山を降りると同時に排除機能を使用する。だが今回は侵入者を感知してからここに辿り着くまでがいつもより遅いのか侵入者を視認したときは己はまだ森の中だった。

何かいつもと違う点があるか？一瞬そういう考えが己の回路にうかんだが、すぐにそれを打ち消し、自動で目標つまり侵入者が射程内にはいるように音もたてずに移動を開始した。

そして平原も半ばまで進んだソレは侵入者へ向けて排除機能を作動させた。

~~~~~

俺の焦った声に何かを感じ取ったのか皆が一斉にその場に伏せた。と同時にその銀色の物体の銅あたりから青く光り輝くものが照射された。先ほどまで俺たちが立っていた高さの場所に。

伏せたおかげでその青い光は誰にも当たらなかつたが、俺たちの後ろに立つ岩山に当たり岩の表面が抉れていた。

「い、今のはいったい？」

「伏せなかつたら明らかに致命傷を負っていたぞ。」

アズトとガルディアが伏せながら話しているのを尻目に俺は銀色の物体へ向かって駆け出した。

距離がだいたい300〜400mか。10秒ちょいぐらいはかかる。

~~~~~

ソレは最初、己の認識機能に異常があるのかと思考した。かつて己の侵入者排除機能「イレイザー」を使用して斃れなかった侵入者などただの1体も存在しなかった。だが今、イレイザーを使用する直前に侵入者の5体はまるでイレイザーが当たる位置を知っていたかのように地に伏せかわした。それどころかその内の1体は凄まじい速さで此方へ近づいてくる。

己の義務を果たすため、ソレは再度イレイザーを放った。その近づいてくる1体へ向けて。

~~~~~

丸太を2つ立てて、縦に繋ぎ（太さは丸太よりは一回り太いぐらい）それより細い棒を人であろうところの手や足の位置に生やしたような感じの形の（長さは丸太1mずつぐらい手足の位置にある棒は70〜80？）銀色の物体が此方へ向けて先ほどのように青い光を照射しようとしている。

一気に走って距離は凡そ10mぐらいまで詰めたが走りながらじゃ回避が間に合いそうにないな、これは。

思った瞬間、光が再度照射された。

~~~~~

煙が巻き上がり視認が不可能だが、この至近距離からのイレイザーなら確実に捉えた、と判断しさらに他の4体を排除するためにソレ

は岩山のほうへ進んだ。

否、進もうとした。

だが、

近づいてきていた1体が先ほどと変わらぬ姿でそこに立っていた。そして己がその姿を視認した瞬間、その1体が一気に己の頭上まで跳んで近づくと同時にそれまで腰に差していた金属を振り下ろした。その瞬間ソレは思考する機能を失った。

~~~~~

オーラの使い方には大別して2つある。

1つは自らの体内から練り上げたオーラを使い、身体の筋肉や神経、手持ちの武器防具を強化し攻撃力や防御力、速さ等、威力を底上げする方法（体気術と呼ばれている）

もう1つは、自らの体内から練り上げたオーラと大気中に浮遊している精気（プラーナと言われるもの）を混ぜ合わせ、自らのオーラのみよりも強大な威力を発揮できる方法がある（大気術と呼ばれている）

俺は銀色の光の照射が此方へ当たる直前に大気中の精気と自らのオーラを混ぜ合わせた大気術を使い身体の防御力を大幅に上げたため、光の直撃を受けても特にダメージはなかった。

さすがに自分のオーラだけで受けてたら立ってられなかったかもな。それにしても・・・

「それは一体何なんでしょうね？見たところ大きな金属の塊にしか見えませんが・・・」

と、いきなり攻撃してきた銀色を倒した後、安全を確認して後ろに居た他のやつを呼び寄せ、考え事をしながら来るのを待っていた俺に追いついたアズトが尋ねてきた。

「ああ。俺も遠目には変わった生き物が居るぐらいにしか思っけなかったが、近くで見ると・・・何だこれ？真つ2つにしたが、血らしきもの出てないし。ガルディア、これが何なのか分からないか？」

俺は銀色を指しながら、同じように合流してきたガルディアに尋ねてみた。

「いや、レヴィアスでもこのようなものは見たことがない。ただ・・・」

「ただ、なんだ？」

「金属が動く、というのは見たことがある。」

「ふーん。これとは形が違うのか？」

「そうだ。まだ実用化の目処は立っていないが、自走式貨物車と呼ばれるものが現在研究されている」

「自走式貨物車？それを木じゃなくて金属で作るのか？」

「そうだ。木よりも頑丈で腐りにくいからな。ただ自走式ならでは馬力がある大きな動力装置を使う必要上、どうしても本体を巨大にしなくては作れない。そんな巨大な貨物車を何処にどうやって移動させるかというのが現在の課題だ。それにそこまで詳しいことは分からないが、仮に作れたとしても前後に移動する、という機構を組み込むぐらいが限界だろうと思う。だから・・・」

「仮にこれが金属だとしたら、どういう仕組みでこの大きさで自走し、しかも攻撃までできるかというのはまったく分からない・・・」

「そういうことだ。それにしても、トウヤ。」

探索者というのはやはり好奇心旺盛なのか、俺が真つ2つにした箇所を色々な角度から眺めたり触ったりしながら話していたガルデアが不意に俺を振り返って言った。

「なんだ。」

「やはりトウヤの強さはめちゃうやだな。この金属は鉄ではないにしるそれに近い固さだぞ。それをこんな風に剣で綺麗に真つ2つにするとは・・・」

「そうか？そのぐらいの固さならネクも出来るぞ？なあ、ネク？」

俺の横にいつの間にか立っていたネクへ話を振ってみると、

「えっ？あ、ああ、うん。鉄ぐらいの固さだったら斬れるわよ。」

「だよな。通常でも鉄ぐらいは斬れるよな。」

この場合の通常とはオーラやプラーナを使わない状態のことを指す。すると、ガルディアが

「なんとというか・・・火の大陸ではそれぐらいの剣術の腕は当たり前なのか？レヴィアスでいうと、騎士並みの実力だぞ。いや、騎士でも何人が斬鉄をできるか・・・」

鉄を斬ることを斬鉄っていうのか。そのままだな。

一応補足しとくか。

「いや、火の大陸全部じゃないと思うぞ。俺たちの出身の村では剣術が盛んだったってだけだ。」

「いや、それにしてもその若さで・・・凄まじい腕だな・・・」

何かガルディアが落ち込んでいる。まあ実際俺の腕を目の当たりにしたからな。

「むっ？これは？」

と、ガルディアよりも念入りに銀色を調べていたアズトが何かを発見したような声を出した。

「どうした、アズト？何か見つかったのか？」

聞いてみると、

「ええ。全身銀色の金属なのにここだけ色が違うのでよく見ていたんですよ。」

と言って丸太の繋ぎめあたり、人でいうと丁度臍のあたりになるのか。

よく見てみると、そこには

「宝石？」

赤く輝く真つ2つになった宝石らしきものが埋め込まれていた。

~~~~~

????

「守護者がやられただっ！」

「いえ、やられたかどうかは分かりません。正確には反応が途絶えたのです。」「反応？精石の反応か？」「はい。通常ならば精石の反応が途絶えるのは考えられない事態です。私もこの250年間の話を色々知っておりますがそのようなことは初めて聞きました。」

「そうだな。確かに俺も初めて聞いた、反応が途絶えるなどと。」

「ですから考えられるのは、精石自体の効力が長年の酷使により切れたか、侵入者がこの島に入り守護者を倒し精石を壊した、という2つの可能性です。」

「前者は考えづらいな。口伝に因れば精石はプレーナを取り込み半永久的に使用可能らしいからな。だとすると、やはり……」

「侵入者ということになります。」

「しかしっ！あの守護者だぞ。そう簡単にやられるか？」

「分かりません。ただ、もし守護者すら倒せるような侵入者がすでに大平原あたりまで迫っていると……」

「ここまで来るのは、あと1日つてところか。あいつらはどうした？」

「あの2人はいつものように島内を散策してますよ。」

「またか・・・いつ帰ってくるかは、分からないよな・・・？」

「見当もつきません」

「はぁーーーーっ」

「溜め息は女性が逃げますよ。」

「そこは女性が、じゃなくせて幸せが、にする配慮をしろっ！」

「それはともかくこの守りは手薄ですな」

「ああ。侵入者の目的は分からんが、守りを固めんな・・・」

「目的はほぼ間違いなくあれだと思えますが。」

「それは言うなっ！もしかすると違うかもしれないだろうが」

「・・・」

「分かった。あれが目的だと認めよう。だからその目をやめろっ！」

「あれだけは何としてでも護らなくてはなりませんからね。下らない現実逃避はやめてください。」

「お前は本当に厳しいな。ああ、分かっている。あれだけは何としてでも護るさ。」

「勿論私も護ります」

そこまで話すと2人は自分達が今居る神殿、その中央の祭壇で体長50？程度の光輝く獣がすやすや眠っているのを眺めた。

}}}

### 第13話 柱 (前書き)

最近はどうも時間が取れずに投稿が遅くなりがちです。

### 第13話 柱

クロカゲ家は元々護衛を生業としている。

アリナとユリナの父親は2人の娘が物心ついた時から同じように護衛の為の術を教えているが、双子とは言え生来持つて生まれたものが違うのか、成長するに従いその2人の性格と共に能力、性質の違いがはっきりと表れ出した。例えばアリナの場合は運動神経が良く格闘も出来るがユリナはあまり良くなくあまり戦いには向いていない。アリナにはオーラの流れがよく見えないが、ユリナは自分のものも良く見える。などとわかりやすいところで例が挙げられる。鍛え方としては、父親は初めの頃こそ同じように教えてはいたもののお互いが出す結果に余りにも偏りがあるため、やり方を変えてそれぞれの特長を伸ばす方針にした。その長所つまり本人達にとっては得意なことのみをやった。その結果、12歳になる頃には、アリナは格闘や何種類かの武器の使い方を、ユリナはオーラを利用するための基本的な下地が出来ていた。とは言えまだまだ、発展途上にある2人をさらに上達させるため、甘えを無くすため、あわよくばお互いに足りないものを身に付けさせるため、知り合いの家へ2人も預けることにした。

預けるには理由があつて、まずそこが心安い知り合いの家だということ、そしてその知り合いは退魔術という戦いや魔物退治に大きな対抗手段を持つて生業としているからである。

リシナ・トゴウが預けられた2人の少女を現役退魔師である父親から面倒を見るように言いつけられて、自らの身に付けている術を教えたのにはそういう経緯があつた。

~~~~~

「ーしよう。ししよう。」

初めて二人の姉妹が家に弟子入りしに来た時のことを振り返りながら歩いてみると、後ろから声をかけられた。

「なにかしら？」

リシナはアリナのほうへ向き直り尋ねた。

「うん。さつきからユリナが結構きつそうで・・・出発してからもうかれこれ2時間は歩きつぱなしじゃない？もうそろそろ・・・」

アリナが遠慮がちにユリナのほうを見ながら言う。

「そういえばそうね、ごめんなさい気づかなくて。なら、そろそろ休憩にしましようか？お二方もそれでよろしでしょうか？」

アリナと少し顔色の悪いユリナへ声をかけ、さらに後ろから歩いてくるレヴィアス団の男性二人にも尋ねてみた。

「我々は、貴女のご判断にお任せします」

と一人が言うので、休憩を取ることにした。

「それにしても、何も無い場所だね。ほんとにこの島に何かあるのかな？」

アリナが周りを見渡しながら言った。

「そうね。上陸する前に見た感じだと島の両端が見えないぐらい広かったから、相当な広さだと思うわ。4班に手分けして探すというのは正しい判断でしょう。アリナちゃんと言うように何も無いかもしれないわね。それに3日後には入口まで戻らないといけないから、あまり奥深くまでも進めないわね。」

私がそう言うと、

「・・・でも、生き物の気配もしない」

多少体力が戻ったのかユリナが言った。

「そうね。それは私も思ったわ。いくらこんな道でも虫とか小動物が居てもおかしくはないわよね・・・」

私は、歩いてきた荒れ果てた道を見ながらそう言った。無人というのはともかく生き物一体いないというのは不自然、というより変だ。

まるで、

「・・・まるで結界が張ってあるみたい」

ユリナがそう言った。やっぱりそう思うわよね。そもそもトゴウ家の退魔術というのは、魔物を退治するよりもどちらかといえば不可視の物理結界を張り魔物を押しとどめたり封印したりするほうに本領を発揮する。なので、結界術や封印術の修行を重点的にすることになるため、自分でできるようにするのはもちろんのこと、他者が行った術も違和感を感じたりと結界が張ってあるかどうかが感覚的に分かるようになる。ただ、術者が己以外を排除する種類の結界を張っているなら、その場所は違和感どころではなく、前に進もうと思っても進めない程の圧力がある。ここまで何の違和感もなしに進めたから結界が張ってあるというのは考え難いけど、もしかしたら・・・

「・・・私たちが島に入ってから結界を張ったのかも・・・出られなくするため・・・」

「私もそれは考えたわ。でもそれだと、どうやって私たちが島に入った時が分かったのかしら」

私が、ユリナの考えに疑問を持つと、

「あのおう、我々の砲撃音のせいではないでしょうか・・・」

と、現在私たちの班員である男性の1人がおずおずと言いだした。

ああ、そういえば・・・

「そうだよー。おじさんたちが有無を言わず攻撃してきたもんね」

若干からかいの口調でアリナが答えた。

「ええまあ、あれはなんと云いますか・・・」

申し訳なさそうに男性が答える。

「そうですね。あの時結構大きな音がしましたね。いくらこの島が広いと言っても音が響いたかもしれませんね。ただ、あれはもう気になさらずとも良いのではないですか？結果的に皆無傷でしたし、やむを得ない事情がおりになったでしょうから。」

私が悪気なく微笑みながらそう言つと、

「はあ、そう言ってもらえると助かります。」
と男性が言った。

「結局、おじさんたちのほうが被害が大きかったしねー。」
言わなくてもいいことをアリナが言った。

「ええ、貴女とそしてあの少年に完膚無きまでにやられました・・・」

男性が私を見ながら言った。いや、あの少年はともかく私はただ砲弾を防いだだけなのです・・・

「ま、まあ終わったことは気にせずにつ」

アリナが慌てたように言った。

「・・・でもあの子強かった・・・」

ユリナが思いだしたように言った。

「確かにそうだよねー。あれで私たちと1つしか変わらないっていうんだから・・・」

若干へこんだようにアリナが言う。そこで私は、

「アリナちゃん、ユリナちゃん。人は人、自分は自分です。あの少年は確かに強いですが、貴女たちは気にせず自分の腕を磨いてください。もちろん私もまだ修行不足の身ですが。」

とりなすように二人へ言った。

「そうか、そうだよね師匠。修行頑張る！」

「・・・私も頑張る・・・」

と、男性が

「あれで修行不足と言われたら・・・」

「戦いが本業でないとはいえ我々は・・・」

二人して頂垂れていた。

「まあねー。でもそれはしょうがないんじゃないかな。師匠の強さは化け物じみてるからね。だからこんなに美人なのに普通の男が怖がって恋人の一人もいないんだよねー。」

と、アリナが言ってくれやがったので私は

「アリナちゃん？あとでお話があるのだけどいいかしら？」

アリナへ微笑みながら言った。

「ヒイツ。ご、ご、ごめんなさい師匠。」

何故かアリナが私の方を見て怯えていた。

「まあ、ユリナちゃんも元気になったことだしそろそろ休憩を終え
ましようか？」

「ハイツ！」「ハイツ！」

私がそう言うと全員が一斉に返事をした。何故？

立ち上がり、また荒れ果てた道を進もうとしたその時、突風が吹いた。

~~~~~

リシナ達から約1？離れた場所に1人の男が立っており、その男は目を細めながらリシナ達のほうを見ていた。

「大きな音がするんでわざわざここまで様子を見にきてみれば、1、  
2、・・・5人か。久しぶりの客だ。精々もてなしてやるとするか。」

そう言って男はリシナ達のほうへ向けて飛ぶような凄まじい早さで飛んだ。

~~~~~

一瞬巻き起こった突風でよろけて目を瞑っていた私が目を開けたらいきなり目の前に見知らぬ男が立っていた。

赤い髪の方が大きく屈強そうなその男は私たち全員を見ると、

「ようこそ火喰い島へ、侵入者よ。歓迎するぞ。」

と言った。この口ぶりだとこの住民でしょうね。

ただ、そんなことよりも・・・。「ん？どうした侵入者どもよ。珍しいものを見るような顔をして？」

その赤い髪の男はそう言った。それはそうだろう。つい先ほどまで心配すら感じなかったし、その男の額には・・・

「ああ、ひょっとしてこの角が珍しいのか？」

と、男は自らの額にある角らしきものを指してそう言った。

「亜人・・・？」

アリナがそう言うと、

「はっ！人間ってのはどいつもこいつも同じ反応をするな。確かに俺たちは貴様らからすれば亜人と呼ばれる存在だろうよ。いや、何十年前の侵入者は鬼とか呼んでいたっけなあ。」

男は私たちを蔑むように見ながらそう言った。

「何十年前か前？ということやはり以前にも誰がこの島、火喰い島と言ったかしら、に来ていたと言うわけね・・・」

私がそう言うと、男は

「ああ、来てたぜ。もっとも、骨すら残っちゃいないがな。」

と言った。

その言葉に全員が警戒し、身構えた。さらに、

「まあ、その時の奴等の目的が亜人を捕まえて売り飛ばすとかいうふざけたものだったからな。何の躊躇いもなく消してやった。どうせ貴様らもそんなところだろう?。」

男が言うと、レヴィアスの男性の1人が、

「違っつ！我々の目的は神獣だっ！この島に神獣の居る可能性が高いのでやって来たただけだっ！」

慌てたようにそう言った。すると、

「なんだとっ？成程な。どうやってアレの存在を嗅ぎ付けたかは知らんが尚更生かして帰すわけにはいかなかったな。」

そう言うと、男は両手を前に突き出した。

「アレ?ということとは、この島には神獣が居るん」

レヴィアスの男性がそこまで言ったところで、数十m後ろに吹き飛んだ。

「えっ・・・?。」

それを見た全員が驚きで固まっている。

「ふん、脆弱だな。」

男がそう言つと、アリナが

「な、何今の？」

と言つた。男は、合点したように

「ああ。そついやそつだな。人間たちの中では廃れたらしいが今の魔法つてやつだ。俺は親切だからな。自分がどういふ風に死ぬのかぐらひは教えといてやるよ」

私たちへ説明した。今、有無を言わず吹っ飛ばしたけど・・・

「魔法？廃れた？その言い方だと人間でも以前は魔法を使つてたみたいね？」

私がそう言つと、

「ああ、そつだ。今もその名残があるじゃないか。人間の村に張つてある結界とかな。」

「結界？あれを魔法というの？昔に妖術師と呼ばれる人たちが使つた術を？」

「呼び方は知らん。だが250年ぐらい前に来た奴等は確かに強力な魔法を使つていたぞ。」

「250年前？その時に誰か来ていたの？それに貴方はいつた何歳なの？」

「俺はまだ精々300歳ぐらいだが。誰が来ていたかは貴様らのほうがよく知つてるんじゃないか？」

「っ！スサノオ。ということは・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいい。貴様らは消すだけだからな。」

「待つて、まだ聞きたいことが。」

「お喋りはここまでだ。どうせ貴様らはここで消える。あと、最後に教えてやろう。俺の名はロナン・サタク。火喰い島4柱ちゅうが1人口ナン・サタクだ。この名を頭に刻み込んで・・・死ねっ！」

男が再び両手を前に突き出した。

第14話 風

火喰い島（大陸の者や人間には鬼ヶ島と呼ばれているらしい）は、その全長が数十？ありその道の険しさと合わせて島内を全て歩こうと思えば数日はかかる。並みの人間や動物ならば・・・自分は生まれて物心ついた時からずっとこの島に居り、他の場所がどのような様子なのか知らないということもあるが、広いこの島から出る必要も外との交流も必要もないと考えている。ただ此方がそう思っているても外からは数十年に何回かは侵入者がやってくる主に人間だ。どういう理由でこの島へ来るのか、例えばこの島を自らの領地にしたのか、亜人と呼ばれる我々を捕まえたのかは不明だが友好的な者は1人として居ない。それに外から来る人間はどいつもこいつも皆弱い。唯一の例外を除いてはだが。

そんな今までの経験から、ロナン・サタクは侵入者を見つけたとき、いつもするようにすぐさま排除しようと思った。暇潰しに多少は話してみたが、やはり侵入者の目的が録なものではないということもあり特に躊躇いもなかった。あいつらには後で結果の報告だけしとけばいいと、島の中央部に居る者たちを思い浮かべて、自らの風魔法を放つて1人を吹き飛ばした。死んだかどうか分からないがおそらく致命傷だろう。続いて残った奴等へもまとめて同じ魔法を放った。

~~~~目の前のロナンと名乗った男が両手を前にかざしたとき、私は無意識に物理障壁を展開していた。見えない攻撃・・・先ほど男

性が飛ばされたことを考えればおそらく物理的な圧力があつたのだとは推察できたので、選択としては間違いないと思う。

ゴオオオー

風が吹くような音が耳に響く。

魔法？と言っていたが、いったい？この障壁にかかる圧力がその魔法というものなのか。するとロナンが私と私の物理障壁を見ながら「ほう。疾風を防ぐとはな・・・貴様も魔法使いか？」

「疾風？それが魔法の名前ということなの？魔法を使った覚えはないのだけれど」

私はその物理的な圧力を障壁で抑えながらそう言った。が、

「そつだ。だがっ！」

と言うとロナンの両腕がさらに力を入れたのか膨れ上がり圧力が明らかに強くなった。

「くっ、押しきられるっ！」

すると横からユリナが、

「・・・手伝う」

と、同じ物理障壁を展開させ此方の方が優勢になる。

「もう1人だどっ？ばかな？貴様らは何者だ？」

ロナンが驚いて言う。

「何者と言われてもね。ただ退魔術を使う退魔師っただけよ」

今度はアリナがそう言いながら弓を構えた。

「退魔師だと？聞いたこともないぞそんな奴等は。だが俺の魔法を防いでいるのは紛れもない事実。魔法の一種では、グハア！」

「へへ。どう？退魔術式弓術の威力は」

アリナの障壁の此方側から放った矢がロナンの右太もも当たりに突き刺さっている。けど……

実際、退魔術式弓術の破壊力は岩も砕くぐらいある。それは、プラーナと呼ばれる大気中の精気を弓矢に取り入れ弓矢自体の強化、矢の速度を上げるのに利用される。アリナは未だ結界を張ったり障壁を展開させることは出来ないがその代わり武器等の身の回りの物にプラーナを纏わせたり格闘の際に自らの身体の強化をすることができる。それにしても2人分の結界を貫いた上にさらにあの風の中を通すなんて、そんなに威力があったのかしら。

「さ、3人だと。き、貴様ら全員魔法使いかつ！全員？侵入者は五匹居たはずだっ！」

先ほどまでの余裕が消えたロナンが焦って周りを見回すと、

パァン

音がした。

「グアアッ！」



ロナンが急に右腕を押さえて痛みがりだした。見るといつの間にかレヴィアスの男性がロナンの右側5mぐらいのところにとっついており銃を構えていた。

「グツ。何だこれは。貴様がやったのか？今何をした？」

ロナンが腕を押さえて男性のほうを睨みながらそう言った。男性は、

「どうやら亜人とはいえ銃は通じるようだな。今度は決めさせてもらおう！」

そう言っつて再度引き金を引いた。だが・・・

「ハアッ！」

銃弾はロナンの手前で一瞬止まり地面に落ちた。

「なっ！くそっ！」

それを見て焦った男性は再度引き金を引いたがまたしてもロナンに当たらず地面に落ちた。

「俺に鎧風がいふうを使わせるとはな・・・だがここまでっ？グアッ!？」

再度、アリナが矢を放ちロナンの左肩辺りを掠めた。

「あれ？外したっ？」

アリナがそう言っつとロナンが、

「鎧風を貫くだどっ？ いったい何なんだ貴様らっ！？」

何故か怯えたように私たちのほうを見た。

「だから、あのオジサンはともかく私たちは退魔師って言ってるじゃない」

アリナが若干呆れたように言う。

「くっ。退魔師かなんだか知らんが此方の分が悪い。追い風っ！」

と、ロナンが叫ぶと、どこからともなく突風が吹いた。一瞬目が開けられず、

アリナが

「きゃっ！ あ、あれ？」

と言ったので、目を開けてみると、そこには

「あいつは何処に？」

男性が言うようにロナンの姿がどこにも無かった。

成る程。私は合点したように、男性へ

「おそろくですが、私たちに倒されそうになったため魔法とやらを使ってこの場所から逃げたのでしょうか。」

「ということとは我々はあの亜人を退けたのですねっ！」

助かったと言いながら男性は安堵していた。そして

「そうだった！あいつを」

と言いながら飛ばされた男性のほうへ駆け寄っていった。私はそれを見ながら、

「大丈夫かしら？」

と呟き、

「師匠が居るから何とかなるでしょ」

「・・・師匠が居るから大丈夫」

アリナとユリナがそんなことを言った。まあ確かに退魔術には怪我をしたときの為に治癒をする技もあるのだからそれとおりなんだけど・・・それにしても、

「アリナちゃん？」

「ん？何、師匠？」

「貴女はいつあんなに腕を上げたの？矢で障壁を突破する破壊力なんて以前はなかったでしょう？」

「うーん、私もまさかあれほど威力があるとは思ってなかったんだよね。ただ、矢にプラーナを溜めるとき何時もより遥かに精気が集まっっていくのは感じたよ？」

「そう。何となく分かったような気がするわ。」

そう言われてみれば私もユリナちゃんも何時もより大分障壁の展開

が早かった。だとすればおそらく、

「えっ？どういうこと？」

「多分だけどね。この島には大陸よりも遥かに濃いプラーナが大气に漂っているの。だから私たちみたいなプラーナを利用する退魔師は何時もより強大な力を発揮できるというわけ」

そう言うと、2人は納得したような顔をしていた。

と、もう1人の様子を見に行った男性が、

「大丈夫ですっ！こいつは所々怪我をしていますが気絶しているだけですっ！」

向こうのほうから此方へ大声で叫んだ。

「よかった。じゃあ行きましょうか。」

私は2人へ促すと男性が居るほうへ歩いていった。

~~~~~「くそっ！人間風情がっ！」

ロナンは風の魔法を使って飛んで移動しながら悪態をついていた、時速約200kmぐらいで。

今まで侵入者、それも人間にここまでの手傷を負わされたことなどなかったから急いであの場所から離れた。だが・・・

「いったい退魔師とはなんだっ？何故人間が魔法じみたものを使える？」

自問しても、知らないことが分かるはずもない。そもそも脆弱で戦う術もないものが人間だ。我々のように亜人と蔑まれながらも、人間ではもちえない能力もないのに、あそこまで強いのが信じられない。

「どちらにせよ一度戻って報告する必要があるな……」

そう考えるとロナンは憂鬱になった。傷を治す必要もあり侵入者の目的も話さねばなるまいが……この傷を見てあいつらは小言を言うだろうな。独断で行動するとか油断したバカ者とか。ただ、あいつらは間違いなく強い。下手をすればあいつよりも……今もおそらく自分のように島の何処かに独断で彷徨っている仲間の顔を思い浮かべ、首を振った。まさかな、あいつは我々の種族の中でも飛び抜けて魔力が高い。それはないか。

そこまで考えたところで島の中央部が見えてきた。

~~~~~

その男は魔力を感じる能力を持っていた。だから自分の仲間の1人が自分の居るここから島の反対側辺りで、おそらく侵入者であろう者たちと交戦していたのは分かっていた。だが、

「……おかしいな。ロナンのやつは何故帰ったんだ？」

思わず呟いていた。何故なら侵入者らしき3つの魔力がそのままその場所に残っているのに、好戦的な仲間であるロナンがそれを残して帰るなど何時もなら考えられないからだ。

「逃げ帰ったか？」

多分それしか考えられない。そんなにあの侵入者は強いのか。それに・・・

「もう1つのほうも気になるな」

先ほどロナンが居たのとは別の場所で一瞬だが凄まじい魔力を感じた気がしたのだが。まあ、あの辺りは守護者の範囲内なので、仮に侵入者が居ても守護者に排除されたとは思って・・・  
男はそこまで考えると、前方に気配を感じた。

~~~~~

「レンジさん。漸くそれっぽいものがありましたよっ！」

リクオが前方を見て、弾んだような声を出したので見てみると、そこには木で出来た巨大な門があった。

「ほお。でかいな。」

「いや、感想がそれだけですか？レンジさん。あれは明らかに建造物ですよ。つまりこの島には何者かが確実に居るということですよっ！」

リクオがやたら興奮していた。まあ、島の入り口から四時間ぐらい歩きっぱなしだったからな。何もなさすぎて心がおれそうだったんだろう。分からんではないが、

「まあ、落ち着けリクオ。まだ住民が見つかったわけでもないだろう、なあ？」

おれは後ろについて来ているレヴィアスの3人へ言った。だが、

「おお」

「これは・・・」

「やはり神獣はこの島に・・・」

3人はリクオと同じように前方の門を見てそれぞれ感嘆の声を漏らしていた。

俺は苦笑して、

「お前らなあ。仮にも探索団だろ？ことういのは大して珍しくもないのじゃないか？」

と言つと、1人が

「そうは言いますがレンジ殿。我々はこういった未知なるものを発見するという行為のためにこの仕事をしているのですよ。それに、門があるということはこの先にこの島の住民の集落がある筈です。ここまでくれば一気に神獣に近づいたと言っても過言ではありませんん。」

リクオと同じく興奮した様子で言った。

ちなみに俺たちは歩きながら話しているので先ほどは遠くに見えた門まであと数mというところまでできていた。

「まあ、そうだけだな。でも結局神獣が見つからなければ、それも」

その時その巨大な門の陰から1人の男がのそりと出てきた。そして、

「ようこそ、侵入者の諸君」

と言った。その姿を見て

「な、何者だっ！」

とリクオが言う。若干怯えたような声なのはその男の姿によるものだろう。なにせその男は・・・

「ほう。中々度胸があるな、人間よ。以前見た侵入者は私の姿を見ただけで怯えて声もだせなかつたがな」

見た目は、顔こそ赤茶けた髪を立てた火の大陸の者とそこまで違わない造詣だが、体は二mを越える大男で体は筋骨隆々なのに妙に落ち着いた口調で話しかけてくる。・・・何よりその額からは二本の角が生えている。その姿はまるで伝承にある、

「お、鬼かつ!？」

再度リクオがそう言うと

「ふふつ。面白いものだな。侵入者はいつも私の姿を見てそう言う。それが亜人とな」

その男が微笑みながらそう言った。

「違うのか?」

俺がそう言うと、

「まあ、間違っではない。我等は鬼族きぞくと名乗っている。呼び方は好きにすればいい。今後の付き合いをどうするかは今からの展開次第だな。」

「今からの展開次第？どういうことだ？」

「簡単だ。諸君らのこの島に来た目的次第ということだよ。もし、我々と友好を結びに来た、というなら歓迎しよう。だがそうでなかった場合・・・」

「なんだ？」

言い淀んだので俺が聞くと、

「ここで全員死んでもらうことになるな」

と言って此方を鋭い目で睨んできた。

その瞬間リクオをはじめ他の3人も驚愕で固まった。おれは、

「死んでもらう、とは穏やかじゃないな」

「まあ、気にすることはない。例えば今までこの島にやって来た侵入者の目的は大抵我等を捕まえるだとか、この島を自らの陣地にするとか、おろかにも自分の弱さを理解していないようなものばかりだったからな。諸君もそうならば、という話だ」

穏やかな口調で話しながらも此方を睨みプレッシャーをかけてくる。

「いや、俺達の目的は神獣探しだ。そういったことじゃない」

と、俺が言うと男は僅かに目を見開き、

「神獣とはな・・・やはり人間の中にも魔力を感じ取れる者が居る

ようだな。だが、何故神獣を求める？あれは我等にとっては必要だが諸君ら人間にとって不必要なチカラだと思っが」

この男の口ぶりだと神獣が居るのは間違いないな。

「ああ確かに。俺は、というより火の大陸には別に必要ないな。ただの調査だ。だが、」

と後ろの3人を見ながら、

「この水の大陸の奴等にはどうしても必要らしい。というのも・・・」

「

俺は目の前にいる男に、ガルディアから聞いた水の大陸の状況を聞かせてやった。さすがに驚いたようで、

「一晩で国が消滅しただと。そんなことが・・・もしや・・・」

「心当たりがあるのか？」

「あ、ああ。さすがにそんな真似ができる存在は限られている。だが目的が分からん。」

「知っているやつなのか？」

「知っていると言えば知っている。我々からすれば雲の上の存在だ。太古の昔から存在しているお方だ」

「太古の昔？御伽話みたいだな。」

「そうだな。私は精々500年ぐらいしか生きていないがそのお方は少なくとも数万年前から存在しているはずだ。」

「何者だ。そいつは？」

「我等鬼族を創造した、とされているお方だ。」

「創造？それはまるで神様みたいだな・・・」

「ある意味では間違っではない。そのお方は魔神と呼ばれている」

「魔神？」

「そうだ、そして創造主であると同時に我等の始祖だとも言われている」

「つまり、あんたら鬼族の産みの親でしかもご先祖ってことか・・・」

「ああ。だが伝え聞いた話に因ればあのお方は此処より遙か彼方の大陸に居られるはずだ。それにわざわざ国を潰す目的が」

目の前の男がそこまで言ったとき、生暖かい風が吹き周りが見えなくなつた。

そして、

「何のお話をしてたのかしら？私にも聞かせて頂戴」

声のしたほうを見てみると銀色の杖を持ち、黒いローブを着た小柄な少女が立っていた。

第14話「風」(後書き)

ご意見感想等あればお待ちしております。

第15話 少女

~~~~~

鬼族きぞくである自分は生まれつき魔力が高い。それに加えて他の仲間にはない能力、すなわち他者や自分の魔力の内包量を見ただけで分かる、離れていても誰の魔力かも分かるという能力を持っている。その能力を使い仲間同士で誰が一番高い魔力を持っているかを調べてみたら・・・私だった。

勿論、戦いの優劣や立場の序列などは魔力のみで決まるわけではない、が鬼族の中でも最も魔力が高いということを私は誇りに思っている。また、知能も高いと自負している。現在、島の中央で神獣を見守っている4柱の中でも神官という立場としては私より上の奴にも私に指図することはできないため、私は島内で自由に行動している。侵入者の生殺与奪も私の気分次第だ。(もっともロナンの奴も自由に行動しているが)

今日は数十年ぶりに侵入者(おそらく人間のものであろう魔力)の気配を感じ、軽い期待を込めて島の正面入り口から比較的侵入しやすいと思われる、島のとある集落の門の陰で待っていた。すると予想どおりに5人の人間がやってきた。(ただ、島の数か所でも侵入者の魔力は感じるのでどこで待っていても同じ結果だったとは考えられる)

私は別にわざわざ戦う必要のない相手と戦いたがる戦闘狂というわけではないので、久々に出会う人間の侵入者との会話を少し楽しんでいた。

だが、話をするうちにどうもおかしなところがいくつか出てきた。神獣を探しにやってきたと言われたときは人間に扱えるチカラでは

ないが、まあ長い年月が経てばそんなことを考えることもあるだろうなと軽く考えていたが、何故神獣を求めるかその目的そこに至るまでの経緯を聞いたとき私は今まで生きてきた中で一番驚いたのではないかと思う。

何故なら、私は確かに魔力が高いほうではあるし、それによって様々な強力な魔法も使うことができる。しかし、聞いた話の中でウオルス王国という1つの小国をたったの1晩で滅ぼすほどの強さはない。(やろうと思えばおそらく数カ月はかかるだろう) 私にも無理なことなのでこの島に居る仲間の誰でも間違いない無理だとも断言できる。そんなことができるのはせいぜい、失われた魔法、と呼ばれる閻属性の魔法が使える者ぐらいだ。ただ、その閻属性の魔法の使い手というのは私の知る限り1人しか居ない。いや、居なかった。そのお方は現在、といっても300年ぐらい前に聞いた話だが遠くの場合でそう簡単には移動できない状態にあるはずだ。我々の中では創造主、始祖、など敬意を込めて呼ばれ、人間の間では魔神と呼ばれて畏怖されているそのお方であるはずがない。だから、数日前にそのような強大なチカラを持つ存在がここからそう遠くない水の大陸に出現したことが俄かには信じられない。

私が侵入者の人間と話しながらそう考えていると、突然目の前に少女が現れた。

銀色に輝く杖と絶大な魔力を携えて・・・

~~~~~

「ねえ。私にも聞かせて頂戴、その面白そうな話。」

俺が目の中の鬼族の男と話しているとどこからともなく黒いローブを纏った少女が現れ、此方に話しかけてきた。声や口調こそその見

た目通り少女のようだが・・・

「おい、お嬢ちゃん・・・あなたは何者だ・・・いつ、どうやってここに来た」

見た目にはそぐわないその少女から放たれる圧倒的なプレッシャーに俺はその場に倒れそうになりながら尋ねた。

「へえ。貴方は結構強いよね。私を目の前にして気絶すらしないなんて」

少女は微笑んでそう言った。というのも俺以外のリクオやレヴィアスの奴らは少女が現れたときに気絶していたからだ。

「ああ・・・あなたがとんでもなく強い化け物っていうのは何となく分かるぜ・・・あなたも鬼族なのか？」

「化け物とはひどいわね。でもそうね。貴方の言っていることは間違いないわ。私は鬼族といえば鬼族になるわね。」

と言いながら、その少女は被っていたフードを脱いだ。そこには、火の大陸の者特有の黒髪黒眼ではなく金色の髪に碧い眼をした異常に肌の白い小さな顔があった。しかもその額には鬼族のような角が生えていた。

すると先ほどまで話していた鬼族の男が、怯えながらそれでも納得がいかないように、

「バカなっ！私は500年この島に住んでいるし、仲間の存在も全て把握しているが貴女のような方は見たこともないぞっ！」

と言った。どういうことだ？この少女は鬼族ではないのか？
すると少女が、

「ふふふ。それはそうよね。坊やはまだ500歳程度ですもんね。
私がこの島に居たのは少なくとも2000年以上は前なのよ。もっ
とも正確には今の100歳程度の私じゃなくてかつての私という意
味だけねど」

このお嬢ちゃんはいったい何を言っている・・・？

確かに鬼族というのは人間に比べて遥かに長寿らしいが、自分で今
100歳程度と言ったぞ。それなのに2000年以上前にこの島に
居た？意味が全くわからんぞ。

俺が頭を悩ませていると鬼族の男が、

「なっ！？もしや貴女は・・・いや、そんな筈は・・・だが・・・」

何かを言おうとして躊躇っていた。
すると少女が、

「貴方が何を考えているかは大体分かるわ。まあ、この姿ですもの
ね。金髪に碧眼それに幼い。確かにすぐ信じられないのも無理はな
いわ。でも貴方が今考えている通り、私が貴方達鬼族の創造主よ」

！！！！？

「そうね、私は少なくとも数万歳のお婆ちゃんのお筈ですものね。信
じられないというのはよく分かるわ。でもね、闇の魔法には色々と
禁断の術があるの。」

「あ、貴女は本当に創造主様なのですか？」

「そうよ。でも、もっと正確に言うのなら以前の肉体が消滅して闇の大陸に居たこの子の身体に転生したのが私、鬼族の創造者、デユカ・リーナなの。」

「転生……」

「そう。転生。まあ、以前の身体が消滅したのは闇の大陸でちょっとした出来事があったからなのだけれどね」

「伝説のデユカ・リーナさま……た、確かにその魔力を見ればそんな気もしますが……」

俺は、気になるところが多々あったので

「まてっ！ということとは、お嬢ちゃんは魔神の生まれ変わりなのか？？それにこいつが魔力とやらなのか？この凄まじいプレッシャーがっ！？」

「成る程。プレッシャーね。魔力を扱えないモノは意外と分かりやすい言葉に置き換えるものなのね。」

俺が言うとデユカ・リーナと名乗った少女が1人で納得していた。さらに、

「また魔神か。貴方達人間には何時の時代にもそう言われてきたわね。あとは鬼とかね。でもほんとうは……」

寂しそうにそう言い、続けた。

「それで、先ほどの話に戻るのだけれど、私は少ししか聴いていないの。だから坊や、よかつたら何を話してたのか教えてくれないかしら？もしかしたら力になれるかもしれないわよ」

鬼族の男に先ほどの話をせがんだ。何故気にするのかは分からないが。

「ハイッ、分かりました。そ、それと坊やはやめていただけないでしようかつ！」

「ああ、御免なさいね。鬼族は全て自分の子どもぐらいに思ってるから・・・貴方、御名前は？」

「ハイッ。私は火喰い島4柱しゅちが1人、ジン・ガトウと申しますっ」

「4柱？っていうのはよく分からないけれど・・・名前はジン・ガトウね、分かったわ。じゃあ、貴方が現在の守護者になるのかしら？」

「いえ。そういうわけではありません。我等4柱はそれよりももっと大きな役割があります。主に島内の治安を護り、神獣を護る鬼族の最高幹部であり、この島全体を色々な面で治めております。守護者の役割のほうは精気兵ブラーナマジンに任せておりますので侵入者程度ならあれ一体あれば十分でしょう」

「ふうん？それは今何処に置いてあるのかしらね？あれが持っているプラーナを探って見たのだけれど見つからないわ・・・まあ、そのうち分かるでしょう。それよりも、」

「あ、はい。先ほどの話ですね。――」

この鬼族2人の話をぼーっと聞きながら俺は今からどうするかを考えていた。

何しろ他の奴はまだ皆気絶しているので逃げることもできないし、この2人と戦って勝つのは間違いなく無理だろう。かといって神獣を探しに島に侵入してきた俺達をこのまま見過ごすとも思えない。どうするか……

そして、先ほど俺が説明した話を男が少女に伝え終えたのか、

「成る程ね。それでこの島に大勢やって来たというわけね。レヴィアス国の人間か……ねえ、人間の貴方？」

少女が俺に話しかけてきた。

「……なんだ？」

「貴方はおそらく火の大陸の人間だからわかるでしょう？この島にレヴィアタンが存在しないことを。それをレヴィアス国の人間達は知っているの？」

と言うので、俺は先ほど話してなかった、俺達とレヴィアスの奴等が手を組むに至った経緯を説明してやった。すると、

「へえ。人間にも変わった術を使う者がいるのね。ちょっと見てみたいわ。」

あ、でもそう言えば昔も結構変わった術を使う人間も居たのよ。まあ、レヴィアスの人間達は運が悪かったわね。いや、良かったのか

しらね？結果的に強力な仲間が増えたのだから」

少女はそう言った。

俺は、

「いや、運は悪かっただろうさ。何せ俺が聞いたことのある伝承通りならばほぼ間違いなく目的の神獣はこの島には居ないからな。結構無駄な時間を使わせられるぞ。本人達は納得していたみたいだが・・・」

「ふうん。ということは貴方はこの島に居る神獣が何か知っているわけね？」

「ああ。お伽噺みたいなもんだが、聞いたことはある。神獣フェニックスだろう？不死の神獣フェニックス」

「そうね。それは正しいのだけれど、何故急に神獣が現れたと思う？」

「急に現れた？いや、それよりもその口ぶりは神獣フェニックスが本当にこの島に居ると言っているようなもんだぞ。何故それを俺に言う？」

「ええ。言っておくけれどフェニックスは間違いなくこの島に居るわ。今はまだ幼獣だけれどね。そもそも私が約2000年ぶりにこの島に戻った目的がそれだもの。何故教えるか、というのはせめてものお詫びよ」

「そうか。一目見てその姿さえ確認出来れば俺達はすぐにでも立ち去るが・・・一つ気になったがお詫びとはなんだ？」

「ああ。簡単なことよ。私のせいでレヴィアスの人間、つまり水の大陸の人間に余計な心配をさせ無駄な時間を取らせてしまったから」それを聞いてもよく意味が分からなかった。が、この少女の言葉の意味をよく考えてみると・・・

！？

俺は一つの答えにたどり着き、そして、

「ま、まさかお前が・・・？」

「そう。つまり私がウォルスを一晩で消滅させたモノの正体、というわけ」

驚愕した。

「な、何故？」

「何故消滅させたか、ということ？そうね。一言で言えば邪魔だったからよ。私の目的のために」

「も、目的だと？さっき言ってたフェニックスが目的というのは？」

「まあ、この島に戻った目的もウォルスを消滅させた目的も同じではあるのだけれど・・・」

「同じ目的・・・」

「まあ、その目的自体は貴方たちには関係ないと思うわよ。辿り着

けば別だけれど」

「辿り着く？どついつことだ？」

「此方の話よ。まあ、それは特に気にしなくていいわ。本当に辿り着けるのなら自ずと分かることでしょうから。」

「自ずと分かる？いったい何を言っている……？」

「そうね。今はまだ私が何を言っているかは分からないでしょうね。でも……」

「なんだ？」

「……いえ、なんでもないわ。まあ兎に角、其処の寝ている人間達にも、この島に来ている貴方のお仲間の人間達にも神獣を手に入れるのは諦めるように言っておいて頂戴。」

「ああ。それは構わない。そもそも俺達の目的はこの島に見えた光り輝くモノの調査だっただけだ。それに仮に神獣を持って帰ってもどう扱えばいいのかも分からないしな」

「そう。聞き分けがいいのね……」

少女は少し残念そうに言い、

「……この人間は違つのかしら……？」

と、何やら一人ごとを言っている。

その時、遠くのほうからなにやら話し声らしきものが聞こえた。

~~~~~

俺達は銀色を倒したあと、奥に見えた森に入りしばらく進んでいた。さすがに岩山の道ほど険しくはなく、進みやすい道だったが、この森がまたやたらと長かった。それでも二時間も歩いただろうか、漸く森の切れ目みたいな場所に出た。そして、

「見て下さいみなさんっ！あれは門じゃないでしょうかっ？」

アズトが興奮したようにそう言ったので前方を見ると巨大な門が見えた。だがさらに近づいてみると、俺は門とは別に気になるモノも見えていた。

「ねえ、あれって人が倒れてない？」

ネクも見つけたのだろう、100mぐらい先の門の辺りには人らしき倒れている奴が何人か見える。立っているやつも。

「あれは・・・レンジさんの班では？」

アズトが言う。確かに今立っている3人の人物のうち1人は長い槍を持っている。あれがレンジだろう。だが、

「あの小柄な人と大きな人は誰なんでしょうか？」

ま、まさか鬼族っ!？」

俺と同じ疑問をアズトが言った。喋りながら少し早足で俺達は門へ近づいており、あと十数mまで近づいたとき漸くその人物達の顔が視認できる距離となった。

・・・やはりレンジの班の連中だった。だがレンジ以外の4人は皆倒れている。俺達の話し声が聞こえたのか立っている3人は皆此方を向いていた。

妙に顔色が悪いレンジに、おそらく鬼と呼ばれる所以だろう、額から二本の角が生えたやたら大きな男と、額から一本の角が生えた金色の髪の小柄な少女が其処にはいた。

と、誰かがその3人に向かって物凄い勢いで駆け出した。ミシルだ。あの鎧来てあの早さとは凄いな、と見ていると、

「ウオオオオオオーツ！」

ミシルが叫びながら背中から抜いた大剣にオーラを纏わせて、小柄な少女に斬りかかった。



第15話「少女」(後書き)

ご意見感想あればお願いします。

## 第16話の理由

~~~~~

ガルディアは現在眼前で繰り広げられている光景を見ながら数年前のことを思い出していた。

数年前ウォルス王国を訪問した際に錬兵場で見せてもらったような技を見れば、やはりあのミシルという男が持っていたのはウォルス王国の騎士が扱うバスタードソードだったと思える。ということはミシルという男は必然的にウォルス王国の騎士・・・だったと言えることができる。

というのも、あのミシルという男が今繰り出している剣技は剣の扱いに素人である自分から見てもバスタードソードという大剣を使うことを前提とした剣技だからだ。

ウォルス王国の騎士が使うつまりバスタードソードを使うことを前提とした剣技とは、剛剣技しつげんぎと言い主に対戦する相手の装備する武器や鎧を破壊する事を目的とし、(魔物と戦う場合はそのまま頭など急所を狙う)使い手には何より単純に膂力りょりょく、つまり力強さと併せて狙う場所の正確さが求められる。

今のミシルの動きはどう見ても少女の持つ武器らしき銀色の杖？を破壊しようと剣技を繰り出しているようにしか見えない。

また、バスタードソードは別名ソードブレイカーとも呼ばれ、並みの剣、例えばレヴィアスの騎士が使う片手で扱える程度の刃が真っ直ぐな刃渡り60〜70?ぐらいのブロードソード、よりも刃渡りは倍以上の長さがあり厚みや質量も数倍あって、かなり頑丈に作られている。

それを考えると、あのように武器を狙った大剣による剛剣技の息も

吐かせぬ連続攻撃など常人や普通の武器なら数回受けるだけでも不可能に思える。

だが・・・

~~~~~

ミシエール・オルレアン（現在はミシル・タイナと名乗っている）は、忘れもしないその少女の顔を見た瞬間少女に斬りかかった。

それは、三ヶ月程前に少女が行った所業に対する復讐心という感情も勿論あったが、何より先手を取らなければ以前のようになんとも足も出ずにやられる、訳も分からないまま得体の知れない妙な術を使われる、という考えが頭にあつたからだ。此方が戦いのイニシアチブを取るために頭の片隅ではそういった計算が働いていた。

目の前の少女にこの火の大陸に飛ばされてからこの三ヶ月・・・その間私はアズトの護衛をしたり仕事を手伝いつつ時間を見つけては自分の剣技に磨きをかけるべく王族護衛騎士の時よりも遥かに密度の濃い修練を重ねていた。

それにこの島に入ってからの道中、トウヤという少年に人の身体に流れる力、所謂オーラというものの使い方基礎的な手解きを受けた（私が急に喋ったからだろう、トウヤを始め皆一様に驚いていたが、トウヤは私が強さの秘密を教えてほしいと頼むと快く教えてくれた）そのおかげかオーラを使う適性が私にあつたのかオーラの基本的な利用方法、つまり身体的強化・装備武器防具強化の術を私は短時間で最低限身につけることができた。

そして、以前の時よりも、早さ・破壊力・頑丈さ、と戦いにおける様々な面で能力が上昇した私がいまだに狙ったのが厄介にも形を変える銀色の杖らしきものだった。のだが・・・

「くっ。このような細い杖が何故破壊できないっ！」  
先ほどから私は少女の杖に何回、いや何十回と大剣を叩き込んでいるが、杖には傷1つついていない。息が切れ手を止めたところ、

「ふふっ。久しぶりの再会の挨拶がこれなんて・・・やはり貴方はいいわね それと、この（嘆きの杖）は材質こそただの銀だけど、太古の昔にとある大魔道士が魔術と呪術を組み合わせで作ったものだから、多少以前よりその剣の破壊力が上がったところで破壊はできないわよ？何せ使い手の魔力を吸いとって、強度を上げるから。まあ、人間には魔力の内包量は分かりづらいでしょうけど」

と言って少女は銀色の杖を此方へ向けた。

「それにこの杖の特性はそれだけじゃなくてね。憶えているかしら？この杖を持つたまま魔法を唱えると・・・フアング」

と、以前見たように杖が凄まじい勢いで長く伸びると同時に丸太のように太くなり此方へ向かってきた。だが、オーラを使えば動体視力なども上がるのか、私は何とかその杖の軌道を見切り直撃を免れた。

「へえ。破壊力だけじゃなくてこの前よりも総合的な能力が上がっているわね。前は為す術もなく当たった（フアング）を避けるなんてね。見逃した甲斐があるってものだわ」

私が素早く攻撃を避けるのを見た少女が感心したようにそう言った。  
だが、

「見逃しただと・・・？」  
ふぎけるなっ！私は貴様だけは絶対に許さないと誓った・・・！失われた国のために！摘まれた尊い命のために！私自身の尊厳のためにつ！」

・・・と言ったものの、理屈はよく分からないがあのか杖を破壊するのはおそらく私の力では無理だろう。だが、得体の知れない妙な術、魔法とか言ったあれを使われる前に決着をつけねば・・・この少女は自分の手で倒さねば・・・  
そう決心した私は、

「・・・行くぞ」

「どござ」

「セアアッ！」

少女へ必殺の連続突きを繰り出した。

「また、その技？そこは進歩がない、くっ」

呆れたように言っていたが私の突きが少女の右肩を捉えていた。以前三連突きをしたときは全ていなされたが、早さが上昇している今の私の突きはあのとときより遙かに早く強力で、さらにもう1突き軌道を変えた突きを加えた四連突きのため、何とか当てることができた。

「・・・油断をしたつもりはないのだけれど。貴方本当に強くなっ

たわね。もう少し高みに昇れば、この子に匹敵するのではないかしら？」

少女は傍にいる同種族らしき男を見ながらそう言った。その男が、

「デユカ・リーナさま、冗談はお止めください・・・それにそろそろお戯れも止められたほうが。下手に調子に乗せても強さに隔たりがありすぎるため却ってその人間が傷付くかと・・・」

と、少女をたしなめつつ、此方を憐れみの目で見ながら言った。

「なんだと。貴様っ！」

私はその大男に剣を向けた。が、

「そうね。この人間の成長を見るのが楽しくてつい遊んでしまったわ、御免なさい」

「い、いえ。謝られることでは・・・貴女様の考えることですから我等のような若造が及びもつかないことは存じますが・・・」

「まあ、ね。でも、別に私を倒すために強くなって欲しいわけではないから、あながち遊びとは言えないのだけれど。要は確認みたいなものなの」

「確認、ですか？」

「そう」

勝手なことをつらつらと喋り出したので、

「黙れっ！貴様らの事情など知ったことかっ！」

私は怒鳴り大男に斬りかかろうとした。その時、

「まあ、待てよミシル」

今まで傍観していたトウヤがいつの間にか私の横に立ち話しかけてきた。

~~~~~

理由も分からないままミシルが急に戦闘を始めたので邪魔をしないように俺はしばらく見ていたが、ミシルの殺気とは裏腹に鬼族の奴らには戦意がないように見えたのでそれが気になった俺はついミシルを止めていた。

「邪魔をするな、トウヤ！私は今からこいつらを斬り捨てるっ！」

「うん、それなんだけどなミシル？こいつらに何か恨みでもあるのか？いや確かに俺もさっき銀色を有無を言わさず斬り捨てたけど、あれはあいつがいきなり此方を攻撃してきたからだぞ」

「恨み・・・と言えば言葉で語りつくせないほどあるが・・・」

そう言いながらミシルは憎悪の目を特に少女のほうへ向けていた。

「へえ。とりあえず何があったか聞かせてもらってもいいか？」

「.....」

「おい」

ミシルが急にそっぽを向き口を閉ざしたので思わず突っ込んだ。
と、そこへ

「推測だが、多分そいつの因縁はなんとなくわかる」

先ほどまでおれと同じく傍観していたガルディアが口を挟んできた。

「どういうことだ、ガルディア？」

「その男、ミシルとか言ったな。おそらくはウォルス王国出身の騎士だ」

「ガルディアが言っていた1晩で消滅したって国か？」

「そうだ。その生き残りだろう。どういう手段で生き延び今この火の大陸に居るのは知らんがその男の戦いを見る限りでは、間違いない」

「成程な。だとすればミシルがあそこまで激昂しているのはあの少女がウォルス消滅に何らかの形で関わっていたと考えるべきか・・・」

俺が何となく理解したところ、

「・・・違っ」

ミシルが呟いた。

「ん？違っつて何が違っんだミシル？」

「関わっているどころの話ではない・・・！やつが、やつこそがウルスを消滅させた張本人だっ！」

と少女を指して言った。

「えっ？そんなのか？でもあんな弱そうなやつがどうやって？」

とミシルの言葉に疑問を覚えた俺は少女を見ながら言った。すると、

「あらあら。弱そうだななんて。久しぶりに言われたわ」

言われた本人が楽しそうに言った。

「いや、鬼族だから何か俺には分からない強さがあるのかもしれないけどな。見た目でいえばあんたの横のでかいの方がよっぽど強そうだぞ。それにあの銀色の奴も」

「ええ、まあ見た目はね」

くすくす笑いながら少女はそう言った。そしてふと疑問に思ったのか、

「銀色？」

と聞いてきた。ので、俺は

「ああ。なんか青白い火のようなものを吐くやつだった。いきなり此方を攻撃してきたんで叩き斬ったが。魔物かとも思ったが、血も

でないし金属みたいな皮膚だったし、あれはなんだったんだろうな。赤い石とか妙に綺麗だったけどな」

未だにあれの正体がいまいち分からない俺は、この島のやつならなにか知っているだろうと思いき軽い気持ちで聞いた。すると、

「な、なんだとっ！^{プラーナマシン}精気兵を斬ったとっ！ばかな・・・あれの材質は鋼と銀の合金だぞ。いや、そんなことよりもイレイザーで消し炭になっていないだと・・・？魔法も使えない脆弱な人間風情がいたいどうやって・・・」

横の鬼族らしき大男が何か驚いてた。というか今さらっと馬鹿にしたよなこいつ？

その発言に軽くムカついた俺は、

「どうやって？知りたいか？・・・こうやってただけだっ！」

オーラを開放し大男と少女にプレッシャーをかけた。

「ぬぐっ！？なんだこれはっ？プラーナ？いや、違う・・・！」

「へえ。魔力じゃないのにこの圧倒的なチカラ・・・彼も可能性があるわね。ううん、それどころか今の所最有力候補ね」

大男は苦しげに顔を歪めていたが、少女は平然としむしろ楽しそうですらあった。

「・・・あなた、何者なんだ？」

結構全力でプレッシャーをかけているのに少女があまりにも平然としているので思わず聞いた。

「？わたしのことがしら？何者・・・そうね、私の名前はデュカ・リーナ、鬼族よ」

「デュカ・リーナ・・・？何か聞いたことがあるような・・・」

俺は何となく聞き覚えがあるような名前を聞いて首を捻っていたが、そこへ

「小僧、俺が説明してやるよ」

レンジのおっさんが言ってきた。

おっさんは先ほどまで鬼族の大男や少女と色々話をしていたらしく、俺の疑問についての説明や分からない点がいくつかあったが納得できる点もある話をした。

魔神とはな・・・どうりで聞き覚えがあるわけだ。俺はそう言った昔話とかモノガタリは嫌いじゃないのでよく本を読んだりしていたからな。ただ、鬼だの魔神てつきり空想の産物だとばかり思っていたが、俺の目の前に立つ少女を見ると、そんな考えは吹き飛んだ。少女が放つオーラでもない不思議な空気は魔力といい、その魔力を使い様々な不思議な技を繰り出すことを魔法というらしい。

ただ、さつき見た感じではオーラの使い方と似たような部分もあったが・・・発想が同じなのか？

「でも、また辿り着ける可能性がある人間に出会えたなんて、今日はとてもいい日だわ」

少女デュカ・リーナが上機嫌にそう言った。

「どづいうことだ？また、とか辿り着ける、とか？」

訳の分からないことを言うので聞いてみると、

「んー。その騎士もそうだし貴方もなのだけれど、要は可能性の

話ね」

ミシルをちらりと見ながら言うが俺はますます分からず、

「可能性？」

「そう。闇の大陸に行ける可能性。」

「闇の大陸？」

「そう。人間がそこに行くためには最低でも、ある程度以上の強さ、もしくは誰かに対する尋常ならざる憎しみや恨み、それが新しいモノを産み出せる程の発想や閃き、等が必要な。」

「あまり良く分からないんだが・・・」

「まあ、今は別に分からなくてもいいわ。それに、仮にそれらを兼ね備えている人間だろうと辿り着けるとは限らないのだから」

「ふーん？」

分からないながらも何となく納得したような気がした俺は一応相槌を打った。

そこへ

「貴様らの事情など知らんと言った・・・!!」

俺達の話にしびれを切らしたのかミシルが再びデュカ・リーナへ剣を突き出した

「まあ、以前から考えると貴方は格段に強くなったわ。それに何より私への憎しみが増加しているのが一番良いところね。楽しいから

このまま貴方の相手をしていたいところね」

デユカ・リーナはミシルの剣を全て避けながらそんなことを言っている。

「でもね、私はまだまだ色々やらなくちゃいけないことがあるの。だから貴方にはかり構ってももらえないのよ」

「私の知ったことかつ！貴様だけはっ！」

ミシルが先ほど見せた4連突きを再び放ったが、今度は全てかわされた。

「くっ！」

「それに自分でも分かっているのでしょうか？今の貴方の剣では決して私を倒すことなどできないと。先ほどより剣速が鈍っているわよ。これもほら」

デユカ・リーナは先ほどミシルが与えた傷を見せながら言った。そして手で傷に触れた途端、深手に見えたその傷がみるみる癒えていく。

「なっ!?!」

「ねっ？まだまだ今の貴方程度じゃ私に傷を残すことすら無理ね。もっと戦いの経験を積まないと、闇の騎士ダークナイトには触れることすら出来ないわよ」

ダークナイト
「闇の騎士？」

「まあ、別に会うかどうかとも分からないけれどね。じゃあ私はそろそろ行かないといけないから・・・ジンくん？」

ミシルの剣を避けつつデュカ・リーナは横の大男に話しかけた。

「ハッ！」

「この場はおまかせしても良いかしら？」

「勿論です。デュカ・リーナさまっ！貴女に言われるのなら人間どもを皆殺しにでもしてみせましょっつ！」

「うん、それは無理だと思うからしばらくの間足止めだけして頂戴」

「・・・はい。承知しました」

最初は意気込んでいた大男がデュカに言われて落ち込んだように頂垂れていた。まあ、デュカはともかくあの大男ぐらいなら一閃できるだろう、俺なら。

「さすがに貴方だけじゃ分が悪すぎるだろうから・・・召喚！^{サモン}牛鬼！」
デュカが杖を地面に向けて叫んだ途端地面が妖しく光り、その光の中に大きな人影が見えた。

「じゃあ、あとはよろしく」

とデュカは言うやいなや姿を消した。

と同時に光も薄れ中の人影もはつきり見えるようになった。

・・・そこには鬼族の大男よりも一回りはさらに大きな身体をした

鬼族みたいな角の生えた牛が立っていた。

第17話 鬼族

~~~~~

ロナン・サタクは火喰い島の中央部に建つ神殿の中にある「回復の間」にて先ほど受けた傷の治療をしていた。そこには、

「いやあ、ロナン殿がここまで手傷を負われるとは・・・昨今の人間の強さというものは儂らが現役の時よりも遥かに強くなっとりますのう」

と、年寄りじみた口調でロナンに話しかける者がいた。

「そうか・・・まあ、いくら複数居たとはいえこの俺がこうまで手こずるとは思わなかったな。それにマト婆程の戦闘経験者がそう言うとはな・・・」

「まあ、儂は戦闘よりもむしろこつちが専門ですがの。直接人間と戦ったことはほとんどないが、それでも現在の4柱の皆と戦えるほどの実力を持った人間など儂の今までの経験でも一回ぐらいしか見たことはないですぞ」

と、先ほどから俺の傷口に自らの手を当て治療魔法による治療を施している。

このマト婆とはマトフ・サトイと言い現在この島で最高齢とされており、現在は2500歳をいくつか越えたところである。



鬼族の寿命は人間の凡そ30〜40倍程度で身体能力は基本的に数倍はあるが、マトフは俺が物心ついた頃見た目がすでに年寄りだった記憶がある。

「まあ、250年程前に訪れたあの一味は別じゃったがの」

そういえば俺はマト婆から強い人間がこの島に来た話を聞いたんだっけな。

「スサノオだったっけか？俺はまだガキだったんで実際見ずに聞いたんだけど・・・」

「そうじゃのう。ロナン殿は当時まだ戦闘もできないぐらい腕白坊主じゃったからの」

「まあ、な。ただ当時の4柱、つまりあんたやガトウに聞いた話じやそいつらも魔法を使ったらしいじゃねえか？今島に居る奴等も魔法みたいな技を使うが何か関係があるのか？」

俺が先ほどマト婆に説明したのは、魔法らしき術を使う人間の侵入者に手傷を負わされたという話だ。

「ふうむ。断定はできんが、もしかしたらそやつらは（闘神）共の流れを汲む者かもしれんな。同じ国か、はたまたその血筋か・・・」

闘神とは250年前にこの島にやってきたスサノオという人間のことを示す。

何しろ身体能力で劣る筈の人間なのに4柱と互角の戦いをしたという話で、その戦い以降我等鬼族はそいつを畏怖を込めて闘神と呼んでいる。

「だが、それはそれでおかしな話じゃねえか？」

「そうじゃな・・・だから断定はできんのじゃ」

というのも、そのスサノオ共と当時の4柱は結局引き分けに終わった戦い以降、お互いの力を認めあい、また戦力の消耗を避けるため互いの領地への不可侵の契約を結んでいるはずだからだ。

「まあ、儂等にとってはそうでもないが250年という歳月は人間にとっては色々あるのかもしれないの・・・代替わりなどがあって契約も無いに等しい状態になっておるのかもしれない」

「ぬうう。何て身勝手な奴等なんだ、人間め！」

「まてまて、ロナン殿。あくまでもそれは推測じゃ。別にそうと決まったわけではないわい」

「だがよ・・・」

傷の治療も終わり俺がマト婆と話していると、（回復の間）に誰かが急ぎ足で入ってきた。そして、

「ロナンツ！貴様！単独行動を取った挙げて侵入者にやられ逃げ帰っただとっ！」

俺に向かって怒鳴った。

「はあ。うるせえな、フェニス。そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよ。」

こいつはフェニス・カハラという小言の多い爺いだ。歳は2000何十歳ぐらいで見た目はこつにおっさんだが、一応4柱の長で取りまとめをやっている。得意な魔法は防御それに結界を張ることだ。戦闘では鉄壁を誇る。

「そんなことよりも、フェニス。侵入者の人間共の目的は神獣だぞ。あんたがしっかり見張ってないと駄目だろうが」

「そんなことよりもだと。貴様は本当に・・・い、いや待て！今何と言った！？神獣だと！？」

俺はめんどくさいながらも答えてやった。

「ああ、どうやって知ったかは知らんが確かにそう言ってたな。最もこの島の何処に居るかとかは知らなそうだったが」

「恐らくですが、神獣を嗅ぎ付けられた原因は不死鳥転生の際の輝きでしょうね」

新たにもう1人（回復の間）に入って来ながらそう言った。

「ノルエル？どういうことだ？」

その人物はノルエル・ハザマと言い、鬼族には割合が少ない女性だ（この島の鬼族の総数は約500で男性は約400女性は約100）。また歳は4柱で最も若く150を数年前に過ぎたばかりだ。魔法は土属性を使い強さはそれなりだが、こいつには他の誰にもない能力、プラーナの流れを見ることができるといふ特殊能力がある。

「あの時、つまり不死鳥転生の時に島全体が眩い光に包まれましたよね。この島から一番近い人間の国、火の大陸ですか、あそこからここは50?と離れてないですから人間でもその光は視認が可能だと思われます」  
成る程。そういうことか。

「それに、関係ないかも知れませんが・・・」

「ん、まだ何かあるのか、ノルエル?」

「いえ。侵入者が来たと思われる時からしばらくして精気兵ブラーナマシンの反応が途絶えたのですが・・・」

「なつ! お前まさか精気兵ブラーナマシンが侵入者にやられたとでも言うのか?・・・! いや、そうか・・・」

「はい。私もまさかとは思ったのですが、ロナンさんまでその有り様だと・・・」

「確かにな・・・俺が相対したやつとは別のやつだろうが、あいつらと同じぐらいの実力のやつが居るならその可能性は高いな・・・」

精気兵ブラーナマシンは俺が全力で風の魔法を駆使してようやく倒せるほどの強さだから、俺が苦戦した奴等ぐらいの強さの連中と出会っていたら仮にやられたとしても不思議ではない。フェニスガ、

「くつ。ロナンが迂闊なだけかと思えば。そんな腕の立つ侵入者ならいよいよ不安になるな。こうなれば、ガトウと合流して此方から先に攻めるか・・・?」

ぶつぶつ呟いていた。  
誰が迂闊だこの爺い。  
だが、

「そうだな。それぐらい強い奴等だった。それがこの神殿に詰めている奴等を最低限神獣の警護に残して一気に此方から攻めるのはどうだ？50は居るだろう？」

と提案してみるも、

「いえ、それでは此方が手薄になりすぎます。侵入者は何方向から何人来ているかどれがどれぐらいの強さなのか、今のところ不明です。ですのでそれは危険かと」

ノルエルに一蹴された。  
だが、どうするべきか。

恐らくまだ侵入者が此処に辿り着くまでは一日ぐらいの猶予はあるだろうから、とりあえずガトウを探して相談すべきか・・・

と、その時部屋に生暖かな風が吹き、

「今の子達は頭が悪いのかしら・・・」

頭に手をやり呆れたような声を出す少女が部屋に立っていた。

くくく

どう見てもいきなり沸いて出たようにしか見えないその牛面がこの場にいる者を見回しながら唐突に喋りだした。

「まったく、あのお方は・・・何の説明もせずに・・・だが召喚されたということは、つまりいつもの如く視界に入る生物を全て殲滅すればよいだけ、ということか・・・まったく人使い、いや鬼使いの荒い御仁だ・・・」

というより何か愚痴を言っていた。

鬼族の大男が焦ったように、

「いや、待てっ！貴様は多分だがデユカ・リーナさまの仲間だろうっ？先ほどデユカさまが召喚魔法、見たことはないがおそらく召喚魔法で貴様を呼び出したのではないかつ！？それならば私はデユカ様の味方、むしろ家族とも言える存在だっ！此方を敵視するのはやめろっ！」

牛面に言っていた。

牛面は、

「なんだ、貴様は・・・？我は確かにあのお方、デユカ・リーナ様と召喚契約を結んでいるが、基本的には契約を結んだ本人以外は殲滅することになっているのだが・・・」

と、大男をなめまわすように見たあと、

「ふん。だが貴様があの前方に何となく似ているような気がするのも事実。そもそもあのお方が召喚しっぱなしで何の説明もせずに消えたから、訳も分からず言ってみただけだ。まあ、貴様は一応殺さずにおいてやる」

「ぐぐつ。まるで納得はいかないが・・・まあいい。とりあえずこの場に居る私以外を倒せば間違いはないはずだ」

「そうか」

どうでもいいが牛みたいな顔してよく喋るなこいつ。それに召喚魔法？召喚契約？何を言っているかさっぱりだ。ただ1つ分かってるのは、

「つまり俺たちを殺そうというわけだな、牛面。どうやるんだ？魔法ってやつか？それともそのバカでかい斧か？」

俺は牛面の持つ2つの斧を指しながら尋ねた。

「ああん？なんだこの小さいのは。まあ、死ぬ前にどう死ぬか教えてやっても特に差し支えはないが・・・」

牛面が言ったが、大男が

「貴様、油断するなっ！確かにそいつは小さいが恐ろしく強いはずだ・・・何せデュカさまが私より強いと判断したのだから・・・」

自分で言っ  
て落ち込んでいた。

それにしてもこいつら小さい小さいって……いや、確かに大男は2m以上はありそうだし牛面はそれよりまだでかいから間違っ  
てはないが……

「それは貴様が弱いだけではないのか？」

「ぬぐつ！そ、そんなことはない」

「そうか？まあいい。そんなに言うなら本気でやっ  
てやるとしよう。この二丁板斧にちようばんぷでなっ  
！」

と牛面が言いながら両手に持っていた斧を此方へ向けた。

俺はそれを見ながら炎斬を抜いた。そして、

「ミシル。あの鬼族のほうは任せていいか？」

ミシルのほうを見て聞くと、

「あ、ああ。それは構わないが……奴は一体どこから？いや、あの女の  
ことだ。また得体の知れない術を使ったのだから」

1人で納得していた。ので、俺は牛面に向き直った。

「よし。行くぞっ、牛面！」

「牛面牛面と、この小さいのは……我が名はタウラ・ミノス！鉄てつ島のしま覇者、タウラ・ミノスだっ  
！」

「鉄島？またよく分からん場所だな……とにかく行くぞっ、ミシ



ル！」

「応っ！」

俺はタウラへ、ミシルは大男へと同時に斬りかかった。

~~~~~

俺はその少女を見た瞬間、2つのことを思った。

1つは鬼族特有の角が生えているものの、見覚えのない顔に何か懐かしい感じがしたこと。

もう1つは自分より明らかに年若いその少女の見た目からは考えられないほど異常に禍々しい雰囲気が出ていること。
つまり、

「戦う気はしねえな……」

俺は呟いていた。他のやつからはよく好戦的だの戦闘狂だの言われる俺ですらそんな気分になった。当然、

「ええ、そうですね……ロナンさんの言う通りです……」

「ロナンですら、そうか……だが、知らない者のはずなのに妙に懐かしい感じがするな……」

ノルエルとフェニスも俺と同じ印象を受けたらしくやや気後れしながらそう言った。

「ふむ？ 俺もこの少女は見たことないが……何か懐かしい感じが

するのう・・・」

マト婆までもがそう言ったところ、

「ふう。まあ無理もないわね。この姿ですものね・・・？先ほどもこのやり取りをしなかったかしら・・・」

少女が何か呟いていた。

「で、おそろくだけど貴方達が現在この島の4柱とやらね？守護者ではなく」

！！！！

少女がそう言ったときこの場に居る者が全員驚愕した。
さらに少女は、

「ああ、そんなに驚かなくても。何故貴方達が分かったかと言うと、貴方達の魔力量と先ほどジンくんから聞いていた話から判断しただけよ」

「ジンくん？・・・ガトウのことか？」

俺は、率直に疑問をぶつけた。

「ええ、そうね。その子からこの島の現状を色々聞いたの。で、今侵入者と戦っている」と

！こいつ、今ガトウが侵入者と戦っていると言ったのか？

「お、おいあんたっ！今ガトウは侵入者と、」

「ええ、戦っていると思うわ。それにしても・・・はあ。まさか姿が違っただけでこの反応とはね・・・さすがに顔見知りになんな態度を取られると少し落ち込むわね。まだ子供だった子はともかく、」
とフェニスを見ながら言い、

「まさか貴女までもがね、マトフ？」

マト婆を見ながらそう言った。

「なっ、顔見知りじゃと。儂はお主と会ったことなぞ・・・
！ま、まさかお主、い、いや貴女はっ！」

日頃マト婆が見せないとても慌てた反応をしていた。そして、

「デュカ・リーナさま・・・？」

と、恐る恐る言った。

「そう やっと分かってくれたのね。久しぶり。フェニスの坊やも久しぶりね」

言われたフェニスは口をあぐりと開けて呆けていた。

「坊や？」

「・・・はっ！あまりの驚愕に我を失っていた。本当にこの者がデュカ・リーナさまなのか、マトフよ？」

「ええ、そうじゃフェニス殿。この方の放つ雰囲気は他の者が持ちようもない。まさしくかつてのデュカ・リーナさまと同じじゃ。じやが……」

煮え切らない態度でマト婆が少女を見る。

「どうしてこんな姿かと言うことかしら、マトフ？」

「ああ。そうじゃ。デュカ・リーナさまがこの島を出る際は、今の儂よりもまだ婆さんじゃったはずじゃ。雰囲気こそ同じじゃが、その姿は……」

「そうね。あの頃の私の見た目はお婆ちゃんだった。貴女は……老けたわね。昔は若く美しく聡明だったのね……」

少女がマト婆を軽く憐れみながらそう言った。

「ぬぐつ！……つだが、いったい何があつたのじゃ、デュカ・リーナさま？」

マト婆が少女に尋ねると少女は闇の大陸というところで起こった出来事、それに伴い少女の身体に転生して現在の姿になったこと、目的を果たすために神獣に会いに来たことなどをかいつまんで俺達へ説明した。

そして、

「それで、先ほどの貴方達の頭の悪い会話に戻るのだけれど」

俺達の先ほどの会話を聞いていたのかそう言った。

「い、いや頭の悪いと言われましても。ロナンが苦戦するほどの者

なら然るべき対処をするべきだと思い・・・」

フェニスが言い訳じみた言い方をしていた。

「いや、だからね？そもそも前提がおかしいの。人間が此処まで侵入してきて神獣まで辿り着くとしましよう。でも、だからなに？」と少女デユカ・リーナが言い放った。

「？」

デユカ・リーナ以外の者は皆一様に首を傾げた。それを見て呆れたように、

「いや、だからね、神獣・・・フェニックスはどんな特性を持っているかってこと。」

デユカ・リーナは言った。フェニックスの特性。そんなものはこの島の者なら誰でも知っている。

まず、決して死なない。1000年に一度ぐらいの割合で肉体が燃えつき滅ぶのだがその燃えつきる際の炎の中から肉体を再生させるためだ。ただし、その際に全魔力を使いきるのか、再生してから一年ぐらいは幼獣の姿で大した能力も魔力もない。そして、別名火喰い鳥ともいい、火を体内に取り込み無尽蔵に魔力へと変換するため、その身体は・・・

「そういうことかっ！」

俺はやっとデユカ・リーナの言わんとすることが分かった。

「つまり、神獣に会っても現状連れ去る手段がないということだなっ！」

「そういうこと。成獣なら喋ったり体温を調整できたりするでしょうけど。何せフェニックスの体温は最低でも400はあるから、魔法を使えない人間は触ることもできないわよ。まだ、飛べないでしょうしね」

そうだ。フェニスの奴が神獣を見張ったり世話をできるのは奴が防御の魔法を使っているからだ。当たり前のことになりすぎてすっかり忘れていた。

「ただ、例外として水属性の魔法を使える人間がいた場合は分からないけれど。魔力を探知した限りではそんな人間は居なかったわ」「ということは、貴女も他者の魔力を測ることができるのか？」

「ええ。それはともかく。今の神獣の世話役は誰かしら」

と俺に聞いたので、俺はフェニスを示した。

それを見て少女はフェニスへ、

「じゃあ貴方、私を神獣のところへ案内して頂戴」

と、微笑んで言った。

くくく

俺は先手必勝とばかりに上背の遙かに勝る牛面に斬りかかった、が

ギーン！

「力で劣るなら速さ、とでも考えたか小さいの・・・だが、無駄だっ！」

牛面の持つ巨大な二本の斧によって阻まれた。

「牛面のくせに素早い動きをするもんだ。だがっ！」

俺はさらに高速で何か所か素早く斬りつけた。

その巨体に似合わずそれを全て斧で防ぐとその牛面は、

「ふん。速さだけなら大したものだが、死ねっ！」

今度は俺に両手で二丁の斧を振り回してきた。

ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン

うおっ！意外と早いな。そ、それに頭を的確に狙ってくる。俺はその攻撃を全てかわしながら、

「当たらないな。そんな遅い攻撃じゃ！」

此方から斬りつけた。

ブシュッ！

牛面は攻撃に意識を割いていたのか今度は当たったが、浅い・・・！

「チツ！生意気な。思ったよりも早い。だが、その程度の小さなカタナではかすり傷ぐらいしかつけれんぞっ」

牛面は言い、俺がつけた傷を意にも解さず二丁の斧を再び振り回した。

威力が足りないのか？

そう思った俺は防御と早さに割いていたオーラを炎斬にも集中させた。

とりあえずはあの斧をぶった斬る！

「ハアツ！」

俺はオーラを纏った炎斬で二丁の斧の切っ先の交差する場所を狙った。

ガギイーン！

「なにっ！」

しかし、手応えはあったものの斧を斬ることはできなかつた。牛面が、

「ほう・・・人間風情が大した威力だな。そのカタナの力か？いや、我と拮抗している・・・だと」

「カタナ？カタナってなんだ？」

お互いの武器がくっついて拮抗している状態で、また俺の知らない言葉を話す牛面に俺は聞いた。

「？その細く小さな刃はカタナというのではないのか？ムンっ！」
ググツと二丁の斧を押し付けながら、

「いや、これは剣だが・・・っらぁー！」

俺も炎斬を押しつける。

「そうか、まあどちらでもいい。どちらにせよこの二丁にちやうはん板斧ほどの
業物ではないだろう。何せこれは鉄島一の鍛冶師が鍛えたモノだからなっ！」

と、斧をさらに押しつけてくる。

「そ、その鉄島とはなんだっ？」

俺も押し返す、が

「・・・死に行く者が聞いても意味は無かるう・・・そろそろ終わりにするぞっ！」

牛面がさらに力を込めて押ししてきた。

俺の炎斬が押しきれられ右手のほうの斧が俺を斬った。

「ゲアアツ！」

俺は斬られ、倒れた。

否、倒れたと見せかけ牛面の右横に飛び、

「ウオオツ！」

ズバツ！

牛面の右脇腹あたりを斬った。

「グアアアアツ！」

今度は効いたのか、牛面は苦しそくに声を上げた。

「き、貴様我が斧を食らって何故無傷なのだっ？」

そりゃそうだ。

オーラで強化した俺の身体は鉄より固い。鉄島とやらでの大した業物かもしれないが、所詮は鉄の斧で俺には通じない・・・まあ、重たい衝撃は多少あったが、あえて食らって隙を突いたのは成功したな。

「まあ、単純な話だ。お前より俺のほうが強いっていう」

いちいちオーラだの説明がめんどくさいので適当に答えた。

「ぐっ！に、人間風情があ！調子に乗るなあ！」

と、牛面が怒鳴り

「我が本気を出すことになるとは・・・貴様は殺す」
「その様でか？」

「ふんっ！ハアアア・・・！」

牛面が身体全体に力を込めるようにすると、みるみる身体の色が変わっていく。丁度斧の刃の部分のような色に・・・

「っ！なんだっ？」

俺が驚いたようにそう言うと、

「これが我が秘術っ！（鉄化の術）だっ！こうなれば貴様のカタナなど通さんぞ、人間っ！」

だからカタナってなんだ？と思いながら、俺は手近にあった石を拾って牛面の胸めがけて投げた。

キーン！

まるで金属のような音がした。

「フハハハ！分かったか人間！我が身体は鉄の硬度を誇る！（鉄牛鬼）の異名は伊達ではないのだった！」

牛面が自慢げに何か言っていた。いや、お前の攻撃も俺には通じないんだが・・・

「はぁ」

俺は嘆息し溜め息を吐いた。

「ぬっ？どうした小さな人間、私の秘術に絶望したかっ？」

フハハ、と何が嬉しいのかそんなことを言っていた。

「いや、な。さっきの女が相手ならまだまだ面白そうだったな、と思っただけだ」

牛面との戦いが思ったよりつまらないと感じた俺はそう言いながら、大気中のプラーナを炎斬に集中させ始めた。

「ぬっ、デユカ・リーナさまのことかっ！？フ、フハハハッ！貴様ごときがあのお方の相手になるとでも？・・・言いたくはないが、あのお方は我よりも遥かに強いぞ！」

プラーナを炎斬に取り入れた俺は、

「そうか、楽しみだな」と言い、

「楽しみだとっ？貴様は我に今から、ズシャッ！」

高速で一気に間合いを詰め炎斬を横薙ぎに牛面の胴へ斬りかかった。

「あ・・・？」

胴から真っ二つになった牛面が空を見上げた状態で驚いていた。

「今から、何だ？斬られる・・・か？」

「ガフツ！ば、バカなっ！鉄の・・・硬度を誇る我が・・・身体が
あっ！」

と、言いながら牛面の身体が光に包まれ、そして消えた・・・

「？鬼つて死んだら消えるのか？そもそもあいつは何だったんだ？
鬼？牛？」

考えてもよく分からなかった。

それにしても、（カタナ）とは一体何だ？牛面が言っていたように
炎斬は剣ではなくカタナなのか？

ミシルの剣と炎斬を見比べて見ると、確かに炎斬は細く短いし形も
ミシルのは両刃なのに対して、炎斬は片刃で反りがあるが・・・

と、ミシルは大丈夫か？と思いだして少し離れた場所で戦っている
ミシルを見ると、

鎧が所々破損しながらも何とか立っているミシルと、いつの間に手
にしたのか透明な槍らしき武器と盾を持った無傷の鬼族の大男が向
かい会っていた。

第17話 鬼族 (後書き)

何となく話のきりが良いっぽい箇所で切りました。

第18話 火ノ鳥

~~~~~

ミシル・タイナは傷ついた身体で考えていた。

復讐すべき相手によく巡り合えたと思いきやその存在が突然消え、別の者と相對することになり、どうにもやり場のない感情があったことは認めるが、決して油断したわけではない。なのに鬼族の魔法というものがよもやここまで得体の知れないものだとは思っていなかった。

「どうした、人間よ？来ないのか？先ほどデュカ・リーナ様に向かった気迫はどうした？」

目の前の鬼族の大男、ジン・ガトウと名乗った者が全身傷だらけになった私へ嘲笑を含ませて言った。  
何故私がここまで苦戦しているのか？

私が復讐すべき少女、デュカ・リーナというのだろう彼奴は確かに一見何の変哲もない少女に見えたが、実態はその恐るべき残虐性とこちらの想像もつかない手段で祖国を滅ぼしたほどの実力の持ち主だ。先ほども以前よりかなり腕を上げた筈の自分が軽くあしらわれたのだから・・・

だが、今私の目の前に居るジン・ガトウという鬼族の男はデュカ・リーナよりも明らかに格下に思える。そのような相手に私がここまで苦戦しているのは・・・

「アイススタガー  
氷刃！」

ジン・ガトウがそう叫ぶとどこからともなく無数の透明な小さな短剣がかなりの速さで此方へ飛んできた。

「くっ！がつ！」

少なくとも数十本はあるその飛んできた短剣を剣で薙ぎ払い避けたがそれでも避けきれず二本ほどくらってしまった。先ほどから奴に突撃しようと近づくもこのように得体の知れない術を使ってくる。一度は奇襲で我が剣の間合いへ近づき斬りつけたが、

「ふん。まあ私の氷魔法の前には無駄か・・・それに私に近づけたとしても先ほどのようにこの、氷盾はアイゼス抜けれないがなあっ！」

奴が左手に持つ透明な盾に受け止められた。

「貴様だけにあまり時間はかけられんな。行けっ！氷槍！」アイスジャベリン

言うと同時に奴が右手持っていた透明な槍を此方へ投擲してきた。私はそれをなんとか弾いた、が

「終わりだ、人間！氷剣！」アイスフランド

いつの間にか、ジン・ガトウが私の懐に飛び込みどこから取り出したのか透明な剣を私に向かって振りおろしていた。

~~~~~

「へえ。無邪気なものね」

横の少女が気持ち良さそうに眠る目の前の幼い鳥の姿の神獣を見て
そう呟いた。

私は一週間前から防御魔法を使いつつこの幼獣の世話をしてきたが・
・

「熱くはないのですか、デユカ・リーナさま？」

私は、防御魔法を使っているので数百度を超えているであろうこの
中央の間でも別に平気なのだが、

「ええ、大丈夫よ。ありがとうフェニス」

と言われた。まあ、このお方は今までにそれこそ何回もフェニックス
の転生に立ち会ってきたのだから、要らぬ心配だったとは思いますが・
・

「それにしても・・・」

「？なんででしょう？」

デユカ・リーナさまが此方を見て言うので尋ねると、

「貴方も年を取ったわね・・・昔はババ、ババと甘えてきて可愛か
ったのだけれど・・・」

「ブツ！いつの話ですかっ！からかわないでくださいっ！そんな大
昔の話を持ち出されても・・・」

気恥ずかしいことこの上ない。

「ああ、ごめんなさい。別に貴方がどうこう言うわけじゃなくてね。何時の時代でもアレは変わらないなと思っただけで。別に他意はないわ」

と寝ている神獣を見ながらそう言った。

「はあ。私は幼獣の姿を見るのは初めてなのですが、そういうものですか？」

1000年前や2000年前、フェニックスはこの島ではない場所で転生したという話を聞いたし実際見てもいないので私はそう言った。

「そうね。もちろん成獣も何回か見たことはあるのだけれど、やはりあまり変わらないわね」

「成程。それで、そろそろフェニックスを求めた理由を知りたいのですが・・・」

私がそう切り出すと、

「そうね。貴方はアレを護る義務があるものね。いいわ教えてあげましょう」

と言いながら眠っている神獣へ近づいた。

「ちよっ！お待ちくださいっ！」

私が慌てて追いかけると、デュカ・リーナ様は此方を振りむいて言った。

「要はね、私が犯した失敗を取り戻すための」

「失敗……ですか？」

「そう、私はこう見えて100歳を超えているのよ……この身体でね」

それを聞いて私は疑問に思った。闇の魔法による転生の魔法というものがどういったものか詳しくは分からないが、通常鬼族というものは齡50を超えたあたりで成人の身体となる（知能、知識は個人差があるが）なので鬼族の身体ならば100歳を超えていると見た目は少なくとも大人でないとおかしい。

「まあ、緊急事態ではあったの。肉体と同時に魂が消滅させられそうだったというね……」

「！デュカ・リーナ様ほどのお方に一体なにが……」

「それはともかく、そのせいで最も手近な肉体にしようがなく乗り移ったのよ……鬼族でもない人間の肉体にね……」

！？

「で、ですがその角は？」

「ああ、これ？おそらく人間の肉体に乗り移った際に私の膨大な魔力に全て元の身体のままだと耐えられなかったのでしょうかね。いきなり生えてきたわ。それに肉体も年を取らなくなっただしね。ただ……」

「それ以上は仰らなくて結構です。人間の肉体、ということを書いて貴女の目的が何となく分かりましたから・・・」

「多分、貴方の考えている通りよ。私の目的は不死の神獣フェニックスの血。人間達が太古の昔より追い求めてやまない火の鳥の・・・不死の秘薬と呼ばれるその血・・・」

そう言うとデュカ・リーナ様は寂しそうに笑った。

~~~~~

ガギインッ！

間一髪だった、か。

俺は今にもミシルの脳天に振り下ろされそうだった大男の透明な剣を何とか受けとめ、押し返した。

「・・・すまない、助かった・・・」

「貴様、何故!？」

ミシル、大男が俺に言った。俺はミシルへ

「いいって。それより変わろうか?こいつのほうが牛面よりは楽しめそうだ」

と大男を見ながら言った。大男は、

「なっ！やつはっ？」

と、先ほどまで俺達が戦っていた場所を見たが、

「居ないだど・・・？」

「ああ、胴斬りで真つ二つにしたら光って消えたぞ？お前ら鬼族は死ぬと消えるものなのか？」

「そんなわけがあるかっ！・・・おそらくは、召喚魔法の特徴か・・・やつめ、さんざん偉そうに言っつてこの様か。いや、デュカ・リーナ様への文句になりそうなのでそれは言うまい・・・それよりも、この場をどうするかだ・・・私にこの人間を倒すことができるのか？先ほどの得体の知れないプレツシャーは何だったのだ・・・デュカ・リーナ様も私では足止め程度しかできないようなことを言っていたが・・・いや、いくらあの方とはいえ私の実力を完全に見切っているわけではあるまいが・・・」

大男が何かぶつぶつ言っていた。

独り言を言っているつもりだろうが全部聞こえているぞ。というか独り言多いなこいつ。

「で、どうするミシル？」

「いや、助けてもらって何だがこいつは私にやらせてくれ」

「要らない世話だったか？まあ、多分その剣で防いでただろうけど一応、な。じゃあ、俺は離れて見とくよ」

実際俺が防いだときミスルは剣を構えていたからな。俺が何もしなくても死ぬとは思えなかった。ただ、それなりに強いと思っていたミスルが追い込まれていたんで少し焦っただけだ。

俺は邪魔をしないよう先ほど戦っていた場所あたりまで下がった。と言っても10mぐらいしか離れてないが。と、ミスルが叫んだ。

「いつまで、ぶつぶつ喋っているっ！行くぞっ、ジン・ガトウ！」

「はっ！奴は何処だっ！」

ジン・ガトウと呼ばれた大男が我に返ったように言った。俺を探しているのか？

「貴様の相手は私だっ！他の誰にも邪魔はさせん！」

それを聞いたジン・ガトウは、

「ほう、そうか。ならば今度こそ、貴様を殺してやるっ。その後であいつだ」

俺のほうを一瞥して、手にした透明な剣の切っ先をミスルに向けた。うん、そういうことはとりあえずミスルを倒してから言え。

「御託はいいつ！今度は貴様を貫くっ！」

ミスルが言つと同時にその身体と剣が淡く光りだした。オーラを剣と身体に集中させている。

俺がついさつき教えたオーラの闘法をもうあれだけ使いこなしているのは、よほど鍛練を積んでいるからだろう。ただ……

さつきまでは使っていなかったのか？それとも、使う気がしないくらい戦意がなかったのか？

俺はミシルを見ながらそんなことを思っていた。そして、ミシルが剣と全身にオーラを集中させきったのか、

「行くぞっ！」

と、ジン・ガトウと呼ばれた大男に斬りかかるうとした。その時、

島が、揺れた。

くくく

最古にして最強の鬼族と謳われたデユカ・リーナ様が、何故神獣が転生したばかりのこのタイミングで火喰い島に戻って来たのか、その理由がやっと分かった。つまり、

「その人間の身体の寿命が近いのですね？」

私が言うと、デユカ様は

「その通りよ。まあ、もう一つ理由があるのだけれどね……」

そのもう一つの理由を聞けばそれは……

私ごときではとても力にはなれそうにない話だった……

「でも、安心して頂戴。神獣の血をもらったらすぐに出ていくから、

貴方達に迷惑はかけないわ」

そういうと、デュカ様は何処からともなく短剣を取り出した。

「デュカ様、それは？」

「ああ、これ？黒焰竜の牙を加工したダガーよ。衝撃にはそこまで強くはないけど、かなりの熱に耐えられるわ。大陸の鍛冶師にもらったの・・・闇の大陸のね」

と言って神獣に近づいたがそこで神獣が気配に気づいたのか目を覚ました。

「ピエツ！？」

目の前の少女の持つダガーに驚いたのか神獣が驚いたように鳴いた。

「いい子だからじっとして頂戴。大丈夫。傷つけた所はすぐに治るから」

デュカ様が神獣を手で捕まえてそう言った。熱くは・・・ないのだからうな・・・

シャツ！

と神獣の身体をデュカ様のダガーが一閃し、神獣の身体から血が流れた。

「ピエエエツ！！」

不死の身体とはいえ痛みはあるのだろう。神獣が大きな声で鳴き出



した。

「ごめんなさいね。でも、」

と、言いながらデユカ様が神獣の身体から流れる血を掬って、

「貴方の血が私には必要なの」

と、その血を口に含んだ。

「あら？何ともな・・・ウ、ウアアアアアアッ！」

デユカ・リーナ様が何か言いかけ・・・苦しみだした。  
そして大きな輝きと共に島が揺れた。

~~~~~

なんだったんだ今の揺れは？すぐにおさまったが・・・
聞いた話じゃこの島の奥のほうには火山があるらしいが、今は活動
してないとアズトが言ってたが・・・
火山の揺れじゃないのか？
俺が今の揺れについて考えていると、

「な、この膨大な魔力は・・・そうか！」

ジン・ガトウがミシルとの戦いをそっちのけで門の向こうの方を見
ながら何かに気づいたように驚いていた。

「魔力・・・だと？貴様何を言っている？」

ミシルがそんなジン・ガトウの態度を訝しんで聞いた。

「貴様ら人間には分からないだろうが、私が今感じている魔力は丁度神獣が居るあたりだ……」

と、何故か透明な剣を納めた、いや消した……？

「ほう……それで、何故貴様は剣を納める？」

と俺と同じ疑問を覚えたのかミシルは警戒を解かないままジン・ガトウに尋ねた。

「なに、ここで私が戦う意味が無くなったというだけだ」

と、ミシルから少し距離を取るように離れた。

「戦う意味だと？」

「ああ、危険を冒すのは私の望むところではないからな。貴様ぐらいは殺してもよかったが……」

と、ちらりと俺のほうを見て言った。

「忠告しておいてやるが、貴様らはもう島から出たほうがいいぞ？ どうせこの島の神獣は目的のモノとはちがうのだろう？」

「そうはいかんっ！ 私はあの女を倒すっ！」

ミシルが言った。

「身の程知らずが・・・自分でも分かっているのだろう？貴様の剣では決してあのお方に届かないということを」

「ぐっ！それでも・・・仇が居る場所が分かっているとおめおめと引き下がるかっ！」

「ふっ。そこまで言うなら止めはしない・・・どうせ無駄だろうしな。私は引かせてもらっ」

「待てっ！貴様は逃がすかっ！」

「ふっ、さらばだ。吹雪^{ブリス}！」

ジン・ガトウが叫ぶと、辺りが急に吹雪に覆われ前が見えなくなっ

た。
吹雪が晴れるとそこにジン・ガトウの姿はなかった・・・

「くっ！あの女に続きまたしても・・・」

ミシルが悔しがっていた。

俺は近づき、

「まあ落ち着けよ、ミシル。とりあえず撃退した、と思えばいいんじゃないか？」

「トウヤ・・・そう・・・だ・・・な」

俺が声をかけた途端ミシルが倒れた。

・・・多分オーラの使いすぎだろう。怪我也多いし、あれは加減が難しいからな。

さっきのオーラ量を考えれば捨て身でオーラを集中させていたのは分かっていた。あの剣が当たればジン・ガトウという大男程度ならおそらく倒せていた筈だが、奴が途中で逃げてよかったのかもな・・・
続けてたらミシルもおそらく無事ではすまなかっただろうから・・・

「それにしても、魔力・・・か」

さっきジン・ガトウが見ていた方向を見ながら俺は呟いた。

島が揺れたあと、ジン・ガトウがそう言ったとき俺もその方向を見てみたが、確かに何となく嫌な禍々しい雰囲気を感じた気がしたが、あれが魔力つてやつか？

だとしたら・・・

「ミシルさんっ！トウヤさんっ！無事ですか!？」

敵が居なくなつたと判断したのだろう、俺たちの戦いに巻き込まれないために他の倒れている者やレンジのおっさんを連れて数百m後方の森あたりから様子を窺っていたアズトがこちらに駆け寄りながらそう言った。まあ、多少のとはっちは傍にネクが居るから大丈夫だったとは思うが。

「ああ。いや、俺はともかくミシルはしばらく休憩が必要だろう。オーラを使い果たしているからな」

傷のほうも致命傷じゃなさそうだから、少し寝たら回復するだろう。オーラによる身体強化は治癒力も活性化される。

「そ、そうですね。ではこの辺りで休憩しましょうか」

「そうだな。それでミシルが回復したら・・・」

「ええ。先に進みま」

「他の奴らと合流して島を出よう」

「しょう・・・ええっ!?!?こ、ここまで来て何故ですか?」

「いや、な。一つには目的がほぼ達成されたということだ。当初の目的であるこの島が光った原因つてのは、鬼族の奴の話から判断するとほぼ間違いなく神獣のことだろう。なあおっさん?」

傍に居るレンジのおっさんに話を振ると、

「ああ。小僧の言う通りだ、俺はそう聞いた。神獣フェニックスが居るとな。だからアスト、お前の大元の依頼主にそれを報告しに一度帰り、もし再度くるなら出直すべきだろう。神官を連れて、な」

この目で見たわけではないが本当に神獣フェニックスが居た場合、その扱いに素人である俺達にできることは何もない。神獣、聖獣の類は取扱い注意つてやつだ。それらの扱いを生業とする神官以外のやつが下手なことをすると怪我をするだけじゃなく1つの国を焼き払われる、という逸話まである。

「で、でも神獣はともかく鬼族が実在したということは特殊なモノなどもあるかもしれませんが・・・」

ここまで来たら諦めきれないのかアズトが粘って言う。
俺は、

「確かに何かあるかもしれないけどな。ただ、これ以上進むのは危険が大きすぎる。ここまでは何とか来れたが、これから先はまだ強いやつが出てくるかもしれない。さつきいきなり消えた奴とかな・
・どちらにせよ俺たちは歓迎されてないから、間違いなく襲われるしな。もしこれ以上進むなら神官は別にしてもそれなりの戦力が居ると思うぞ?」

と説得を試みた。

「・・・確かにそうですね。ここまで進めたのもトウヤさんの力に因るところが大きいですしね・・・そのトウヤさんにそこまで言われたら・・・」

と、アズトが諦めたように言った。

そして道具袋から出した狼煙を空に向けて上げた。

第18話 火ノ鳥 (後書き)

ご意見感想あればお待ちしております。

第19話 得たモノ

~~~~~

最初に狼煙に気づいたのはレヴィアスの男性の1人だった。

「リシナ殿。あれを」

と、アリナやユリナと談笑しながら歩いていた私に声をかけてきて上空を指差した。見ると、薄紅色の煙みたいなのが立ちのぼっている。

「？あれは、何でしょう？」

何かこの島特有のものかと思い私は首を傾げた。

と、横に居たアリナが

「あのねえ、師匠・・・最初に班分けするときを決めたじゃない。何かあったときは変わった色の狼煙を上げるって。誰の班かは分からないけど、何かあったからあそこに集合ってことじゃないの？」

と、呆れたように説明した。・・・だって忘れてたのだからしょうがないじゃない。

「も、勿論憶えていたわよ。ホ、ホホホ」

誤魔化すように笑ったがアリナの私を見る目が妙に冷たい気がした。私の威厳のため、



「目測ですが、ここから凡そ2〜3?ぐらいでしょうか?出発点は違っても意外に近づくものですね。」

では、あの狼煙に向かって行きましょう!」

強引に話をまとめ皆を促した。

・・・何故私はこうも忘れっぽいのかしら・・・?

~~~~~

「つまり、だ。ガトウが感じたと言うように、フェニックスの血を吸収したデユカ・リーナ様自身の魔力とフェニックスの血中の魔力が融合し、かつてない膨大な魔力が発生した。その結果、それに反応した火喰い山の地盤が一瞬揺れた、という推測ができる。火喰い山は元々魔力のエネルギーを吸収、放出するものだからな。ただ、現在は死火山だから爆発には至らなかつたのだろう」

回復の間に戻った私は先ほど起こった揺れについて皆に説明した。ガトウもかなり疲弊した様子で戻って来ていた。侵入者と戦っていただけでそこまで・・・?と思っただが、それだけではないだろう。他者の魔力を見ることはできない私ですら、先ほど目の前で膨れ上がっていく光の奔流を視認できたのだ。今、境の門から得意の氷魔法を駆使して最高速で侵入者から逃げてきたガトウなら多少離れていても、先ほどのアレを感じたことだろう。奴は他者の魔力量が分かるからな。戦いの疲労だけではなくアレにあてられたというわけだ。

「そうか・・・いや、そうだとは思ったから私もあれ以上勝敗の不確かな戦いをしたくなかったので、こうして帰ってきたわけだが・・・」

ガトウが気まずそうにそう言った。やはりな。
ロナンが、

「まあ、俺もガトウにとやかく言える立場じゃないしな・・・」
と、言いづらそうに言った。単純に戦闘のみならばこの島で1、2の実力のこの2人がそう言うとは・・・

「・・・それにしても。今回の侵入者はよほど腕が立つのだな」
私がそう言うと、

「ああ、4柱全員でも勝てるかどうかは・・・とは言えデュカ・リーナ様が居らっしゃるので問題はないだろう・・・フェニス？そういうえばデュカ・リーナ様はどちらへ？先ほどこの辺りに感じた魔力を今は感じられないが・・・」

ガトウが私を見ながら言った。期待に背くようだが、先ほどのやりとりを伝えておくか・・・

「そのことだがな、ガトウ。デュカ・リーナ様はすでにこの島にはいらっしやらないのだ・・・」

くくく

突然の目が眩むほどの輝きが消え、神獣とデュカ・リーナ様が居た場所がようやく見えるようになったが・・・

「ふう。何事も起こらないかと勘違いしそうになったわ」

元気がなくぐったりしている神獣と見た目は特に変わっていないように見えるデュカ・リーナ様が立っていた。

・・・いや、

「デュカ様、それは？」

「それ？・・・ああ、これね。おそらく魔力が増大したからでしょう。ようやく元の身体、それも全盛期並みの魔力を取り戻せたのね」

と、私が気になって指した額の角を愛しそうに触った。先ほどまでと違い、色は白から灰色がかったようになり太さは一回り太く長さは倍はあるように見える・・・

「ということは、不死の身体にもなったということでしょうか・・・？」

「さあ？それは分からないわね・・・そうだわ、フェニス。私に全力で攻撃をして頂戴」

「わ、私ですか！？」

「そう。貴方の魔力は中々のものだから、防御や回復の魔法を使わ

ずに生身でそれを受けて身体が再生するか試してみたいの」

「それは構いませんが・・・もし取り返しのつかないことになったら・・・」

「大丈夫。仮に瀕死にまで追い込まれたら、魔法を使うから、死にはしないわ。お願い、自分では試せないの」

「はあ。そこまで言われるのでしたら・・・ハアアア！」

私は魔力を集中させ、デュカ様へ向けて結界を張った。これを圧縮して中の対象物を魔力もろとも破裂させるという私の攻撃魔法のうち最も強力なものだ。

「又ウウウウ！」

「あら？思ったよりもかなり強力なのね。くっ」

結界がデュカ様に向かって収束し、そして、

バンッ！

・・・結界が弾ける音がした。

「デュ、デュカ様！？」

結界を押し潰した跡を見ると、血塗れになって倒れるデュカ様の無惨な姿が見えた。

やってしまったかと思っていると、何事も無かったかのようにデュ

力様が立ち上がった。

「痛たたた。やはり痛みはあるわね。でも、」

と、見る見る内に傷が塞がっていく。

「治癒魔法を使わずにこの治りかたなら間違いないでしょう・・・
ついに手にいれたわ、不死の身体を！」

凄まじいものだ。あれで魔法を使っていないとは・・・と思ったと
同時に私では絶対にデュカ様には勝てないことを悟った・・・

「よ、良かったですね。これで目的とやらが達成できるのでは？」

「ええ、そうね。色々ありがとう、フェニス。」

「いえ。それでもう行かれるのですか？私もガトウが少し心配な
で・・・」

「ええ、早く手を打たないといけないところもあるから。でも、ジ
ンくんのところはそんなに心配要らないと思うわよ。一応牛くんも
置いてきたし、何よりあの子はそんなにリスクを冒さないでしょう
？」

と、ジン・ガトウという男の性格を完全に読みきったことを仰った。
確かに・・・あの男が自分に無益なことや確実に勝てるかどうか分
からない状況で戦い続けることはまずないだろう。牛くんとか置い
てきたとかとは良く分からないが。

「・・・そうですね」

「じゃあ、私はもう行くわ。また会えるかどうか分からないけど、みんな元気だね」

「はい。デュカさまもお気をつけて・・・」

私が言うとデュカ様は微笑んだ。そして、生暖かい風が吹き、その姿が消えた。

~~~~~

私は先ほどのやりとりを皆に説明した。すると、

「うむ・・・何と言ったらよいか・・・私はそんなに計算高そうに見えるのか・・・？」

ガトウが妙に気にしていた。

「そうだな。ただ、やられる心配をしてないと言い換えることもできるかな」

一応そう言っておいた。  
と、ロナンが

「問題はそこじゃないだろう！結局どうするんだ、侵入者どもはっ！？ガトウの話だと近い奴らはすでに境の門まで来ているのだろう？大丈夫か？」

と、指摘した。境の門を抜け数十分歩けば、途中にこの島の大半の者が住む村がある。そこからこの神殿までは歩いて、7、8時間程度といったところか・・・もし何も知らずに侵入者に手を出す者が居たら、やられる危険性は確かに高い。もっとも、侵入者を発見したら誰かしらは此処まで報告しに来るだろうが。

私は、

「・・・何もしない。というより下手につつかないほうがいいと思うのだが？所詮魔力を持たない奴らだろう。仮に神獣の元へ訪れたとしても何もできはしない。それに聞いた話だと、侵入者の人間は此方から手を出さない限り襲ってこないのだろう？やられたのは勝手にしかけた貴様の責任だ。何が暇潰しだった」

と、ここぞとばかりに言った。が、

「ぐっ！だ、だがガトウも戦ったじゃねえか！？」

「・・・言いたくはないが、私はデュカ様のとばっちりを受けただけだ。あとは成り行きだな・・・」

ガトウが少し言いにくそうに言った。

ロナンが、焦ったように

「そ、それなら村の奴はともかく神獣のほうだ！神獣は本当に大丈夫か？」

？ロナンは何を言っている。

「何が言いたい？」

「つまり、だ。俺が戦った奴らの1人に得体の知れない術を使う奴が居たんだが・・・その術っていうのがフェニス、あんたの結界魔法みたいなものだった。魔法じゃないような感じではあったがな。だから・・・」

！！

ロナンの言葉に驚愕した。

「き、貴様！そういう大事なことは早く言えっ！まずいな・・・だとすると話が変わってくるぞ。どういう類のものは知らんが結界めいたものを張れるということは神獣に近づける可能性があるではないか・・・」

やはり、侵入者を何とかするしかないのか・・・？と、私に対応を考えようとしたとき、

「ただ・・・」

ノルエルが何かを言いたそうにしていた。

「なんだ、ノルエル？」

「ええ。何と申しましょうか・・・境の門周辺に感じる20程度のこの大きなプラーナや小さなプラーナ・・・おそらくロナンさんやジンさんが交戦した侵入者のものと思われませんが、此方とは反対側



へ移動しておりますが・・・？」

そのノルエルの言葉を聞いて、この場に居る者が皆首を傾げた。

くくく

狼煙を上げて一時間ぐらい経った頃、まずリシナの班が合流した。

話を聞いたアズトが、

「そちらも災難でしたねえ。ともあれ無事で良かったです」

と言った。

「いえいえ。この子達も居ましたし、何より頼りになる方々もいらつしゃいましたから」

リシナが双子の姉妹とレヴィアスの男2人を見ながらそう言った。

「そちらのほうが大変だったでしょう？・・・魔神ですか。それに・・・」

ちらりとミシルを見た。

「いえ。何でもありません」

と、口をつぐんだ。まあ、アズトがレンジのおっさんや俺から聞いた話を包み隠さず喋ったからな・・・ミシルに関しては触れないほうがいいと判断したのだろう。

と、リシナが、

「それにしてもトウヤさん？貴方が倒したという牛の顔をした生き物というのは牛鬼ぎゅうおにじゃないかしら？」

俺に言ってきた。

「牛鬼？自分では・・・ええっと、鉄牛鬼と言っていたが。似たようなものなのかな？」

「そう。じゃあ、違うのかしら・・・？見た目の特徴なら伝承に聞く牛鬼かと思っただけね。似たような種族なのかもしれないわね」

と、伝承にある牛鬼について語りだした。なんでも、

牛の頭、鬼の身体を持ち、その性質は残虐非道にしてひどく好戦的らしい。その上突然どこからともなく現れるとか・・・まあ、大体合っているが身体が鉄のように固くなるのはどうということなんだろう？奴が言っていた「鉄島」に関係があるのか？

分からないが・・・

「うーん？分からないな。倒したら消えたしな。まあ、鬼族の奴は召喚がどうこう言っただから、死んだかどうかかもしれないからな。あ、・・・召喚ということは帰っただけかもしれないしな。あつ、銀色の奴はまだ死体がそのままあると思うぞ。帰りに寄ってみよう」

「銀色の金属らしきものね。見てないので詳しくは分からないけど、もしかしたら呪術とかその類の性質のものかもしれないわね・・・出来たら持ち帰って詳しく見てみたいわ。ね、ユリナちゃん？」

リシナが横に居た双子の妹に聞くと、ユリナは頷いていた。

「へえ。お前そういうのに詳しいのか？」

俺が聞くと、

「・・・うん。アリナよりは」

と、自分の姉を見てそう言った。その本人は、

「ま、まあね。あたしはそういう知識とかあんまり興味ないから」

ハハハッと、焦ったように言った。

「ネクも詳しいよな？」

俺は昔馴染みの勤勉な姿を思い浮かべながら話を振った。

「まあ、あんたよりはね。でもあの銀色がどういう原理で動いてたかはよく分からなかったけど・・・とにかく持って帰りましょう」

「そうだな。それにしても、風の魔法？そっちも面白そうな相手だったんだな？」

俺はリシナ達から先ほど聞いた話を振ってみた。

アリナが、

「そうよ！強かったんだから！でも、あたしも・・・」

そうやって、お互いの体験した話などを喋っていると、もう1つの班であるガルディアのところの副団長率いる奴らが合流した。

そいつらは道に迷っていたらしく、狼煙が上がって助かったと言いながらここへ来た。

ガルディアが、

「貴様らはまったく・・・それでも我が探索団の一員かつ!?副団長まで居ながらなんという体たらくっ!そもそも方位磁石で照らし合わせれば入口から反対側へ・・・」

説教をし始めた。

副団長らしき男がそれを聞いて、

「お言葉ですが、キャプテン。道に迷ったには理由があるのです」

「理由だと?そんな言い訳をっ!」

「言い訳ではなく・・・その、何といたしましょうか、我々が進んでいた森の途中の洞窟でこれの大きな鉱石を発見したのです」

と副団長が手に持っていた小石をガルディアに見せた。

「これだと。見せてみる・・・!これはっ!?」

ガルディアが副団長から小石を受け取り眺めていたら驚きの声を上げた。

なんだ?

「まさか、金鉱石だっ?」

「そうです。このくらい大きな塊が洞窟内に無造作にありました。あまりに興奮した我々は、洞窟から出たとき自分の居場所を見失い道に迷ったというわけなのです」

副団長が手振りを交えながら説明した。両手を広げたぐらいの大きな金鉱石の塊だと？

何万丸の価値があるんだ・・・

「ふむ・・・確か船に手押しの手車は積んでいたな？よし急いで船まで戻るぞっ！」

「待って下さい！ガルディアさん」

興奮した様子のガルディアを引きとめたのは、やはりというかなんというか、アストだった。

「・・・何か、アスト殿・・・」

しまった、という顔をしたあとでガルディアが言った。

「当然、我々で山分けですよね？」

にこにこ顔をしながらアストが聞いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・勿論だ」

俺達を見まわしながら、渋い顔でそう言った。

こいつ・・・依頼主からの依頼料だけでなく金鉱石まで手に入れるとは、相当儲かったんじゃないか？

金鉱石というのは、言わずと知れた金の材料でその希少性からかなりの価値がある。火の大陸では主なところで最も価値のある通貨の10000丸がんや、宝剣、金持ちの家の装飾などに使われている。

その後、一旦台車を取りに船に戻った俺たちは副団長の案内で金鉱石の塊がある場所へ行き、それから銀色の死骸？も回収して島を後にした。

くくく

くくくくく

生暖かい風が吹いた、と思ったら誰かがすぐ其処に立っていた。それに気づいた自分は隣に立つ相棒へ声をかけた。

「お、おい。誰だ。お前の知り合いかつ!？」

自分がそう言うと、その黒いローブを着た存在に今気づいたのか相棒は、

「ん?・・・なっ!?!誰だっ、貴様!？」

と焦った声を出した。

見てみると・・・ヒト・・・?

いや、ヒトの身でここに来れる筈がない・・・と思い直した。

「貴様、何用だ！？ここが我が主の居城と知ってきたのかっ！？」  
自分も尋ねてみた。  
すると、

「ええ、勿論。用事があつて来たの。預けていたモノを返してもらいにね……」

……やはりヒトらしき少女の声でその来訪者はそう言った。  
だが、

「預けていたモノだと？貴様のようなヒト如きが我が主は何をお貸ししたというのだっ！？」

自分がそう言つと、そのヒトらしき少女は

「そうね……正確には物じゃないかしら……」

自問していた。

「うーん。屈辱、敗北、……そして消滅。っていうところかしらね、返すものは。まあ、それでも私に与えた割合としては4人の中で一番少ないほうだとは思つから、少しぐらいは手加減してあげましようか」

？独りで何を言っている？

「どづいつことだっ！？」  
「たまらず聞いてみると、」

「あらあら、<sup>ワウウルフ</sup>人狼の知能じゃ理解は難しかったかしら……平たく

言うつとね、殺しに・・・滅しに来たの。貴方たちの主人、アルカードをね。」

と、微笑みながら同時に尋常ではない殺気を身に纏って少女が言った。

「ぐっ、くっ・・・何故だ!? 貴様はヒトではないのか? それも年若い・・・我が主は少なくとも1000年はこの城からお出になつてはいない」

と自分は我が主の居城ヴァニア城を見ながら言った。

「そうねのね・・・まあ、此処は闇の大陸から遠いしアルカード如きの実力じゃ覇権は狙えないか・・・私を倒したあとは引きこもっていたのね・・・」

と、我が主を侮辱した!

「き、貴様! 殺す!」

「ウオオオオオオ!」

相棒と同時にその少女へ襲いかかった。

「まあ、手始めに全滅させましょうか。ネイルツ!」

少女がそう叫ぶと手に持っていた銀色の杖が巨大な刃に変化し、それを自分と相棒へ無造作に振った。

ズシャッ!



そして、相棒と自分の身体が真つ二つになった。  
自分が最期に見たものは・・・薄く笑う少女の顔の上部に生える灰  
色がかった大きな角だった・・・

「ふむ。やはり発動時間も段違いに早くなっているわね・・・人狼<sup>ワーウルフ</sup>  
の動きより早いつて・・・」

と、少女デユカ・リーナは、にやりと口を歪めて城の入口へ向かっ  
た。

第19話 得たモノ (後書き)

ご意見感想あればお待ちしています。

## 第20話 縁

~~~~~

スサノオ城城内

「なるほどのう。まさか神獣とは。何かしら対策を練るべきかの・
」

シバ・ウチカネが手元の報告書を見ながら唸っていた。

その報告書とは、2週間ほど前に鬼ヶ島（住民である鬼族は火喰い島と呼んでいたらしい）辺りに発生した謎の光の調査で、鬼ヶ島から近いイグナで中々の敏腕と評判の良い行商人（アズト・ミタラと言うらしい）に依頼料上乘せで依頼したものだ。

大まかな内容は、島への滞在期間3日の間、実在した鬼族3人と出会いアズト・ミタラが雇った者たちが交戦した結果、これを撃退し、その際の会話で、謎の光の正体は神獣だろうという結論が出た、というものだ。・・・いや、何というか雑過ぎるでしょ！だらうって、何？確認もしてないわけ？

・・・まあ、所見には鬼族が得体の知れない様々な技を使い、魔神と伝え聞く存在とも出会い、戦力が不足していた、ともあるけれど・

もつとも、完全に依頼達成というわけじゃないから依頼料は大幅に値引きしたけどね、私の権限で。それは仕方ないでしょ、戦利品と言えば実在した鬼族の存在と銀色の金属（動いて攻撃してきたって話だけど嘘臭いしね）だけだもの。

腑に落ちないのは、値切ってもアズト・ミタラが特に食い下がらな

かつたつてことね・・・報告を信じるならばそれなりに危険な任務だったのに・・・(仮に報告内容が虚偽ならば再度警備兵とかに調べに行かせればすぐに判明するからさすがにそれはないでしょうが)何か隠している・・・?

「それにしても、ヒノカにトゴウか・・・」

「なんじゃ、姫?何か気になるのか?」

シバが、私の呟きに気づいたのか、聞いてきた。

「いえ、ね。そのアズト・ミタラの報告書の中に出てくる調査に参加した人物の名前、というか名字が気になっただけなの」

他のところは知らないが、火の大陸での名字には、それなりに意味を持つものがある場合がある。もちろんただ付けただけというものもあるが。

255年前に私の御先祖が大陸を平定するより前からこの大陸には象形文字つまり文字そのものの形が意味を為すという所謂、火語（ひことば）が共通の文字として使われているが、その文字はかなり昔には人名として使われていたそうだ。

例えば現代の名字を火語を当てはめてみると、シバのウチカネは(打鉄)ガロウのサイハは(碎刃)というふうになるだろうと思う。

(ちなみに初代スサノオというのは名字ではなく名前がそのみだったが平定を記念して、後の世代へ名前を繋げるという目的で名字扱いへ変更したと、我が家のみに伝わる伝記に書かれていた)だからヒノカというのは、火ノ牙?トゴウというのは、斗剛?と置き換えることができる。

何故この文字が不意に浮かんだのか?これも我が家の伝記それも初

代覇王のスサノオの手によるものだが、その中の「大陸平定貢献の武人」のところの自らの最強の仲間、三大英雄という箇所に火語で、火ノ牙、斗剛、羅義、という文字があったからだ。

これを現代風に読むと、ヒノカ、トゴウ、ラギ、と読めないこともない。

まあ、確認のしようもないが。ただ、もしそうだとしたら私を入れてかつての最強の仲間同士だった者の子孫が3人も居るというのが集まれば何だか大きなことができるような気がする。全大陸統一とか・・・まあ、夢物語ね。

「それよりも儂が気になるのは、神獣をどうするかじゃが・・・」

シバが真面目にそう言った。正直私は政務よりも直接その島に行ってみたいのだが・・・

「神官と警備兵の混合部隊を作ってみるといのは？」

行きたい気持ちをおくびにも出さず、とりあえず私も真面目に提案してみた。

「うむう。今はのう・・・」

「まあ、そうよね・・・」

言ってみただけなので却下されるのは勿論分かっていた。何しろ今は・・・

「神剣はまだ見つかる目処が立たないの？」

カグツチの神官は全て神剣探しに奔走しているからだ。火の大陸で

は神剣にしろ神獣にしろ神と名のつくものや聖剣や聖獣と聖と名のつくものは全て神官を通じて探したり取り扱ったりしている。だから魔物が強力になってきている今、その要因が神剣にあるのでは？と先週の報告から推測した私たちは神官たちを全て大陸の南のほうへ調査させに遣っている。

「まだじゃな・・・」

「そうよね・・・じゃあ、水の大陸のレ、レヴィアス国？の神官、みたいな立場の人に依頼するというのは？」

「・・・姫。確かにカグツチとレヴィアス国は交流があるが、そもそもレヴィアス国に神官が居るかどうかも分らんのだぞ。

それに神獣の力を別の大陸の者に奪われる可能性もあるので、どちらにせよそれは無理じゃな・・・」

「そうか。そうよね・・・じゃあ、とりあえずこの件は保留ね。神剣が先だわ」

「そうじゃな。まずは神剣じゃ」

と2人して頷いた。

くくく

くヴァニア城城内く

「この魔力・・・!?!?」

城の一室。

そこでは1人の男が呟き、何かに驚いていた。

この男、名をアルカード・ブラッディワウルフと言い、数千年の時を生き人狼族の長をしている。この男、元々人狼ではあるが、生まれ持った魔力と特殊能力、その野心、知能、から人型の姿のまま人狼一族を統一し、此処（血沸き島）に自らの領土、居城を築くにまで至った。だが、生まれ持った強さも外界には上が居る、と悟った時よりそれを行使せずにもて余し、持っていた野心も薄れ居城に閉じこもっていた。

そう、100年ほど前に自らも参加した戦いの際に他者の強さを悟った時より・・・

ドンツ!!!

アルカードが何かに驚き呟いてから間もなく自らが居る部屋の扉が噴き飛んだ。

「なっ・・・!?!」

驚いて扉が元々あった場所を見るとそこには、

「久しぶりね。いや、この姿では初めましてと言いましょつか、ワ
ンちゃん?」

と、異常な魔力を身に纏って立つ見覚えのない顔の人らしき少女が
そう言った。

~~~~~

以前よりもこの城の主の小心者ぶりに磨きがかかったのか、城に正面から侵入しただけで数百体の人狼が配置ワウルフされていた。そして、おそらく亜人特有の勘なのか、こちらの姿を見るや害を為すものと思われ1体の例外もなく襲いかかってきたが（勿論全て返り討ちにした）。それとも、この城の小心者の主、アルカード・ブラッディから見知らぬ者は全て排除しろとか言い含められていたのかも知れない。かわいそうに。仕える主を間違っただらう、結局全滅したのだから。

それで、この城の最上階の方に以前感じたよりも多少強力になった魔力を感じるが・・・おそらく目的の者はそこに居るのだろう。

そして、その者が居ると思われる部屋の扉を無造作に噴き飛ばした。部屋の中の者が、

「なっ・・・!?!?」

と驚いていた。私は、

「久しぶりね。いや、この姿では初めましてと言いましょうか、ワ  
ンちゃん?」

と言った。するとアルカードが、

「き、き、き貴様はだ、誰だっ!? ニンゲンかっ!? 何をしに此処  
に来たっ!?!?」

と私に言った?・・・ああ、成程。

何故そんなことを言われたか考えた私は納得し、被っていたフード  
を脱いだ。



「き、鬼族だと!?!」

私の額にある角を見て判断したのだろう、そう言った。

「!?!ま、まさか貴様は奴の手の者かつ!?!それで私に復讐をしにきたとでもっ!?!」

「奴?誰のことを指しているのかしら。それに復讐?ワンちゃんは何か復讐されるようなことをしてかしたのかしら?」

「ワ、ワンちゃんだと...?今までそのようなふざけた呼び名でこの私を呼ぶものは皆殺しにしてきたが...貴様は、鬼婦神きふじんの縁ゆかりの者ではないのか?」

「うーん...ワーウルフ人狼族の中では飛び抜けた知能を持つアルカード・ブラッディと言っても所詮はワンちゃんか。魔力の波動の種類とかは分からないものなのね...それに鬼婦神きふじんか...その名前も随分久しぶりに聞いた気がするわね。まあ貴方の言うことはそれほど間違っではないと言えは言えるわね。鬼婦神の縁の者と言えは私ほどの縁の者は他に何処を探してもいないでしょうからね...」

「どういう、ことだ?」

「どういってもこういっても簡単な話よ。私がその鬼婦神、デユカ・リナそのものだというだけ」

「!?!?そんなバカな...奴はあの戦いで消滅したはずだ...」

「ええ、そうね。貴方が、貴方達がそう思ったのも無理はないと思うわ。実際私の以前の肉体は貴方達のおかげで消滅してしまったの

だから・・・でも、中身はまだこの世に留まっていた。それである時近くにいたこの身体を持つ少女に乗り移って転生したというわけ？分かったかしら、ワンちゃん？」

「以前の肉体・・・転生・・・」

「それと、ワンちゃん？貴方はもう一つ正しい事を言ったわ」

「な、なに？なんのことだっ」

「何をしに此処に来たか・・・貴方が先ほど言ったように・・・  
・復讐よ」

私は言い、最大限に魔力を集中させた。

「ちっ！グオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

アルカードが吠えながらその身体を人型から人狼型へと変貌させていく。  
そして、

「あらあら。小心者で仲間も居ない貴方の割には頑張るわね？いきなり切り札を使ってくるなんて」

その手には刃が赤く染まった剣が握られていた。

「貴様を消すのに躊躇いなど不要っ！！！！」

「そう。あの時も不意をつかれたとはいえその剣に吸われた分は結構大きかったのよね・・・」

アルカードが持っている剣は、吸血剣トレインフリンツェと言い、その特性は斬った対象物の血、血中に含まれる魔力を吸い取り、その魔力は使い手に柄から吸収される。100年程前に私は最初にこの剣で斬られ思った以上に魔力が吸い取られた。アルカードが生まれつき持っていた牙を加工したもので、人狼型にならなくても使えるというメリットがあるため、自らの牙を折って作った1点物だ（そもそもアルカードが人狼族の中でのし上がったのには、知能などよりもこの牙の持つ特性に因るところが大きい、と思っている）

「けど、今はこれがあるのよ。ネイルツ！」

嘆きの杖の剣形態で吸血剣ごとアルカードを横薙ぎにした。だが、

ガギイイ！

両手持ちにした吸血剣に受け止められる。

「へえ。貴方強くなった？前は魔力が弱った私にすら噴き飛ばされてたのにね」

魔力が全盛期並みにある、私のネイルを受け止めたので素直に称賛した。

そうして剣の押し合いをしていると、

「……この100年このアルカードが何もしていなかったと思うなよっ！」

「……でも、この城にずっと居たのでしょっ？」

「フンツ！確かにそうだが、同胞の生贄を糧に私は強くなったつ！」

「……………貴方、同じ種族を斬つたの…………？」

「そうだつ！私とて、ずっとこのまま此処に留まっているつもりなどないつ！もう100年、200年かけて魔力を高め、いずれは闇に打って出るつもりだつ！」

「…………そう。一応野心は捨ててなかったのね…………」

「当たり前だつ！なに、もう少し魔力を高めればいずれは奴らにも匹敵するほどの強さになるはずだ…………そうなれば」

「残念だけど、それは無理ね…………」

「なんだとつ！貴様如きに何が分かるつ！」

「分かるわ。だって、貴方は今日此処で死ぬのだから。獄裂つ！」

↑ルバースト

バアアアツツ！！

私は杖の先に魔力を集中させ強大な魔力を破裂させた。

嘆きの杖は使い手の魔力を吸い取りより強力になる。その上吸い取った魔力を増幅させ放出することもできる。ただ、魔力の消費量が大きいのでそれなりに強い相手ぐらいにしか使わないが…………

「グハアツ！こ、こんな…………」

左半身が嘔き飛んだアルカードが此方を見て怯えていた。

「あらあら、その様ではもう戦えないかしらね？ワンちゃん、かなり強くなつたはずなのにねえ」

「ま、待てっ！た、頼む助けてくれっ！」

「へえ。命乞い？・・・そうね、3べん回ってワンと鳴いたら考えてみようかしらね・・・」

「なっ！？き、貴様っ！・・・」

そう言うと、アルカードが激昂した。かに見えた、が

「・・・・・・・・・・ワンッ！！！」

3べん回って鳴いた。

「くつくくく、あはははははははははっ」

お腹がよじれそうになった。

アルカードは羞恥によるものなのか顔が真っ赤になっている、よう  
に見えた。

「はあ、はあ、可笑しかった」

「た、頼む。貴様、いや貴方の言う通り回って鳴いただろ？ゆ、許してくれっ！そ、そうだ！私を仲間にしてくれっ！奴らと共に戦おうではないかっ！？」

再度、懇願してきた。だが私は、

「仲間ねえ……私が言うのも何だけどその身体で？」

「こんなもの、部下を何体か斬り魔力を吸えば元通りに再生するっ！頼むっ！私を仲間にしてくれっ！」

「……ふう。分かったわ」

「本当かつ！？」

「いいえ。違うの。ごめんなさいね……ハアアア！」

「！？ち、違うだとっ。そ、そ、それに何故魔力を高めて……？」

「……自分のために同族を殺すような者はいつか必ず裏切るわ……  
そんな者を仲間にするわけにはいかないということがわかったの……」

「ま、ま、まで、た、頼む……！」

その言葉を見捨てて私は手に魔力を集中させた。

「さよならね、<sup>ヘルブレイズ</sup>獄炎っ！」

「お、鬼いつ！ギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

アルカードは断末魔の叫び声を上げた。

カランツ

アルカードを塵になるまで焼きつくしたが、吸血剣は燃え尽きなかった。よほど今までに血や魔力を吸い取ってきたのだろう・・・同族の・・・

私はそれを拾い、

「ふう。まずは1体か・・・思ったよりも魔力を消費したわね。私一人で残り全員はきついな・・・」

他の復讐すべき相手の顔を思い浮かべて嘆息した。

「やはり、駒は必要よね。あの人間とかはどうかしら・・・  
・・・それにしても、鬼って・・・今更よね・・・」と、先日会った人間の顔を思い浮かべ呟きながらその場を後にした。

~~~~~

あの島から戻って1週間・・・俺はアストがレヴィアスへ行く準備を整えるのを手伝っていた。いや、レヴィアス滞在中の生活費を全部負担するとか言われたら、ねえ・・・それにあの島の調査の報酬や金鉱石で余程儲けたのか尋常じゃない量の仕入れをしているところを見ると、あの島での報酬みたいに手伝い費や用心棒代も上乘せしてくれるかも？という甘い期待もある。

ちなみにあの島の最低報酬は1人3000丸だったが、実際もらったのはその10倍近くあった・・・29500丸も・・・何故か諸経費で500丸引かれていたが、そこは抜け目がないと感心した。まあ、金鉱石を山分けしろと言い出させないため、ということもあるだろうが。それでもアストはいくら儲けたんだ・・・推測だが数

百万丸ぐらいか・・・？まあ、別に俺はこれで数カ月何もしなくても暮らしていけるから良いが。

と、ほくほく顔で港に停泊するアズトの船（速度は大分落ちるが結局ガルディアの船で牽引して行くことになったらしいのでこれに荷物を積んでいる。おそらくだがアズトが予想より遥かに仕入れ物の予算を増やしたので、また相当儲ける気で・・・）に荷物の積込をしていると、

「トウヤさん、ミシルさん、そろそろ休憩にしましょう！」

と、俺の雇い主のアズトが声をかけてきた。

「ああ、そうだな。腹も減ったし」

俺が言うと、

「了解した」

ミシルも手を止めた。

「あ、御飯はネクさんが戻ってからですよ」

何っ！ネクの奴まだ帰ってないだと！どうしてくれる！俺の腹・・・

あの島から無事に帰ったあと、俺、ネク、アズト、ミシルはイグナを拠点とし、ガルディアの国へ行くための準備をしている。レンジとリクオのおっさんは暫く休業し、ある程度休んだらまた仕事を再開するそうだ。リシナと双子の姉妹は帰って修行をしたり過去の文献を探したり（鬼ヶ島にまつわる文献らしい）するらしいのでこれ

もまた暫く仕事は休業すること（まあ、全員予想外に報酬があったからな）

ガルディア率いる探索団はアズトがなるべく多くの種類の火の大陸の物を持って行きたいので10日は準備期間をくれと頼んだところ承諾し律儀にイグナの町に滞在して待っているらしい。つまりあと2〜3日で当分この大陸に帰ってこれなくなる・・・飯は何を食い溜めしておくか・・・持っていく食い物もそろそろ考えておいたほうがいいな・・・

と、空を見ながら物思いに耽っていると、

「はあ、はあ、はあ。た、だいま！」

ネクが大量の書物を抱えて息を切らせながらようやく港に戻ってきた。
俺は、

「ネク、心配したぞ！」

「えっ？トウヤ・・・そんなにあたしのことを？」

「ああ、当たり前だっ！お前が帰って来なかったら俺の飯はどうなるっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かすごい冷めた目で見られた。

「ま、まあネクさんも戻って来たことですし、御飯を食べに行きましようっ！」

「おー！」

「了解した」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何故かネクがまだ冷めた目で俺を見ていた。

~~~~~

「ああ、あつたわ。そうそうこれですよ、この表紙ですよ」

私は、鬼ヶ島（本来は火喰い島と言うらしい）から家に帰って来て約1週間、トゴウ家の書庫で昔見た覚えのある書物を探していた。もっとも見たのは子供の頃録に文字も読めずに絵が描かれていたのでばらばらと眺めただけだったと思うのだが。

双子の弟子に稽古をつけたり自らの修行の合間に時間を見つけてはその鬼ヶ島について書かれた物を探していたのだが、ついに見つけた。

「えっ？これは・・・」

その書物を作成した人に絵心があったのか、見覚えのある表紙の書物を見つけて少し興奮していたが・・・

「島の絵・・・？」

その書物の表紙には、つい数日前に見た鬼ヶ島の入口辺りの特徴あ

る形の絵が描かれていた。

「ということは、これを作成した人は鬼ヶ島に行ったことがあるのかしら……」

仮に行かなくても絵は描けるかもしれないが、おそらく実際に見ないところまで細部を上手く描けないのではないかと……と、思いながら頁を捲っていくと、

「……記録？」

そこには、約一ヶ月に及ぶ鬼ヶ島の滞在記録が書かれていた。半ばあたりまで読むと……大まかな内容は、作者が持つ自分の特殊な能力を見込まれ誘われてその誘った人物と共に未知の場所である鬼ヶ島へ行き、そこに住む鬼族と出会い戦った、というものだった。

「まあ、あの鬼族も言っていたものね。以前にも人間の侵入者が居た、と。こういう記録があっても不思議じゃない……か」

だが、と疑問に思う。

あの鬼族と出会い戦って無事に帰れたのか？と。

確か侵入者は全員倒したというようなことを言っていたような……

「まあ、創作の可能性も……」

だが、この作者が交戦した鬼族の名前にジン・ガトウという文字を見つけたときそれはない、と考え直した。あの方達が戦った鬼族がその名前を名乗っていた、と聞いたからだ……

さらに読み進めると、

「戦って引き分けた結果、互いの領土へは不可侵の約束……もし、これを破った場合は武力行使……そんな話は初耳だわ……」

これは何の話でしょう？ 本当にあの島で起こったことなの？ 一体いつ頃書かれた書物なの？

と、作成日時の頁を見てみると、

「歴元年……？」

つまり、スサノオが大陸を平定した年？ 254年前に書かれた物？

さらに最後のほうにはこう書かれていた。

「……我々はその島に住む最高齢の鬼族と話した時に驚くべき話を聞いた。なんでもこの島に住まう住民の祖先を辿れば我ら大陸と源流を同じくす、と。つまりこの島の鬼族の最古の者は火の大陸の人間だったのではないかと。もっともかなりの年月、それこそ数万年前まで系譜を遡って調べなければ立証は不可能だが。ただ、そう考えれば我々人間と亜人と呼ばれる異形の者たちがいつの日か手を取り合える時が来るのかもしれない」

！？

鬼族の祖先が元は人間！？

そして、その書物は最後にこう締め括られていた。

「私は大陸平定に貢献した、と自負している。その私の人と異なる力を後の世に残すため、大陸の王となった我が友のため、愛しい妻、そしてまだ見ぬ我が子のため、我が妖術の体得方法運用方法を巻物に別に記した。妻よ。身重のお前に我が儘ばかりですまないがその巻物を私の父に届けて欲しい。私はおそらく帰って来れないだろうから・・・だが、私は行かねばならない。闇に堕ちた我が友を救うために。」

最後に・・・幼い頃からこの力により迫害されてきた私に人として生きる喜びをくれてありがとう・・・最愛の妻へ・・・愛を込めて

斗剛 一弥

と・・・

第20話「縁」(後書き)

ご意見ご感想あればお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

---

剣盗りモノガタリ

2011年12月7日01時45分発行